
夢魔

阿万之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢魔

【Nコード】

N7462X

【作者名】

阿万之

【あらすじ】

佐伯由麻は仲間と共に学校に隠されてあつた鏡を興味本位で覗いてしまう。それが悪夢の始まりになるとも知らずに……

遙のことを考えると気持ち重い。由麻は彼女のことを大親友だと思っていたし、絶対に二人で帰ると約束したからだ。

背後にはまだ鈍男がいたし、目の前には吸血様が大きなマントを広げて優雅に構えていた。

響はやられてしまったのだろうか。彼女は恐怖で涙を流した。

響。響はどこ？ 彼がいなかったら、こんな不条理な世界でどうすればいいのだろうか。

笑い声を上げ、吸血様が動いた。

この世には狂気の世界があり、見え隠れしているが、多くの人間はそれには気づかない。だが確実にそれは存在し、もう一つの世界を垣間見ることがある。それを見た人間は、特別な人間かもしれないが、大抵の者はそれに気付かない。

それは別に霊の世界とか、地獄だとか、闇の世界や地下の世界や、別次元の世界のことではない。それは誰しもが垣間見る世界であり、誰しもが訪れる可能性のある世界である。

公立西蘭高等学校に通う佐伯由麻は二年生のわりと普通の生徒だ。髪はセミショートで、背は低い。胸は小さいが気にしていない。それなりに明るいい性格をしている。友人には市谷遥いちがやはるかという由麻よりも幾らか背が高く顔は一般受けする柔らかな顔で、髪型はポニーテール。由麻より遥のほうが胸の発育がよかった。二人ともそんなことは気にせずに毎日たわいもないお喋りを繰り返していた。

最近由麻は学校が退屈に思えてきて、少しモチベーションが下がっていた。成績は段々と下がるし、あまり友達も多いとは言えない。遙との会話だけが学校での楽しみといえた。

由麻は男子からさほど受けがいいわけではなかったが、中学時代に一緒だった沢登響さわのぼるひびきだけは別だった。彼は気さくに由麻に話しかけてくる。男子に話しかけられるのが苦手な由麻は、だが内心では悪い気はしていなかった。

なんとといっても響は顔がいい。背が高く、スマートな体型をしている。優しい、爽やかな性格をしていた。だからなのか響は女子に人気があり、その響に気さくに話しかけられる由麻はある意味一目置かれていた。

「おはよう由麻」ショートホームルームが始まる前に今日も響は由麻に気さくに声をかけた。

「おはよう響。昨日は楽しかったね」

「そうだな。また今度いこうぜ」

昨日は遙を誘って三人でボーリングをしたのだ。半分はクラスの女子に対するあてつけ。もう半分は純粹に友人として楽しむため。

「おはよう響くん」遙はおずおずと響に挨拶する。

「よう。次は猛練習しないと。スコア百くらいはいけよ」

「へえ、お前達三人で楽しんできたのかよ」響の友人の湯原貴春ゆはらたかはるが会話に割り込んできた。短い髪を後ろになびかせるように立たせて

いる彼は響とはタイプの違う、無骨な顔をしている。背は響より低い
が肩幅は少しがっしりしている。

「貴春も今度こいよ」

「いいのか？」

「男女比は一緒のほうがいい」

勝手に決めんじやねーよバカ響。由麻は苛立たしい気持ちになつた。貴春なんてよく知らない奴と一緒になんて……でも、いいかも
しれない。友人を増やすすいチャンスだ。男友達なんてそれこそ響く
らしいしかない。そう思うと苛立ちがふつとなくなった。

「どうせなら繁しげの奴も誘つていいかな？ ついでに繁しげの彼女も誘つ
て」

「いいねえ。三対三で勝負できるわけだ」響は興奮していた。

「ねえ、あたし下手だから、お荷物になっちゃうよ？」遙が慌てて
口を挟んだ。

「いいさ。ハンデつけることもできるし」

結局六人になった。由麻は少ししらけてしまったが、まあ、いつ
かと思うことにした。

「なんだかごめんね遙。勝手に決められちゃった」

「うん。でも人数多いほうが楽しいかもね」

遙がそれでいいなら由麻もそれでよしとすることにした。

ボーリングは思いのほか盛り上がった。由麻と遙と響のペアと、貴春それに内藤繁、その彼女である高橋香住のペア。由麻のチームの主力は響で、相手は貴春と香住が上手かった。内藤繁と香住は仲のいい恋人同士で由麻は二人のことを羨ましく思っていた。

何回も試合をしたが、結局響が活躍したおかげで由麻たちのチームが勝ちを制することができた。敗者は夕食を奢ることになっているので、六人はボーリング場を出て近場のファミレスへ向かった。途中で突然繁が足を止めた。

「どうしたの？」手を繋いでいた香住が気にとめた。

「俺学校に忘れ物した。今から戻るよ」

「なら俺達も行くよ」響が言った。

「いいって。別に大したもんじゃないし。そういえば学校って言えば、あの噂、知ってるか？」

「何の」

「学校の旧校舎にある鏡。その鏡を覗くと別の世界に行けるって話だぜ。それで、戻ってこれないんだってよ。マジ話。超怖いだろ」

「旧校舎の鏡の話は有名だよな」と、貴春が言った。

「面白そうだ。行って見ようぜ」響が大いに興味を持ったようだ。

由麻は面倒なことになったと思った。学校なんて戻りたくない。

ましてや旧校舎なんてただの廃屋だ。夜の旧校舎なんて不気味そのものじゃないか。しかし、結局その場の空気には逆らえず、足は学校へと向かっていった。

夜の旧校舎はいつも以上に不気味だった。由麻は唾を飲み込んだ。昼間ですら旧校舎に忍び込むというのは一種の肝試しのような行為で、一部の者たちが興味本位で行ったりするのだが、大抵は青ざめた顔で戻ってくる。昼を夜に変える雰囲気とその廃屋にはあるのだ。

空いている窓に六人は忍び込む。懐中電灯の光を頼りに進み、問題の鏡を発見した。使われていない美術室の隅に、その大きな鏡台はあった。

「こんなのどうでもいいよ。早くでようよ」遙が震える声を出す。由麻は鏡をまじまじと見る。大きな鏡台は由麻の上半身を映していた。ぼんやりとした自分の姿はなんとも不気味だった。顔は綺麗だけどと由麻はにんまりしてみる。だが微笑む自分がどこか不気味だったのですぐにやめた。

「光の加減が悪いんだから」由麻は呟く。

「はあ？ なあ繁、これが言っていた鏡か？」響は嬉しそうだ。

繁もしげしげと鏡台を眺めた。「そうじゃ、ないかな」

どうも繁の顔色が青ざめているように由麻には見えた。無理もない。これがもし言っていた鏡だとしたら……。

「ねえ、これに映るとまずいんじゃないの？」由麻は今更不安になった。

「大丈夫。キャンディマンって五回唱えないと何も起こらないよ」貴春がふざける。

「何それ？ ね、帰ろうよ。気持ち悪い」香住が繁の腕を引っ張る。なんだか気持ちの悪いなと由麻は思う。これは本当に気持ち悪い。怪談話になるのも無理はないと思う。だがこれだけ不気味な鏡なのだ。誰かがこの鏡台を見てそんな怪談話をでっち上げたということもありえる。それだったら、単なる作り話で終わる。まあ、どっちでもいいからさっさと引き上げたい。こんなところは嫌だ。

「どうすれば鏡の世界にいけるんだよ？」響が嬉々とした面持ちでたずねる。

「鏡に触れるとやばいらしいな」繁が声を低くしていった。思わせぶりなのではなく、本気で怖がっているように見えた。

「へえ」響がそういうが早い手が鏡につけた。

「大胆な奴だよ」貴春もそれに続いて手を鏡に触れる。

「ほら、二人も」

響は由麻と遙の手を取って鏡につけた。遙が小さな悲鳴を上げた。
「響、ひどいよそれは」

由麻が抗議すると響は笑った。「大丈夫だって。ほら、何にも起
こらなかつただろ？」

「だからって……遙は怖がりなんだからね。あんまり怯えさせない
で！」

響はいつものように微笑を絶やさないでいる様子とは違って変わ
って今にも泣き出しそうな遙を見て、多少罪悪感を覚えたようだ。

「ごめんな。ちょっととした冗談だったんだ。悪かったよ。もう出よ
う。気分直しに明るいところで飯にしよう。遙には俺がチヨコパフ
エ奢ってやるよ」響は遙の頭を撫でた。

子ども扱いすんなよ。由麻は呆れた。

四

ファミレスでは楽しい雰囲気になり、由麻や遙の機嫌もなおった。由麻は香住と仲良くなった。彼女とは意外にも気が合い、由麻は今までの彼氏もちの女子に対する偏見を無くすことができた。相手に恋人がいようが友達にはなれるのだ。香住は彼氏もちを鼻にかけることはせず、とても大らかな性格をしていて、好感が持てた。

帰りは十時になった。それぞれに別れをつけ、由麻は家路につく。帰り道は遙と一緒に帰った。中学校からの付き合いの二人は家が近い。二人で一緒に帰り道を歩くのはいつものことだ。

「楽しかったけどさ、旧校舎には入りたくなかったよ」

「ねえ。でも響君はすごい人だよ。あんなところに普通に入っていきけるんだもん」

「馬鹿だよ。あいつの彼女になる人は大変だろうな」

遙はうんと頷いた。

「でも楽しい人だと思うよ」

前々から思っていたが、遙は絶対に響の悪口を言わない。誰の悪口をいうわけではないが、響のことを話すときはなんだか彼に甘いような気がする。まあ、どうでもいいんだけど。遙なら可愛いし、響とは釣り合うかもしれない。

由麻は響のことを顔がいい爽やかな男子だと思っている。しかし、響の性格を考慮すると付き合う気には到底なれなかった。デリカシイのようなものがなさすぎる。それが奴の魅力なのかもしれないが、「響は遙のことが好きじゃないかな」由麻は呟くように言った。

「え？」

「だってさ、どっか遙のことを気にかけてるって感じだし」

「そうかな」

「そうだよ。遙も響のことが好きだったらいいんだけど。香住と繁みたいにラブラブカップルになれたのに。いつでもチュッチュして

さ。そしたらあたしのけ者になっちゃうけど」

遙が由麻を頭を突いた。

「痛い」由麻は頭を撫でた。意外な攻撃に由麻は驚いた。

「勝手に想像しないでよ。あたしは別に、響君が好きなのじゃないよ」

「ふうん」本当なのか照れなのか。まあ、そのうちわかるだろう。

五

朝起きると世界が変わっていた。ということはなく、由麻は安堵のため息をついた。鏡に触れた程度で世界が変わるなんてのはありえないということだ。つまり、学校に行かなくてはならない。現実には辛いのだ。放課後はバイトがある。女子高生も大変だなと由麻は憂鬱になる。

外は木枯らしが吹いていて、秋を実感させられた。そろそろコートを着てもいいなと由麻は思った。奮発して買ったコートとマフラーがあればこの程度の寒さは問題ない。

「おはよ」遙が現れた。

「おはよう」

二人は登下校も一緒だ。

「寒いねえ」遙は寒そうに手を擦っている。

学校につくと香住が二人を迎えた。三人は昨日ですっかり意気投合したので、担任がくるまでお喋りを続けた。クラスのほとんどの者が生き生きとした目でくだらない事柄を話し合っていた。

ショートホームルームが終わると体育の授業となる。寒い日に体育着に着替えなくてはならないのが億劫だったが、仕方がない。更衣室にはストーブがあるので暖かった。ずっとここにいたいと由麻は思ったが、みんなが着替え始めたのでしぶしぶ服を抜いでいった。

ふと見ると遙だけ服もそのままにぼうつとしていた。

「どうしたの遙？」

遙はどんよりとした表情で由麻を見つめた。

「なんだか調子が悪くて」

確かに遙は具合が悪そうだ。今朝までは元気そうだったが、この寒さで体調を崩したのかもしれない。

「ねえ、休んでなよ。こんなときに体育なんてやるもんじゃないよ」

「でも今日はバスケなんだよ……どっちも結構好きなのに」

由麻は笑った。目に精気がないのはバスケットボールができないからかもしれない。穏やかな性格のは遙だが、意外と体育会系だった。

「残念だったね。それとも無理してやる？」

遙はしばらく自分の調子を調べているようだった。それから首を振った。

「無理。ちょっと保健室いつてくる」

由麻はふらふらと頼りなげに去っていく遙の背中を心配げに見送った。大丈夫だろうか。ただの風邪であればいいけど。

いつの間にか更衣室は由麻一人になっていた。嘘、と由麻は辺りを見回すが、誰もいない。彼女は慌てて着替えた。誰も待つてくれないなんて、と思ったが、いつもは一緒に待つてくれるのは遙くらいだ。

着替え終わって外に出ようとドアノブをまわす。なんだか嫌な感覚を覚えたのは気のせいだろうか。ひやりと背筋が凍る感覚。

更衣室を振り返る。誰もいない。

気のせいだよ。何か視線を感じたけど。由麻は外に出た。

廊下には人っ子一人いないが、遠くのほうで教員が授業をしている声が聞こえる。急がないと。体育教師の原はゴリラのように体が大きい筋肉質の男で遅刻をすると怒鳴り叫ぶ。必要以上に大きな声を聞くのは嫌だった。廊下を駆ける。

ふと立ち止まった。どうも妙だ。また視線のような、気配を感じた。振り返るが、誰もいない。近くの教室を覗いてみるが誰もいない。由麻は首をかしげた。

こんなことしている暇はないのに。彼女は苛立ちながらも自分が感じたものが気になって仕方なかった。

「誰かいる？」小声で、それでも近くににいる者なら聞こえるくらいの声でそう言った。応答はない。由麻は体育館に急いだ。

六

「佐伯、遅いぞ！」

やはり原に怒られた。一分遅刻しただけだが、遅刻は遅刻ということだ。由麻は苦々しく思いつつもバスケットボールを楽しんだ。女子のバスケットボールは実に微笑ましい光景で、みんな拙いドリブルをし、コントロールの悪い、ゆっくりしたパスを繰り返して、全くあてずっぽうのシュートはゴールポストにすら届かなかった。バスケットだけが一味違う動きを見せ、彼女たちがほとんど試合を制していた。由麻からすれば勝手にやっつてればいい、という感じだ。

体育館の扉は開いていて、外では男子がアスファルトで舗装されたコートでバスケットをしている。響もいたし、貴春もいた。二人とも運動神経がいいのは見てすぐにわかった。響がパスされたボールを華麗にドリブルし、相手が立ち足はだかるとすぐさま貴春に鋭いパスをする。貴春はボールをキャッチするとすぐにシュートを決めた。ボールは鮮やかに決まった。

あまり男子のほうばかり見惚れているとまた原に怒られる。由麻は一応、お遊びのバスケットに集中した。

響と貴春のコンビは上手く、次々とボールをゴールに決めていき、試合は大差がついて決着となった。ナイスプレイを見せた二人は互いの手と手を叩き勝利を喜んだ。まあ、勝つには勝ったが相手チームは弱すぎた。中学時代に県大会で準優勝のバスケットだった貴春と現役バスケット部の響の敵ではない。

「だけどなんだったんだらうなあ」水のみ場で顔を洗いながら貴春が呟く。

「何がだよ？」

貴春はある場所を指差した。それは備品置き場だった。おもに部活関係のものが置いてあるところだ。野球の予備のバットや、予備

のボール等が置かれている。

「あそこからなんか変な視線を感じてさあ」

響は水を飲むのを止めた。

「なあ、貴春」

貴春は響を見た。

「俺も感じたんだ」

「おかしいな」

二人は備品置き場に向かった。そして恐る恐る、といった様子で扉を開ける。鍵がかかっているかと思っただが、開いた。中は暗かった。二人は中に入り、物色する。

「誰もいないな」貴春は首をかしげた。

確かに誰もいない。だが、誰かの視線を感じたのは確かだ。誰だったのかはわからないが、嫌な感じだった。

「いいや。何でも。気のせいかもしれないし」

「二人ともか？」

わからない。だけど、どうでもいいか。本当に誰かいたのかもわからない。たぶんたまたま備品を取りにきただけの者の視線を感じたのだろう。

「わかんないけどどうでもいいだろ。いこう」

授業中はゆっくりと時間が過ぎていく。何かハプニングでも起きれば面白いのになあと由麻は半ばぼんやりした頭で非日常的な出来事を夢想した。突然銃声の音が響いて、今授業をしている地理の教師の中川の白髪頭が吹き飛ぶとか。うわ、グロイ。彼女は自分の想像に気分を悪くした。何か突飛なことが起こるのは歓迎だが、人が死んじゃったりするのは嫌だ。軽い地震がきたり、雪が降ったり、唐突に日蝕になったりする程度でも十分面白い。

前の席の遙の背中を見る。遙は真面目に授業を受けているようだ。眠くならないのだろうか。由麻は限界だった。さよなら中川。

由麻の意識は飛んだ。しかしすぐに起きた。暗闇の中から、二つ

の目を感じた。がぼつと起きたので隣に座る野々村健人が驚いた。

「どうしたんだよ？」

「なんでもない」由麻は小さく答え、心臓の鼓動を抑えた。由麻はあまり目立たないよう、周囲を窺った。さっきの、更衣室を出るときに感じた視線だ。それを感じた。どこかで、誰かが見ている。そんな気がした。気のせいではない。はっきりと不愉快な視線を感じたのだ。

「だけどうしてだろう？」由麻は思う。眠っていたのに、視線を感じるというのは。変だ。気配を感じるにしても、誰かがこちらを窺っているのを視認したわけでもないのに。

怪しいものは誰もいない。由麻は大きく息をついた。

何か精神的なものなのではないかと由麻は考えた。きっとそうだ。おかしいのは自分かもしれない。

授業が終わると由麻は遙と雑談した。

「由麻、また寝てたでしょ」

「知ってたんだ」

「寝息が聞こえた」

由麻は恥ずかしくなった。

「ねえ、さっきさ……」

「うん？」

「変な感じ、しなかった？」

遙は眉を寄せた。

「変な感じって？」

由麻は遙の様子から、どうやらやはり、自分がおかしいのだろうという結論に達した。

「なんでもない。食堂いこう」

七

響と貴春は屋上で弁当を食べていた。貴春の弁当は響の好物ばかりで、響は交換してほしいと思った。

「ウインナーくれよ」

「嫌だね」

比較的、暖かい日だった。空も青く、のどかな午後だった。

「何だか眠くなってきた」貴春が呟く。

「そうだな」

食事を終え、二人はうつらうつらし始めた。なんだか心地よい気分。こんな状態がずっと続けばいいが、昼休みというのは短いもので、すぐに次の授業となる。いっそさぼってしまおうかと二人して同じことを思うが、また担任に怒鳴られるのも鬱陶しいので、しぶしぶ立ち上がった。

響は階段を下りる前に立ち止まり、背後を振り返った。

「どした？」

「いや……なんでもない」

まただ。気配を感じた。冷たい、何かの気配。

遠藤辰巳。彼女は由麻と同じ二年B組のクラスメイトで、どこか孤高な雰囲気を身にまとい、友人は由麻よりも少なかった。彼女がいつも一緒にいるのはクラスでもはみ出し者の沢村瀬奈。彼女は辰巳だけが唯一の話相手だった。冴えない女子だが、辰巳は彼女のことを好いていた。地味で目立たないが、普通なところが好きなのかもしれない。いたって普通。思春期にありがちな性格の乱れもなく、素朴に堅実な人生を送っていきそうな少女。だが彼女は自分がほかの女生徒より上回っていることを知らない。胸が一際大きいのだ。辰巳にはそれが気に入らない。辰巳の胸は由麻よりも小さい。そして彼女は貧しい乳と周りに思われるのが大嫌いだった。実際そうだとしても。

「ねえ辰巳。辰巳がもしもこのクラスの中で付き合うとしたら、誰がいい？」

「瀬奈がいいな」

「そういう話をしてるんじゃないよ。」「瀬奈は目を細める。

「ごめん。なんで急にそんなこと聞くの？」

「なんとなく。辰巳ってさ、可愛いじゃん」

「食べちゃいたい？」

「うざい」瀬奈はうんざりした顔をする。「可愛い辰巳は誰でも付き合えると思うんだよね。だから、誰か付き合いたい人がクラスの中にいるのになって思ってる」

辰巳はクラスの男子を見回した。「あたしってあんまり付き合ったことないんだよね」

「嘘ばかり」

「一人だけだよ。中学で一緒だった智君。あの子以上にかっこいい子はこのクラスにはいないねえ。ぶっちゃけこのクラス、レベル低くない？」

「そうかなあ……響とかかつこいと思わない？」

「ああ」確かに響は女にもてそうなタイプではある。華奢そうできて筋肉質な体、長く、すらっとした足。整った顔立ち。

「そうだな、確かにそうかも。響君はかつこいよ」

「付き合いたい？」

「いや」即答する。「ああいうのって別に興味ないんだ。瀬奈が付き合えば？」

「あたしが響と釣り合うと思う？」

響がいわゆる巨乳好きなら、それなりに瀬奈には需要はあると思う。それをいうならクラスの男子の大多数だ。しかし瀬奈の地味顔では誰も興味を示さないのかもしれない。よくよく見ると、瀬奈の顔はほんのり可愛いのだが。だがそれは友人としての自分が長く付き合っただけの程度の可愛さだ。残酷な物言いかもしれないが、この高校生活というのは特に、こういったことがシビアなものだ。可愛くなければ強者にはなれない。可愛くなければ何かほかの強みをいかさなくてはならない。瀬奈のほかの強みといえば大きな胸ではないが、その胸も異様なほど巨大というわけではなく、だから制服越しではあまり目立たない。Ｔシャツ姿の彼女を知っているものなら彼女の胸のふくよかさがよくわかるというものだが、ここにいる男子のほとんどは知らないだろう。知っているのなら、ひそかに彼女の胸に顔をうずめてむしゃぶりつきたいというぎらついた気を感じたはずだ。彼女は周囲の気配を読み取るのは得意だ。

「響じゃ駄目なら、貴春なんてどう？」瀬奈が言う。

「あれはねえ、ごつついよね。まあ、いい男なんじゃない？」

「その二人くらいだもんねえ。でもあの二人、すっごい仲がいいんだよ。結構そそる話じゃない？」

「そそらねえよ、変態女」

「ひつどい！ 興味あるくせに」

「ないって……あたしはもつと変わった子が好きなんだ。すっごい内気な男子とかいいなあ。子犬みたいな頼りない感じで。守ってあ

げたくなるタイプってどうか」

「女より女々しいタイプってこと？ 気持ち悪い」

「ま、あたしと瀬奈の好みのタイプが違うってことはよくわかった。それがわかったということとは今の話も、ちょっとは意味があったってことだね」

「そうかな？」

九

薄暗い廊下を、市谷遙は歩いている。明日は抜き打ち試験があるということを偶然耳にした彼女は家で勉強をしようと思っていた。真面目な彼女は勉強を欠かさない。しかし教材を机に忘れてきたのは、うっかり者の彼女らしかつた。

由麻に電話をしたが出なかった。一人でいくしかあるまい。自分のミスに友人を巻き込むのも悪いので、これでいいと納得する。

夜の九時。時間的にいえば大した遅さではないが、校舎に入るとなればまた別だ。夕方に残って勉強していたときだって、人気がなくなるにつれて不気味になっていく教室の雰囲気能耐え切れなくて逃げるように帰宅した。ならば、真つ暗な時間に廊下を徘徊するのは相当恐ろしいことだろう。

校門に入る。夏風は肌に心地よかったが、足は震えている。極度の怖がりであることを自覚しているが、それでもテストでそれなりの点を取りたいという気持ち勝ち、玄関の扉をくぐる。職員室はまだ明かりがついていて、教師達の話し声が聴こえる。一応教師に断っておこうかとも思ったが、やめておくことにした。

二階にある自分のクラスを目指す。階段の電気をつけ、上がる。廊下は静まりかえっている。もう少し早い時刻なら残っている生徒もわずかにいるだろう。遅くまで部活や勉強に勤しんでいる者は多い。しかし今は遙一人で、彼女はやはり足を震わせながら階段を上がる。彼女の細足をひそかに狙っている者がいることも気づかずに二階にたどり着く。電気をつける。やっぱり教師に一言いっておくべきだったと思う。電気をつけているのに気づいたら不審に思うだろう。

自分のクラス、二年B組の前に立った。扉は開いている。電気をつければすぐに入れる。遙は電気をつけた。席までいく。机の中を調べる。あった。目当てのものを手に入れると教室を出て、電気を

消す。

目の前に何かがいるということに気づいたのは足を速めたときだった。明らかに異質な存在が、階段前の通路を阻んでいる。

それは巨大な男だった。フランケンシュタインの怪物を遙は思い出した。あれのように大きく、体はつきはぎだらけ。顔つきはいやらしく、短い黒髪は脂がべったりとくっついていてるように見えた。

男は下卑た笑いを浮かべた。そのぎよろつく大きな目は一心不乱に遙の足を見ている。

「お嬢さん」喘ぎながら声を出す。間の抜けた声が逆に恐ろしかった。

これは何なの？ 遙は気絶しそうなほどの恐怖を感じていた。

男はへっへっへ、と笑った。「いい足してますね。お嬢さん……たまらん。そそる。うずいて仕方がない」男は嘗め回すように遙の靴下から上を見ている。「それ……頂いてもいいですか？」

男は背中に隠していた大鉈を取り出した。どこでそんなものが買えるのか、あまりに大きい鉈を見て、遙は背中を向けて逃げ出した。心の中では一体何が起こっているのか、状況が全く見えず、ただただ脅えている。

走りながら振り返る。怪物が追ってきている。鉈を両手で抱えながら、かなりの勢いで追ってきている。

遙は悲鳴を上げた。「助けてえ！」

男は不可解な声を上げながら遙のスピードとは比べ物にならない速度で追い上げてくる。

悲鳴を上げつつも遙は階段を下り、あくまで冷静さを失わないように、転ばないよう気をつけて駆ける。しかし男の速度は凄まじく、階段を下りたところにはすぐ後ろに接近されていた。

男の手が遙の肩を掴む。

「何だ！」

悲鳴を聞きつけた教師が姿を現した。

「先生！」遙は教師の背後に回る。

「何だ、どうした？」教師は五十を過ぎた化学の教師で、内藤といった。彼はわけがわからない様子だ。

遙も困惑していた。教師に助けを求めたものの、今まで自分を追いかけていたフランケンシュタインの怪物の姿はどこにもなかった。

「あれ……でも、今まで……」

「なんだあ？」化学の教師は彼女が悪戯をしたのだと判断した。彼は常日頃から不良じみた生徒から質の悪い悪戯を受けることがあった。この前も、教員用トイレで用を足していたら、上からコンドームを投げつけられた。しかも使用済みのやつをだ。

彼女の奇行は、こちらを陥れるための罠としか思えない。

「楽しいか、ああ？ 教師を馬鹿にして楽しいのか！」教員は怒鳴る。

「勘違いみたいでした ごめんなさい」遙はわけがわからず、教師の剣幕に戸惑いつつ、恐怖と困惑で泣きそうになりながら逃げるようにその場を去り、校舎を後にした。

学校を出ても全く恐怖は衰えない。彼女はなるべく人気のある道を選んで家まで戻った。

何なの？ 彼女の頭は自問するが、答えを得られるはずがなかった。

夕べは結局勉強しなかったなあと佐伯由麻は歯を磨きながらぼんやり反省していた。勉強するときはいつもそうだが、ついつい周りの掃除を始めてしまう。そして甘いものが食べたくなるので冷蔵庫を物色したり、コーヒーを作ったりし、いつも読んでいる漫画が面白くなってしまって、結局何もしないで時間だけが空しく過ぎていく。

十時頃に本腰を入れて勉学に打ち込もうとしても、どうも気が乗らない。彼女は少しだけ寝て、起きてから勉強を始めることにした。眠気が取れたほうがすっきり冴えて勉強に集中できると思ったのだ。試験は明日なのだ。あまり多くを詰め込めるわけでもない。気楽にやろう。

そして彼女は寝過ごし、いつもどおり時間におき、遅刻までしうになつた。テレビがあまりにも面白かったからだ。

遙はどうせ勉強してきたのだろう。情報を知つたのは遙からだし、真面目な彼女は点取り虫だから、大してやってないよといったつゆ由麻よりもずつといい順位をキープする。成績に関しては遙が妬ましかつた。勉強する力、というのが由麻には決定的にかけていた。

教室には担任が入ってくるころだった。

「遅いぞ」担任の姉原梢が厳しい顔でいうが、怒っているわけでもないでもないのだ。姉原は三十一歳。すらりとした長身に理性を感じるメガネとさばさばした性格が男女共に受けている。由麻も彼女のことを嫌いではなかった。

S H Rも終わり、次の授業までに由麻は遙のところまで行く。勉強を全くしなかったということを伝えようと思ったのだが、遙の様子はどこかおかしかつた。

「遙？ どうしたの。勉強のしすぎで寝不足なの？」

遙は首を振つた。妙だ。遙の顔はやけに青い。なんだか調子が悪

そっだ。

「具合、悪そうだね」由麻は本気で心配した。友人の様子がおかしいのではこちらの調子も狂う。

「昨日ね……」遙が言いかけるが、彼女はそのまま黙ってしまふ。

「昨日？」

由麻が続きを促すも、遙はその先を言おうとはしなかった。

「保健室行ってくる」

遙は立ち上がり、どこか頼りなげな歩き方で教室を出て行った。

一次限目が試験なのに。遙はどうしたのだろう。由麻は心配だった。あの青ざめた様子はただ事ではない。熱でもあるのだろうか。

昼休み、響と貴春と繁と香住の四人は机を交えて食事を取った。

彼らはまたどこか遊びに行く話をした。カラオケにいつて、焼肉でも食べようかという高校生らしい遊びを考える。それから話題は旧校舎の鏡に移った。

「あの鏡を覗いてさ、何か変わったことあったか？」繁が聞いた。

「いや、別に」響は答える。

「俺もないな。鏡の世界なんて」貴春は笑う。「あほらしい。あんな気持ち悪い鏡があればそんなことを考える奴がいるんだな」

「でもあの鏡は不気味だったよ」香住が言う。

「まあな。笑って片付けてもいいけど、俺はちょっと怖いね」繁が真剣な顔をする。

「怖い？」響が眉を寄せる。

「ああ。あれから色々調べたけど、やっぱりあの鏡は普通じゃないっていう情報が多い。鏡の世界っていう話はデマかもしれないけど、あの鏡を覗いてから何かに襲われたって話が圧倒的に多かった」

「それ、どこ情報？」と香住が聞く。

「ネットとあと人伝」

「馬鹿らしい、気にすんなって」貴春は全く気にしてない様子だった。

繁はにやつとした。「何もなければいいな」

貴春が一笑に付し、その話題を終わらせていると、響だけが神妙な顔をしていた。

遙は全く授業に出ず、昼休みになった。由麻は食事を後回しに保健室まで向かう。廊下ですれ違ふ遠藤辰巳の視線を感じたが、何故一言も口をきいたことのない辰巳に視線を送られたのか、由麻にはわからなかった。彼女も響のファンなのだろうか。そう思ったとき、一人で歩く響とすれ違った。

「食堂に行くのか？」

「ううん。保健室。遙の具合はどうかなって」

「そっか。あいつ全然出てこなかったけど大丈夫かな。俺も一緒にいっていい？」

「今はやめといて。後で知らせるから」

「ちえ、わかったよ」

響は去り際に由麻の頭を撫で、由麻は響の手を払った。響は痛がるジェスチャーをし、教室に戻っていった。

保健室は一階にある。遙は保健室にまだいるだろうか。ひよっとしたら早退してとつと家に帰ってしまったかもしれない。

階段を下りると食堂に行く連中たちが大勢廊下を歩いており、反対方向へいく由麻には通りづらい道だった。やつのことで人だかりを抜けると、急に人気がなくなる。途端に寂しくなる。保健室に遙がいてくれればいいんだけど。いなければ響を頼るしかない。

保健室の扉を開けようとする。何だか嫌な予感がして、躊躇われた。何か、予兆のようなものを感じた。彼女は後ずさった。一体なんだろう。この感覚。全身が扉の中に入るのを拒否しているようなひんやりとしたもの。

だけど、この先には遙がいるはずだ。由麻は扉を開けた。中に入り、閉める。

保健室独特の匂いが立ち込めている。室内には教員はいなかった。いつもいないのだが、彼女はどこにいつているのか、由麻は気にな

った。

奥にある二つのベッド。カーテンに仕切られた向こうに遙が寝ているはずだ。

だが、果たしてこれが遙だとは思えない。由麻は凍りついた。カーテンには人影が見える。その人影は巨大で、そして髪が異様に長い。

「遙？」由麻はおそろおそろ声をかけたが、後悔した。巨大な人影が動いた。それは遙であるはずがなかった。

カーテンが開けられ、由麻はびくりとした。

「由麻？」少し青ざめてはいるものの、遙だった。

「遙」由麻はほっつと息をついた。安堵のため息だった。

「どうしたの？」

「別に。遙こそどうしたの。具合悪いんですよ。早退するの？」

「いいよ。午後は出るから」

「そう。食事はどうする？」

「食べる。食堂行こう」

「具合はいいの？」

「いいよ。ずっと悩んでたの」

「ふうん？」

由麻は一安心したものの、さっきの巨大な人影は一体なんだったのだろうかと考えた。遙の人影では絶対にありえない。

遙は悩んだ拳句、由麻に昨夜のことを打ち明けることにした。誰かに話さないと狂ってしまいそうな気がしたのだ。

しかし親友の反応は遙にとってはがっかりなものだった。

「遙は臆病だからなあ」

「え？」

「妄想がそういう存在を生んだんだよ」

「由麻は信じてくれないんだ」

「そうじゃないけど」由麻は少し慌てている。遙を怒らせてしまったと思っっているのだろう。

実際遙には友人の対応はショックなものだった。信じてくれると思っただのに。

「うちの学校って怪談話なんてあったんだね」

「怪談……」

校内に変質者が出るというのはありそうなことだ。しかし、大蛇を持った大男というのは、あまりにも目立ちすぎやしないだろうか。それに、化学の内藤が駆けつけたときには影も形もなかった。

やはり怪談話の類として片付けられそうだ。仕方がないのかもしれない。実際に奇妙な状況に巻き込まれた自分自身でも本当にあったことなのかどうか確信がもてないのだから。

「それさ、響たちにも話してみようよ」

遙は首を振った。

「駄目だよ由麻。言ってもどうにもならないよ」

「そう？ まあ、遙がそういうなら……仕方ないね」

その女生徒は学校に不穏な気配が漂っているのをはつきりと見てとっていた。学校に何か得体の知れない存在がいる。彼女にはそれがわかる。問題は、その存在がどういう存在なのかだ。何を理由に？廊下を徘徊する。特別教室が多いこのフロアには休憩時間といえども廊下をうろつく生徒はいない。

先ほど佐伯由麻とすれ違ったが、彼女には明らかに何かを感じた。彼女自身の霊感を読み取ったわけではない。彼女の霊感なんて並以下だから。だが彼女には何かがまとわりついている。それは何かの気配……ねっとりとした、濃厚な気配が彼女の周りを漂っていて離れない。由麻自身はそれには全く気づいていないだろうが、その気配は彼女から離れない。

狙われている。だが不可解だ。何故彼女が狙われる？ 見たところ普通の、スピリチュアルな感覚も全く持ち合わせていないような平凡な女生徒にしか見えない。

いくつかの条件に触れた、というのがおそらくだが答えだろう。彼女自身は由麻のことなどどうでもいいが、この学園の平和を守るために派遣されている身だ。危険なら、守ってやらなくてはならないだろう。もしかしたら自分がここに遣わされた目的に繋がっているかもしれない。

けらけらという笑い声が聞こえる。彼女は足を止める。笑い声は廊下の奥の暗がりにいる人影から発せられている。けらけらけら。笑い声は止まない。彼女は慎重に近づいていく。もう少しではつきりわかる。しかし人影はふっと消えた。

悪寒がする。と、同時にぞくぞくするような高揚感も湧いてきた。

十四

廊下を歩く途中、響はふと立ち止まった。まただ。視線を感じた。廊下には多数の生徒で賑わっているの、その中の誰かがこちらを見た、ということはあるかもしれない。

だが妙だ。どうしてこうも危険を感じてしまうのか。それに人の視線なんて普段は気にもならないし、ほとんどわからないはずだ。

響は気にしないことにして歩き出した。女生徒の熱い眼差しをたまたま感じ取ったのだろう。顔のいい男は辛い。

由麻はさつき遙の様子を見に行ったな。保健室にはくるなといわれたからいけないが、気になる。遙が気になるわけではない。由麻のことが気になった。あの小さい体が自分から遠ざかると、妙に切ないような気分になる。後ろから抱きしめてそのまま自分のものにしてしまいたいような。

由麻のことが好きなのだろうか。まだ、深く好きになってはいないと思う。響はにやりとした。あんな貧相な体にそこまで入れ込みはしない。女はいっぱいいるし、自分を好いてくれるものも少なくない。

何故あんなチビがこんなに気になるのか、不思議だ。友人として付き合っているうちに情が深まっていくのはよくあることなのだろうが。

しかし……中学のときよりもずっと女らしくなった。

からんという音。気づけば一人、廊下に立っていた。周りに生徒がいないのに戸惑う。どうやらぼんやりしすぎていたらしい。そもそも自分はなぜこんなところを歩いていたのだろうか。

そうだ、購買に行くところだったんだ。全然方向が違う場所にいる。響は苦笑した。どうかしてる。

廊下の向こうから誰かやってくる。黒いマントを羽織った背の高い男だ。学年でも背の高い部類の響よりも背丈はあるようだ。長細

い顔には皺があり、年齢を重ねているのがわかるが、口の周りにある髭は立派で、見たところダンディとも言えた。ただその目は赤く、どう見てもまともな人間とは違っていて、そして口を大きく開けるとその中には犬の牙よりも長く太く鋭い牙が生えていた。

男がマントを広げる。すると、数匹の蝙蝠が飛び出し、響に向かっ
てきた。響は驚いて、襲い掛かる蝙蝠から身を守る。蝙蝠は響には
触れず、途中で消えてしまった。

何だこれは？ 響は今の状況についていかない頭を必死に回転させようとしたが、無駄だった。全くわけがわからない。

いつの間にか、男は響の前に来ていた。

「君が欲しい。君の、血がね」

男は口を大きく広げ、恐ろしい無数の牙を響に見せた。

響が悲鳴を上げると、男は跡形もなく姿を消し、女生徒が立っていた。女生徒はさつと何かをスカートのポケットに隠した。

「こんなところでどうしたの？」

気さくそう声をかけてくる女生徒は見知らぬ生徒ではない。同じクラスの遠藤辰巳だ。あまり声をかけたことはないが、美人だとクラスの男子から評判だった。

「別になんでもないよ」響はわけがわからなかった。マントの怪人が姿を消したと思ったら、クラスメイトが現れた。それに彼女はまるで今いた存在のこのを見ていないという態度だ。

どこかおかしい。どうも芝居臭い。

「なあ、辰巳。お前こそここで何してるんだ？」

「え？ 別に……ちょっと、一人になりたくて」辰巳は少し慌てた様子を見せた。

「ふうん」響はじつと辰巳の目を見た。辰巳の目は泳いでいる。怪しい。大体今、スカートのポケットに何を隠した？ 銀色に光ものは、鋭利な刃物に見えたが。

「まあいいや。俺も同じ理由でここにきたんだ。奇遇だな」

「そうね。奇遇だね」

深くは追求しないでおう。響は思った。もしかしたら、この女は何かを知ってるかもしれないが、追求しても答えてくれるとは思えない。

「教室に戻るよ」

「そうしたほうがいいよ。あんまり一人で歩くのは……孤独っぽいし。響君には似合わないよ」

響は自分で言ったように教室まで戻った。遠藤辰巳には何かある。混乱した頭で響はそう思った。

放課後、由麻は遙と一緒に帰宅した。響には誘われなかった。響はすぐに帰ったらしい。貴春も響が帰るのを知らなかったようで、首をかき上げていた。

「ねえ、思ったんだけどさ」遙が口に出す。

由麻は遙の顔を見る。

「やっぱりあの鏡を見たの、まずかつたんじゃないかな」

由麻は笑う。「まさかあ。あんなのただの作り話だよ……じゃあその大男は鏡の世界からきたってこと？」

「そうだと思う。だって、あんな大きな男、ちょっと現実感がしな
いんだもん」

現実感がしないということはやはり遙の妄想　由麻はそんな考
えが頭をよぎったが、口に出すことはしなかった。

「ねえ由麻。またあんなのが出たら、どうしたらいいと思う？」

遙の顔は泣きそうなほど深刻だ。よっぽど怖い思いをしたに違
ない。由麻は遙の恐怖を取り除いてやりたくなった。由麻よりも背
の高い遙の頭を撫でてやる。

「大丈夫。由麻がついているから。遙を危険な目になんてあわせな
いよ」

「本当に？」

まるで子供じゃないか。由麻は笑い出したくなった。だが遙は本
気だし、由麻は友人が脅えた状態のままずっといるのは嫌なので、
何度も頭を撫でる。

「本当に。もう平気だから。だから元気出して。怖がる必要は何も
ないんだよ」

遙は頭を撫でられても子犬のように従順にしていた。やがて遙が
笑い出した。

「由麻はやっぱり大好きだよ」

「あたしと響じゃ、どっちが好き？」

由麻は頭を叩かれる。叩くのはいいが、ちょっと強すぎじゃない？ 由麻は自分の頭を撫でた。

「響君を好きなんて言ってるじゃないでしょ。勝手に決め付けないですよ」
由麻は響のことを本当になんとも思っていないのだからか。響は遙のことをなんとも思っていないのか。由麻は気になった。大男よりもこちらのほうが大問題だ。

「鏡なんて気にしちゃ駄目だよ。あんなのただの作り話。遙は学校をうろついていた変人にたまたま遭遇しちゃっただけ。内藤の馬鹿がちゃんと信じてくれれば今頃学校中で変質者の話題で持ちきりだったのに」

「あの大きな男、ぱつと消えたからね。ちょっと信じられないくらいのスピードだった。やっぱり普通じゃ」

「考え込まない。いい？ 鏡とは関係ない。もう終わったことだ。いいね？」

遙はうなずく。

由麻はにっこりする。「もういいでしょ、この話は終わり。ケーキでも食べて帰ろ？」

次の日に由麻がクラスに行くと、響と遙が話していた。由麻は内心、妙な気分になった。遙と響が仲よく話している。しかし、よく見ると二人の顔つきは深刻そうだった。

由麻が二人に近づく。「おはよう」

「おはよう」遙が慌てて挨拶を返した。

「おう」響はどこか無愛想な様子でそう返事をする、自分の席に戻ってしまった。

「何あの態度？」

「由麻、そろそろ先生来るよ」

遙のいうとおり、担任が扉を開けて入ってきた。

「席につきなさい」

由麻は渋々席についた。担任の言葉が耳に入らない。響と遙は何の話をしてたのだろう。気になるし、気に入らない。自分には話せない内容なのだろうか。

いつの間にかSHRは終わっていて、生徒達が次々と席を離れて教室を出て行く。

「由麻、行くよ」遙が言う。

「どこに？」

「化学実験室でしょ。話聞いてなかったの？」遙は呆れている。

由麻は机の中に入れっぱなしの教材から化学の教科書を選ぶと、遙と外に出た。

「さっき何の話してたの？」由麻は遙に聞いた。

「響君と？」遙はどこか楽しそうな顔をする。

「そう」

「気になるの？」

「別に」

遙はくすりとする。由麻は気に入らなかった。

響は由麻たちとは違い、美術の授業を受ける。そこでは遠藤辰巳も一緒だった。響は今まで遠藤辰巳が同じ美術を受けているということを知らなかった。教室まで移動するとき、辰巳が隣に歩いていた。いつもは沢村瀬奈という地味な女子と一緒に遠藤辰巳だが、彼女自身はよく見ると実に整った顔立ちをしていて、はっきり美人だということがわかる。こんな女子のことを今まで気にもかけていなかったなんてと響は自分の見る目のなさに驚き呆れた。

辰巳は隣に自分がいるのに気づいてない様子だ。昨日のことを話すいい機会だ。

「なあ、遠藤」

辰巳は驚いたような顔で響を見た。やはり、気づいていなかったらしい。

「え？ ごめん、ぼうつとしちゃって」

「あのさ、昨日のことなんだけど」

「昨日？ 何かあった？」

とぼけやがって。

「昨日廊下で一緒になったろ。本当は何してたんだ？」

「だから、一人になりたかったんだって。元々友達少ないだろとか言わないでよ」

響は遠藤辰巳のことをよく知らないが、確かに友人といえるのはいつも一緒にいる地味な感じの女子 沢村しか思い浮かばない。

遠藤辰巳か。こうしてみるとなるほど確かに、美人だ。白い肌。整った顔立ち。どこか挑戦的なはつきりとした目。薄い唇。艶やかな黒髪。ほっそりとしているが形のいい身体つき。男子が食いつくのも無理はない。

「まあいいや」辰巳は本当に何も知らないのかもしれない。とすると、あの怪人はやはり響の妄想なのだろうか。だがそれはないと思

う。蝙蝠が体に当たったとき、確かに衝撃を感じたから。

「何、響君。あたしに興味があるわけじゃないんでしょ？」辰巳が意地の悪い笑みを浮かべて言う。

「別にないよ」

「はつきり言うね」

「お互い様だろ。お前も俺に興味がない」

「そうだね。ないね」

「はつきり言うな」

「今まではね。今はちよつと、興味があるかもしれないかな」

「俺も、今はちよつと興味があるかもしれない」

二人は顔を見合わせてにやりとした。そこには男女の仲になるよ
うな要素はどこにも見れなかった。ただ、何かの秘密を共有しつ
つも、それを互いに隠している者特有の意地の悪い顔があった。端か
ら見ると仲睦まじくも見えたので、嫉妬する者もいた。

化学の授業は自習だった。教師が休みのようで、休み時間と変わらないくらい賑やかになった。貴春は退屈だった。響がいらないし、繁は彼女と話をしている。よくまあ、四六時中一緒にいて飽きないものだ。羨ましいとも思わないが、あんなに熱々な二人を見ると、やはり恋人とはいいいものなのかもしれないと思う。積極的に彼女を作ろうとは思わないが。今は好きな女もいなかった。一年のときに三年の園崎早苗という彼女がいたが、すぐに別れた。随分、嫉妬深い女だったなと貴春は思い出しては苦笑する。

ここにおいても退屈なので立ち上がり、廊下に出てぶらぶらする。一階の自販機でコーヒを飲み、それから尿意を感じたので二階に戻ってトイレに入る。トイレの中は静かで落ち着く。ここでゆっくりしていくのもいいかもしれない。小便器の前に立ってズボンのジッパーを下げる。大してでなかった。

さて、戻るか。ちよつとの気休めにはなった。あとは教室で寝ていれば終わるだろう。

響にバスケ部に入らないかと誘われたが、貴春は悩んでいた。高校に入ったらバスケはやめようと思っていた。楽しいが、時間が束縛される。バイトなどしたら両立するのは難しいだろう。しかし結局バイトもしていないし、時間も持て余し気味だ。響の誘いに応じるべきかもしれない。県の大会準優勝の実力なら即戦力として扱ってくれるだろうし。

実験室が近づいてくるにつれて、賑やかな話し声が聞こえてくる。全く、何がそんなに楽しいんだか。そういえば佐伯たちはどうしているだろうか。彼女達とは最近仲よくしている。話してみるのもいいかもしれない。

左に横切れば化学実験室だ。しかし、誰かが右の通路から現れた。何だろうと貴春は思わず目を疑った。包帯を顔に巻いたミイラの

ような男が立っていた。包帯は男の右目以外の顔全てを覆っていて、唯一見える右目は瞳孔が開いていて、どことなく気味が悪い。包帯男はトレンチコート姿で、巨漢だった。その手に握られているのがナイフだと貴春が気づいたのは男が貴春に向かって動いてきたときだった。

貴春はてつきり生徒の悪戯だと思つて接近を許したが、近くまできて醜悪な匂いに気づくと、相手の強烈な殺意にも気づいた。包帯男はナイフを貴春の胸に突き刺そうとした。が、貴春は素早く後ろに飛んだ。包帯男はナイフを持った右手を勢いよく振り上げ、再び貴春目掛けて振り下ろしてくる。貴春はそれもかわすと、背中を向けて逃げた。包帯男は走つて追いかけてくる。走りながら振り返ると、包帯男の開かれた目は爛々と貴春に狙いをつけている。貴春は恐怖を感じながらも、冷静に自分が助かる方法を考えた。ここから先は特別教室ばかりだが、どこかの教室では必ず授業をしているはず。そこに助けを求めればいい。後ろを追いかける変態もそこまでは追つてこないかもしれない。

廊下の突き当たりを右に。生徒達の話し声が聴こえてくる。すぐ先にある家庭科室からだ。どこの学年かは知らないが、これで助かった。

家庭科室の扉を開く。

貴春は目を疑った。誰もいなかった。生徒の姿は人っ子一人見当たらない。

馬鹿な。ここから生徒たちの話し声が聴こえたのに。教室を間違えたわけではない。間違いなくこの家庭科しつから聞こえた。

おかしい。入る前まで窓から生徒の人影まで見えたというのに。包帯男の足音が近い。貴春は家庭科室から出て再び走った。

どこへいけばいいのか、全力で走る。突き当たりには音楽室があるが、何の物音もしない。左側には上下の階段。上へ逃げるか、下へ逃げるか。貴春は下に向かった。下なら外に出ることができる。上は移動教室ばかりで人気も少ない。

階段を二段飛ばしで下りていく。混乱のため危うくつまずきそうになるが、持ち前の運動神経でなんとか降りきることができた。あの巨漢はこんなに素早く降りることはできまいと貴春が振り返ると、包帯男はどうやら躓いたようで、踊り場まで転がりながら降りてきた。状況さえ違えば大笑いできる場面だったが、貴春にそんな余裕はない。怪人はすぐに起き上がってくる。落としたナイフはそのままだに、猛スピードで迫ってくる。慌てて貴春もスピードを速める。廊下は長く、外廊下まで続く扉は開かなくてはならない。開く口スを開けると、少しは差を広めておかなくてはならない。全速力で走る。

貴春はちらりと後ろを見た。怪人は貴春からだいぶ距離が離れていた。男はどうやら走る疲れたようで、膝を押さえて荒い息をついている。

ここにきて貴春は余裕が出てきた。包帯男は巨漢だ。捕まれば終わりかもしれない。だがあの巨漢はさほど体力がないようだ。バスケ部で鍛えた貴春はまだまだ走れた。

「おい！　へばってんじゃねえぞ！」　貴春は男に向かってそう叫ぶ。自然に笑みがこぼれる。「俺を捕まえたんだろ！」

怒りが湧いていた。あんなのにこうまで恐怖感を味あわせられるは。少しは反撃したかった。

男の体力回復を待つのはあまりいい考えとは思えない。仮に追跡から逃れる自信があるにしても。貴春は外廊下に通じる扉を開け、外に出た。

世界がなんとなく変わったような、そんな違和感。外はのどかだった。空は青く、鳥が鳴いている。今まで薄暗い廊下の中で異常者と鬼ごっこをしていたのが嘘みたいに見える。

何だか妙だ。本当に全てが嘘だったかのよう思えてきて、貴春は不安を覚えた。引き返し、再び校舎の中に入る。

包帯男はいなかった。若い教師が歩いている。知っている教師だった。

「おい湯沢。授業に出るよ」

「トイレですよ」

「一階までくることないだろ」

教師は去っていく。包帯男の姿も見えない。

どっちら悪夢は終わったらしい。

十九

佐伯由麻がトイレに行くと、トイレの扉から遠藤辰巳が出てくる
ところだった。

由麻は辰巳のことをよく知らないが、彼女はどこか興味ありげに
由麻の顔を見てきたので、軽く頭を下げておいた。

「ねえ佐伯さん」

「何？」話しかけてくる遠藤辰巳は知性的な雰囲気を漂わせる美人
なので、由麻はついあがってしまう。自分を情けなく思いながらも、
美人の辰巳に声をかけられたことは嬉しかった。

「佐伯さん 最近変わったことなかった？」

「え、別に」由麻は一瞬考え、すぐにそう答えた。

「そう」辰巳はそのまま立ち去ろうとしたが、立ち止まる。

「ねえ佐伯さん。佐伯さんって響君や貴春君と仲がいいんだっけ？」

「まあ、たまに遊ぶよね。遙と一緒に」男を独り占めしているよう
に思われるのも嫌なので友人を付け足す。

「やっぱり。今度あたしも一緒にいいかな？」

由麻は意外だった。由麻は辰巳が響か貴春目当てなのだろうと考
えた。

「いいけど、遠藤さんって響たちのこと興味あるんだ？」

辰巳は苦笑したが、すぐに真顔になる。「そういうことにしてお
いて」

由麻には彼女の真意がわからない。

「わかった。今度連中と遊ぶとき遠藤さんも誘うよ」

「そうして。じゃあね」

由麻は辰巳の背中を見て、彼女と友人になれたらいいなと思った。
遙も彼女と親しくなるのは賛成だろう。

最近変わったことはあっただろうか。由麻はトイレで小用を足し
ながら考える。ないはずだ。いや、遙の件があった。そうだ、すっ

かり忘れていた。しかしそんな話を大して仲のよくない辰巳に話すことなど出来ない。

他にあったのは保健室の一件だが、あれも見間違いかもしれない変わったことといえぱそれくらいだ。辰巳は何でそんなことを聞いてきたのだろう。美人とはいえ、からかわれるのは気に入らなかつた。

だが彼女が今後自分との関りがあれば、学校生活はますます楽しみになるなと思ひ、期待した。黒髪の艶やかな美人の、どこか独特の雰囲気か漂うオーラが由麻にはたまらなかつた。

気持ちのいい晴れた正午。響と貴春はどこか浮かない顔をして屋上で弁当を食べていた。二人とも口数も少なく、どことなく気だるいような、何か悩みがあるような顔つきをしている。

「なあ、響」貴春が口を開いた。

「何だ」

「最近変わったことなかったか？」

響は箸を止めた。

「何でそんなこと聞くんだよ」

「別に、何となく」

「特にないよ」

「そうか」

二人は黙々と食事を食べた。空はどんよりとしていた。

「また由麻たちつれてカラオケでもいくか？ 気分転換に」響が言う。

「何の気分転換なんだ？」

「何のつて……勉強の息抜きだよ」

「俺は勉強なんてしてないぜ」

貴春は進学しないで叔父の工場で働くようだ。コネクションがあるのは楽かもしれないが、すでに自分の将来が決定しているというのは響にはいいものとは思えなかった。大学に進めばさらなる可能性に発展していけるというのに。

まあ、貴春の人生に首を突っ込むことはしない。お互いが楽しければそれでいい。

食べながら貴春の顔を見るが、どうみても浮かない顔をしている。響とて元気がいいわけではない。奇妙な目にあっただのだから。

「いいから、カラオケでもいこう。いいだろ？」

「別に構わねえよ」

「じゃあ決まりな。由麻たちには俺からいっておく。繁たちも誘つとくよ。どっちかがくるっつていえばくるだろ」

由麻は響から誘われたので、承諾し、遙を誘い、遙の承諾を得ると辰巳を誘ってみた。

辰巳は少し驚いていた。まるで、本当に声をかけてくるとは思っていなかったかのように。

「辰巳さんもくるでしょ？」

「いいよ」

「じゃあ今日の放課後またね」由麻はオツケーを貰うと席に戻った。放課後、彼らは集い、電車に乗って市街に出向く。夕暮れの街は彼らにとって娯楽の宝庫だった。

由麻は辰巳との会話を楽しんでいた。辰巳は重々しい雰囲気とは裏腹になかなか陽気で、気さくに会話が楽しめた。由麻は楽しかった。やはり、辰巳は彼女の想像通り仲良くなれそうな相手だった。

「辰巳って普段誰と遊んでるんだ？」響がたずねる。

「瀬奈だね」

「瀬奈って……ああ、沢村か。沢村も誘えばよかったかな」響が呟くように言う。

響は誰でも気さくに誘うことができる。由麻はそんな彼の部分が入ってはいる。だけど、誰もかれにも優しく気さくに話しかけるから、自分は響にとって周りの人間よりも少し高い位置にいるのだろうかと気になることがある。ただの友人の一人なのだろうか。もう少し身近な存在であつたほしいのだが。

「瀬奈は来ないよ。あんまり大人数は好きじゃないんだ。響君とは違うの。一人で廊下を歩いたりはしないでしょ？」

響は意味深な目つきで辰巳を見た。

二人の間に奇妙な緊張状態が生まれる。由麻は戸惑った。

「辰巳さんはカラオケ好きなの？」由麻は間に入るように訊いた。

「歌は嫌いじゃないの。だけど音痴だけだね」

「音痴だったら繁も負けてないけどな」貴春が繁の肩を叩く。

「音痴だったら俺の右に出るものはいないさ」繁は開き直る。

「繁は確かに音痴だよな」香住も認める。

「あたしもあんまり上手くないよね」遙がおずおずという。

「繁よりはだいぶましだけど」由麻がフオローした。

「じゃあ、あたしの歌声と繁君の歌声、どっちが酷いか、勝負してみようか」

「望むところ！」繁がオーケーサインをした。

カラオケで二時間ほど歌い、盛り上がるとデパートの地下にあるファミレスで食事をした。クラスの生徒たちの恋愛の話や、嫌いな生徒や教師の話などで盛り上がる。時間はあっという間に過ぎていき、十一時頃に彼らは別れた。

辰巳と由麻と遙は駅まで一緒になった。十分ほど歩く最中、彼女達は会話をして親交を深めた。

「旧校舎の鏡の話、知ってる？」由麻が辰巳に聞く。

遙は一瞬、辰巳の目が煌くのを見た。

「知らない。何それ？」

由麻はこの前のことを話した。

「へえ。で、鏡に映した後、変わったことはあった？」

「別れないよ」由麻はそう答えながら、最近こんなことを誰かに言われなかったかと記憶を探った。そしてすぐに、ほかならぬ辰巳本人だと気づいた。

「鏡の話なんて迷信だよ。そう思うでしょ？」由麻は辰巳に確認するよつに言う。

「そう思うけどね、でもその話、ちょっと興味湧いてきちゃった」

辰巳の美しい微笑が、一瞬恐ろしく感じた。

朝。いつも起きるのが辛い、今回はいつにも増して辛かった。夕べは一時ごろまで深夜テレビを見ていたのだ。遅刻は由麻の十八番だが、最近は親も教師もあまり寛容ではなくなってきた。重い体を支えてなんとか支度を整える。朝起きてからの作業が人生で一番辛いことかもしれないと由麻は常々思っている。

学校指定のブレザーはそれなりに可愛いと思っている。由麻の小さな体を包む紺のブレザーは、彼女に女子高校生なんだなあとということを実感させられる。背が高くない由麻でもこれさえ着てれば高校生として認知してもらえるのだ。ほんのりと化粧をつけ、ウインクしてみる。あまり似合わないが、顔は可愛いのでよしとする。

朝食を食べるとすぐに薄っぺらい鞆を持って外に出る。肌寒い天気。まだまだ五月なのだ。朝が寒いときもある

電車を乗り、二十分足らずで学校前に着く。校舎の中に入る。いつもと違う感覚を覚えたのは、たぶん気のせいなんだろう。

教室にいき、遙に挨拶する。遙は挨拶を返し、昨日の深夜テレビのことを話す。他愛無い会話。ホームルーム。一時限目の現代国語の授業。二次限目の体育は体育館でバレーだ。由麻は面倒だったので休むことにした。バレーは苦手だった。バレー部の連中にいいようにされるくらいなら最初から参加しないほうがいい。彼女は生理痛という言い訳にしようかと思っただが、遙は看破するだろう。少し具合が悪い程度にしておこう。保健室で寝ていよう。

体育教師の原に休むといい、保健室に向かう。保健室で寝ているのは実に気持ちのいい有意義な時間だが、遙はどうせ後で怒るだろうな。遙にごまかしは通用しないから。

保健の教員に言い、ベッドで寝る。

教員がどこかに行く。彼女は毎回、どこへ消えるのか。職員室で他の職員と喋りあっているんじゃないかと由麻は予想していた。ど

うせ大した仕事なんてないだろうし、と勝手な思い込む。

ふと、思い出した。遙がここに寝ていたときのカーテンの影を。今になって思い出したことに由麻は後悔するが、気にしないことにした。あれは絶対に見間違えだから。いつまでも気にすることはない。

一人になると、なんだか落ち着かない。誰かがこないかなと思う。こんなにも寝れるタイミングはそうないというのに。一時間しかないのだ。とっとと寝て、すっきりした状態で次の授業……地獄の数学に望もう。

携帯電話をいじる。遙にメールしても、返す暇はないだろう。響たちは校庭で陸上をやらされているらしい。トラックを一周するだけでもきついのに、十周ほどやらされるらしい。何の拷問なのだろうか。

やがてうつらうつらとし始めた。このまま眠ってしまおう。そういえば遙が言っていた大きな鉈を持った大男だが、遙の幻覚ではないとしたら今頃どこにいるのだろうか。由麻は遙の幻覚だと思っている。遙も言っていたが、現実的な存在にしては少し奇妙だ。遙が言うような大男なら目立つはずなのに。

右手をだらりとベッドの外にたらし、由麻は船をこぎ始めた。

突如何かに手を掴まれた気がして由麻は目が覚めた。右腕が痛い。大きな手に掴まれているという感覚。その感覚は次第に強まっていく。

見ると、やはり腕を掴まれていた。巨大な手によって。何が、誰が掴んでいるのだろう。

ベッドの下を見る。長い手が、ベッドの真下から伸びている。由麻は悲鳴を上げて手を腕から離そうと暴れた。腕は離れ、ベッドの下に入ってしまった。

保健の教師がやってくる。

「どうかしたの？」

由麻はベッドの下を見た。誰もいない。腕も、人もいない。

「なんでもありません」

「変な夢でも見た？」

夢。確かに、今のは夢だったのだろうか。

「そうかもしれません」

由麻は起き上がる。時計を見るとすでに休憩時間になっている。

「大丈夫？」教師は心配そうだ。

「大丈夫です。教室戻ります」

保健室を出る。夢だったのかもしれない。考えてみれば夢以外にありえない。

腕を見る。彼女は身を震わせた。腕には掴まれた後が痣となっはつきりと残っていた。

女生徒は一人廊下を徘徊していた。静けさの漂う別棟の廊下は、彼女にとつて安らぐ場所であると同時に緊張する場所でもある。静かな場所は好きだった。生徒達の耳障りな騒ぎ声は辟易する。街に行くのも嫌いだ。静かな場所で、じつと本を読んでいるのが理想だ。たまには喧騒に身を任せるのもいいものだとは思うが。

緊張するというのは、静寂には魔が棲みつくからだ。彼女は闇に住まう連中のことが好きにはなれない。絶対に相容れない存在なのは間違いない。彼女の壮絶な過去はそれを如実に物語っている。彼らはこういう、人が多いが、自分たちの空間があるところが好きだ。暗い校舎は連中の格好の棲家になる。

この学校にそんな気配はなかった。しかし、誰かが招いてしまった。満たしてしまったのだ。彼らの条件を。

昨日の会話で彼女は確信していた。由麻たちは自分のしてしまったことをわかっていないし、まだその脅威に気づいていない。しかし、いずれは彼ら全員に招いてしまった者によって自分達がしたことが愚行であるということを知るだろう。それは間違いない。

笑い声が聞こえた。彼女は足を止める。静寂さの中に禍々しい気配を彼女は感じ取った。ブレザーを着た彼女は普通の女子高校生にしか見えない。彼女は、幾らかは脅えていた。

目の前に小さな子供がいた。スカートを履き、赤と緑の縞模様のTシャツを着た、短い髪をした男の子のような女の子だ。背丈だけ見たところほとんど幼女だが、その顔は老婆としか思えない。

それは笑った。嘲るような笑いに彼女はむっとした。

「邪魔をするんじゃないよ」その声はくぐもって聴こえた。距離は離れているが、はつきりと聴こえる。

「何？」彼女は聞き返す。その顔に脅えの色はなかった。

「我々の邪魔をするなどっている。大人しくしていれば何もしな

い。お前ら異能者は煩わしい。だが、煩わしいだけだ」

「消えな。こっちはこっちのしたいようにやる。お前らの仲間にも
そう伝えるんだ」

それは笑い、それから姿を消していった。チエシヤ猫のように段々
と体を透明にし、やがて完全に消えた。

「後悔するぞ」姿はみえず、声だけが聴こえる。

気配が消えた。女生徒にはそれがわかる。彼女は息を吐いた。緊張
が解けた。彼女は自信家だし、好戦的でもある。戦いは望むところ
ではあったが、懸念材料が多すぎる。一刻も早く奴らの正体を突
き止めなくては。

休憩時間、遙は由麻とのいつもの日常会話を楽しんでいたが、すぐに自分の会話が一方通行なことに気づいた。由麻は全くの受身で、それすらも適当だ。顔も自分のほうを向かず、目はぼんやりと虚空をさまよっている。

「ねえどうしたの由麻。具合悪そうだよ」

「なんでもないよ。ちょっと眠いのかな」のろのろと遙にそう答える。

「保健室で寝てたの？」

由麻の顔が青ざめたので遙は自分の皮肉に傷ついたのでと勘違いした。しかしすぐにその程度で由麻がショックを受けるわけがないと思いなおす。由麻はどうも変だ。今の顔つき　まるで脅えた子犬のよう。

「由麻、変だよ」遙は厳しい顔で由麻を見る。半端な態度では由麻は何も答えないだろう。

由麻は遙の顔を見るのに耐えられなかったのか、顔をそむけた。遙は何かあるなと思った。由麻の態度はいつもとは違う。何があったのかはわからないが、遙は絶対に鏡の一件と関係があると確信していた。そうだ。由麻も被害にあったのだ。当然だろう。由麻だって鏡を見てしまったのだから。

「由麻、今日は二人でケーキでも食べにいこうか？」

「試験近いのに、勉強はいいの？」訊いてくる由麻の声は虚ろだった。遙にはそれだけで胸にポディーブローをもらったような衝撃を受けた。由麻は傷を負った。何に？　誰が由麻を傷つけたの？

「勉強なんてその後でもいいよ。由麻が元気にならないと遙は勉強に身が入りません」

由麻は遙を珍しいものでも見るかのように見た。

「変な遙」

「変なのは由麻なんだからね」

由麻はくすりと笑い、遙は少し安心した。

大きな気配を感じる。響が立っていた。上背のある響が座っている二人の近くに急にきたので遙は少し驚いた。

「今日さ、バスケの練習試合あるんだ。北高の連中と試合するんだけど、二人とも見物に来ない？」響はにこやかないつものスマイルで二人を誘った。

「パス。今日は遙とデートするの」由麻もにこやかに返した。

「そっか……女子に応援されたらいつもの倍はやる気が出るんだけどな」響は残念そうな顔をしてみせた。

「響君ならあたし達がいなくても他の女子が熱烈な応援してくれるよ」遙もにこやかにさういう。

「あっそ。わかったよ。俺が負けたら二人のせいだぞ」

「負けたらそれは響たちが北高よりも弱いつてことだよ」由麻は冷たく返した。

響は無言で由麻の頭を撫でる。由麻は響の手を払う。

「ちえ」響は自分の席に戻っていった。

「いいの、練習見にいかなくて？」遙が聞く。本当は響たちの練習も見てみたかった。この学校の男子バスケ部は県大会でもそこそこいけるレベルらしいから。響は副キャプテンらしい。あの体格で運動神経も抜群だし、無理もない話だ。

「いいんだよ。遙も言ったじゃん。あいつにはうちらがいなくても応援してくれるほかの女子がいっぱいいるんだから」

「響君ってプレイボーイだよな」

「女たらしなだけだよ」

「嫉妬しちゃう？」遙は今までの復讐だといわんばかりにさう言うてみた。

「馬鹿遙」

「そんなひどい」

バスケットボールは好きだ。特に好きなのがドリブルして敵を追い抜くこと。華麗なドリブルに相手は翻弄される。スリーポイントシュートを入れるのも好きだ。

響はすでに服を着替え、バツシュを履いて、準備万端の状態でボールを地面にバウンドさせて試合が始まるのを待っていた。北沢高校の連中はもう揃っているし、観客席には由麻の予想通り女生徒が熱狂的な視線を選手に向けている。

やっぱりこうでなくちゃな、と響は観客席を一瞥した後ボールを人差し指で回してみせる。こんな簡単なことでも女子たちはまるで曲芸をやったかのように驚いてくれるのだから、ちよるいもんだ。

そろそろ試合が始まるようだ。響はボールを外に用具入れに投げる。バツシュの紐を確認する。

選手同士で集まる。三年のキャプテン、松岡は緊迫した顔つきだ。彼は練習試合といえども手を抜く選手ではない。

「コーチがさつきもいったように、相手は俺達より格下だ。しかもホームだ。絶対に勝たないといけない試合だ。ミスなんかしたらベンチ行きだからな」

「野村さえ抑えれば楽勝だろ」長身の男が言う。

「そうだ。そいつだけには注意しろ。野村だけ抑えれば、俺達の圧勝だ」

五人で湯を入れあい、試合に臨む。響は背が高いが、仲間には同じ二年で百九十センチもあるひよる長い田沼という男がいた。なので、最初のボールの取り合いは彼にやってもらおう。

試合が始まる。田沼は難なく相手チームよりも高く飛び、ボールを仲間にした。響が受け取り、女子が歓声を上げた。彼のドリブルはこの中でもダントツにレベルが高く、容易に相手チームの守備をくぐってシュートを決めた。初点は響たち西蘭側が取った。相手

チームは悔しがり、西蘭の選手達は勢いこむ。まだまだ、試合は始まったばかりだった。

相手チームの中にも優秀な選手がいる。野村祐は響と同等かそれ以上の選手だ。北沢高校バスケット部の主力だ。坊主頭にくりつとした大きな目は女生徒に可愛いと評判だ。その野村はパスを受け取ると響以上に迫力のあるドリブルで西蘭の選手達を次々と追い抜き、中肉中背ながら素晴らしい跳躍力で華麗かつ力強いシュートを決めた。響は野村を睨んだが、野村は響のことなど眼中にないかのように観客の女生徒を見ている。

男子校の北沢には女生徒は珍しいだろうと響は怒りを込めてそう思った。

響はボールを受け取るとドリブルをするが、野村が素早く動き、ボールを奪われた。

響は激しい怒りを覚えながらも冷静になるよう努めた。女子連中に格好悪い姿を見せてしまっているかもしれない。しかし、まだまだこれからだ。

野村がまた一点を取る。ザルな守備だと響は思う。自分以外の選手がどれもぱつとしないのがこの西蘭バスケット部の欠点だ。動けるのはキャプテンの松岡くらいか。長身の田沼は背が高いただけで他は並だ。

「響！ とられてんじゃねえ！」

コーチが檄を飛ばす。響はコーチをにらみつける。唾でも吐きたい気分だった。まあいい、次はやってやるよ。

響はボールを受け取るとスリーポイントシュートを狙った。ボールは大きく弧を描き、気持ちのいい音と共にボールに入った。

女生徒の声援。響はそれには反応しない。いつもならここで愛想よく手でも振ってみせるのだが、相手チームの坊主頭のせいである余裕は出てこなかった。

相手チームの猛攻。野村を中心に、なかなかどうしてチームワークの取れた攻撃で、西蘭はうろたえた。そしてあっけなくゴールさ

れてしまう。

響は松岡を見る。そしてコーチ。二人とも鬼のような形相だ。どちらも連取試合なのに国家の命運を分けた戦いのような気持ちを抱いて臨む。響はそんな二人が嫌いだった。

「おらあ！」コーチが指示を送るわけでもなく叫んでいる。響の神経は苛立った。

松岡が響にパスをする。響はドリブルを決める。目の前には野村がいる。女性の声援も耳に入らない。どうやって目の前の敵を捌くか、それだけに集中する。パスをするのは容易い。だが、それは逃げることにつながる。絶対にこいつを抜いてやる。

フェイントに続くフェイント。だが野村を抜くことはできない。隙あらば獣のような素早い動きでボールを奪うだろう。

響はそれでも負けなかった。そして、一点の隙をついて野村を抜いた。野村はすぐに追いかけるが、響は素早いドリブルで他の選手を抜きやり、シュートを決めた。

女子の歓声が耳に心地いい。最高の気分だった。コーチを見ると満足げな顔をしている。まるで自分がゴールを決めたかのような様子が気に食わない。

相手チームの攻撃も響がボールを取って抑え、ゴール下にいる田沼にパスをした。田沼はいとも簡単にゴールを決めた。相手チームにはあまり背の高い選手がいないのは好都合だった。

響は波に乗っていた。こういうとき、自分が実に調子よく動けることをしているので、勝利への確信が湧いてきた。

野村のドリブルをカットしようと響は野村に立ちふさがるが、響はそこで違和感。何かの気配を感じ、つい観客席を見た。

観客席の、女生徒の群れから離れた席に、黒い帽子に黒いコートを着た男が立っていた。能面のように無表情な、長身の男はじつと響を見つめていた。黒手袋をした手にはナイフを握っていて、ナイフの先からは血が垂れて、滴り落ちていた。

響は硬直した。野村がそのまま響を追い抜いていく。

コートの方がやりと笑った。その笑みは響の内部の何を壊した。
まばたきを一回したときには男は消えていた。

コートの怒号は耳に入らない。それでもプレイに戻り、はきはき
としない動きをしながらもなんとか勝利をものにすることができた。
しかし試合には勝つてもいつもの嬉しさはなく、響の顔は青ざめて
いて、仲間の声も女性徒の声援も虚ろなものに聞こえた。

「それで、最近あたしとあんまり遊ばなくなったのは佐伯たちと遊んでいるからなんだ……ふうん」

昼休みに辰巳と瀬奈は互いの机を合わせて食事を取った。最近辰巳は由麻たちと食事を共にしていて、瀬奈と食べるのは久しぶりだった。

「何か文句でもあるわけ？ 瀬奈も仲間に入ればいいのに」

「別にいいよ。あたし、あの連中好きになれないし」

「何で？」

「だって、響君なんてただの浮気者だしね。佐伯は響君や辰巳さえあたしから奪ったビッチだし」

「由麻は良い子だよ。なんだ、瀬奈は響君にぞっこんなんだ」

「そんなことない。とにかく、あたしも遊んでよねってこと」

「大丈夫だって。あの連中とは短期間の付き合いになるだろうし」

瀬奈はぞくつとした。辰巳の顔の微笑みには空恐ろしい何かを感じた。

「辰巳？」

「なんでもないよ瀬奈。だからね、杞憂することなんてないから」

辰巳とはもう一年以上の付き合いになるわけだが、今だにどこか不可解なところがある。彼女は謎めいている。結局のところ彼女は誰一人として自分と対等だと思っていないのかもしれない。由麻たちもそうだが、瀬奈のことも。そう考えると少し寂しい。彼女は、辰巳は瀬奈が一番親しく接してこれた友人だからだ。そんな辰巳は、少しでも二人の間に友情を感じてくれるのだろうか。

疑問はつきない。だけど、瀬奈は辰巳が好きだ。それだけは確かだった。彼女がほとんどこちらのことを思っただけでなく、さまざまなことes隠している。それには自信がある。一年の頃から一緒だった。彼女が何かを隠しているのは間違いないのだ。態度や拳動でそ

れがわかるが、彼女が何を隠しているのかは瀬奈にはさっぱりだし、聞く気もなかった。

「ねえ辰巳。日曜日家に来ない？一緒に服買いにいこうよ」

「いいよ。暇だしね」辰巳は瀬奈の好きな蠱惑的な微笑を浮かべた。

放課後、由麻は一人残り、自分が直面している問題に対し、じつくりと考えをめぐらせた。普通じゃないことが起きている。そう思うべきなのかそれとも非日常に思いを巡らせすぎて妄想が現実のように感じられているのか。どっちにせよ、怖い目にあうのは御免だった。二度と。

鏡の悪魔の話、知ってる？

由麻は立ち上がった。頭の中を駆け巡る会話。

鏡の悪魔の話　あまりはつきりとは思いつけないが、この学校に関わるものだ。由麻は記憶を探る。鏡の悪魔　そうだ、この学校の過去の怪異にまつわる話。

図書室にいつてみようという考えが頭をよぎるが、何故図書室に行こうなどと考えたのかわからなかった。理由は直感のあとでわかった。図書室を管理する教師、野村瞳に会いに行くのだ。あの先生は知識が豊富だし、この学校の過去の忌まわしい事件にも詳しいようだし。

鞆をそのままに、図書室に向かう。図書室は別棟なので渡り廊下を歩く。

どこかひんやりとした廊下は、進むうちに由麻の気持ちを萎えさせた。妙な気配を感じる。何度か感じたことのある気配。邪悪を思わせる異質の気配は由麻の歩みを遅らせていた。

他の生徒が向こう側を歩いてくる。すると、気配は消えた。由麻はほっとして先を進んだ。

渡り廊下の向こう、特別棟の突き当りを左にいき、突き当たりの扉を開ければ図書室だ。明かりがついているところを見ると、由麻は気持ちを明るくさせた。

扉を開ける。本棚の列を通り過ぎて机でコーヒーをすすする野村の下へ。

「野村先生……くつろいでますね」

「おや、由麻ちゃんじゃないか。どうしたんだ？」図書室の管理人である野村瞳は野太い声を出した。野村は女だが、まるで男のような、がま蛙のような声を出すのが特徴だ。醜い声に細い目をしていて、四十代後半になってもいまだ独身だった。長い、緩やかなカーブを描いた未だ艶のある黒髪は魅力的なものにと由麻は思う。

「由麻が図書室に顔を出すなんてね、何か理由があるとしたか思えないな」野村はにやりとしてコップを下ろした。コーヒーはすでに空だ。

「ちょっと聞きたいことがあって」

「座りなよ」

机の向かいに小さな椅子がある。由麻はそこに腰を下ろした。

「で？」

「鏡の悪魔の話なんですけど、先生詳しいでしょ？」

野村は笑った。「昔の話だね。鏡に封印された悪魔の話だろ？」

「この学校のことなんでしょう？」

「そうだよ。この学校のことだ。二十年も前だね。あたしがまだ初々しい時代のことだよ。ピチピチだね。はちきれんばかりの豊満なボディを維持してたときのことだよ。あのときに嫌な事件があつてね。生徒が行方不明になった。とある男子生徒がね。それから一月後、一人の男子生徒が死んだよ」

「どうやって？」

「鏡の頭をつつこんでね。血まみれだった。どうやってそんな芸当ができたのか、誰もが首をかしげたよ。自殺だった。別にいじめられたわけじゃないし、何で自殺しようとしたのかはわからなかった」

「へえ」

「そしてまた一人の生徒が机の上で首を吊って死んでいた。自殺として処理されたけど、同じ学校で同じ期間に二人も死者や行方不明者が出るはずがないという話になってね。殺人の可能性を疑った。

徹底調査だね。でも結局自殺として判断されたし、行方不明の生徒

もついに見つからなかった。そしてまた一人が行方不明になった

話はそれでおしまい」

「終わりなんですか？」

「ここから先は眉唾な話だよ。真実はわからないんだ。でも由麻が聞きたがっているのはここから先だろうね」

「一応、続けてください」

「生徒の死や行方不明には鏡に潜む悪魔が関わっていると聞いた生徒がいてね。学校の旧校舎には昔古い鏡があるんだ。その鏡は呪われていてね、悪魔が棲み付いているらしい。それでその生徒はどうやってかは詳しく知らないけど、悪魔を退治して、その鏡に封印

閉じ込めたんだって」

「その生徒、何者なんですか？」

「よく知らないんだ。その生徒は名を名乗らなかったらしいよ。そんな生徒はいなかった、というのが真実なんだろうけどね。とにかくその後は誰も死なないし、行方不明者も出なくなった、というわけ」

「鏡の悪魔ってどんな連中なんですかね？」

「さあ……悪魔といっても、当時は変なものを見たっていう生徒が絶えなくてね。包帯を巻いた男が廊下を歩いていたとか、見るからに吸血鬼な格好をしたのがトイレから出てきたとか、巨大な手が保健室のベッドから出てきたとか どうした？」

「なんでもありません」由麻は取り繕うとしたが、上手いかなかったです。

「続けるぞ？ 生徒達も不審に思っていたし、そんな噂のおかげで学校全体が少しおかしい状態だった。恐怖で発狂しそうになる生徒もいれば、好奇心で授業にも参加しないで学校をうるつく生徒が増えたりして。あのときはあたしも変だと思ったよ。実際、なんだか奇妙なものを見たことも二度あったしね」

「何を見たの？」

「いや、それは言わないでおく。どうせ勘違いだろうしね。とにかく

く、そんな状態も一人の生徒の死と二人の生徒の行方不明の後はめつきり事件も起こらなくなつて、自然になくなつていったよ」

「ふうん。結局迷宮入りつてこと？」

「そう……なるかな。警察には解決できなかった。学校自体が閉鎖されてもおかしくないような異常な事件だったよ。正直、よくまだ続けていると思うよ」

「全くですね」

「満足したかい？ まだ聞きたいことはあるか？」

「そうですね、じゃあ最後に。先生はいつ結婚するんですか？」

「消える」

「わかりました。先生どうもありがとうございました」由麻は立ち上がつてお辞儀した。

「そのまま帰れよ。今の話聞いたら一人でこの学校にいるのは怖いだろ」

確かにそのとおりで、図書室を出ると由麻は恐怖に慄いた。まるで廊下全体が自分に悪意を向けてくるかのような気分。また図書室に戻りたいが、急いで教室まで戻る。

頭の中では野村の言葉が頭をよぎっている。巨大な手が保健室のベッドの下から出てきた。由麻は自分と同じ経験をした生徒のことを思う。今はいいおばさんになっているのだろうか。死んだり、行方不明にはなっていないだろうか。

薄暗い廊下に人の気配はない。鞆を持ってくればよかったと思う。遙はどこにいるだろうか。もうとつくに帰ってしまったのか。いつもなら駅まで二人で歩いて帰り、駅前でスイーツを食べて楽しんでいるのに。

教室の前の廊下を歩く。教室に入り、鞆を取る。携帯電話が震えた。遙からのメールだろうか。しかし登録されているメールではないようだ。一体誰からなのか、開いてみる。

お前は死ぬ

嫌がらせに違いない。メールアドレスは……表示されていない。そんなことがあるのだろうか。由麻はもう一度メールを確認する。しかし、メールは存在しなかった。

今のも見間違いだろうか。由麻は何度かメールを確認するが、今届いたと思われるメールは見つからない。

由麻は鞆を拾うとさっさと教室を出て、早足で廊下を歩いた。

もう生徒の姿はみえない。時刻は五時半。まだそんなに遅くない。どの教室にも残っている生徒はいらるうし、部活中の生徒も大勢残っている時間だ。大丈夫。

後ろで足音が聞こえるが、気にしない。生徒か教師が歩いているだけのはずだ。

駄目だ。由麻は気弱になる。何も気にするな。幽霊、妖怪。そんなものは存在しない。最新のヒット曲を頭の中で流す。そうだ。自分の平々凡々の人生に化け物が入り込む余地なんてない。鏡の中の悪魔なんてただの出鱈目。誰かがそんな感じで生徒は死んだり行方不明になり、そして生徒の一人が鏡に封じ込められたから助かったという与太話をでっち上げたんだ。まるでそうだといわんばかりに事件が起きなくなつたから、そんな信憑性の薄い話が今でも本当のように残っているんだ。

目の前に二人の生徒。男女の生徒は生徒会役員だ。付き合っているのかと思うほどくっついて喋っている。由麻はなんとなく嘲りの笑みを浮かべる。それを見て、二人の男女は途端に押し黙った。

階段を下りると上がってくる教員とすれ違う。大丈夫。人は十分いる。一階にたどり着く。もうすぐ正面玄関。外に出れば、こんな不安とはおさらばだ。

空気がひんやりとしている。何かの気配。背後を振り向くと、一瞬誰かがいたような気がした。すぐに消えたが、何かがあったような気がしたのだ。

笑い声が響く。

狂気を感じる笑い声は廊下中に響いているが、きっと誰も気づかないんだろう。なんとなく、由麻はそう思った。

目の前に帽子を目深に被った生徒の姿が唐突に現れた。その顔は見えない。

「君を鏡の中に案内するよ。そこで永遠に殺してあげる」

生徒の姿は消えた。由麻は走り、玄関を出てもペースを落とさずに校門を出た。目には涙を浮かべていた。

携帯電話が再び振動する。嫌な予感しかしない。開いてみると、メールが来ている。文章はほとんど一緒だった。

絶対にお前は死ぬ

辰巳は図書室に行き、昨日佐伯由麻もここにきたということを知り、村から聞いた。昔の行方不明者と殺人があつた時期のことを聞いてみようと思つたのだが、それが鏡の悪魔の話とつながっているのは予想通りだつた。が、予想通りとはいえ、彼女の不安感が増していた。事態が自分の予想より悪い方向に向かつているような気がしてならなかつた。なぜかというところ、この奇妙な肌を突き刺すような感覚は日に日に強まっているからだ。そしてそれは学校全体を覆いつつ始めている。

生徒の姿が日に日に陰っている。脆弱な影　そこに大きな支配が感じられる。大方の生徒は安心だろう。しかし、やはりというか、鏡の話が端を発しているというのなら、由麻たちはただでは済むまい。彼女にはわかるが、はっきりと憎悪と快楽的な悪意が増している。

行方不明二名。と死者一人。死者は鏡の中に引きずり込まれるところだつた。しかし、失敗したのか頭部に強い衝撃を受けて死んだ。しかし他の二人は　。

放課後の学校というのは不気味なものだ。

「いい加減にしといたほうがいいぞ？」　こういふ声が聞こえてきても、辰美は驚きはしない。だが、恐怖を感じないかといえ、そうではなく、彼女は怖かつた。

醜い老婆の顔をした幼女の姿が、少し離れたところに立っていた。目の良い辰美にははっきりと相手の姿が見て取れる。

「見世物小屋に戻りなよ、フリーク」　虚勢を張ることも大事だといふことを彼女は知っている。

「今のうちにここを去れ。それかおとなしく普通の生徒のように振舞うか。あまり目にあまる行動をするのなら、こちらとしても手下をけしかけることもあるかもしれない」

「笑わせるな。大物ぶっているが、お前が連中のドンじゃないことくらいわかっている」

張り詰めた空気は、冷たく、重かった。

幼女が笑った。幼児特有の高い声とは不釣合いの重々しい口調が異常性を際立たせている。「せいぜい虚勢を張ってればいい。お前がただの馬鹿か、そうでないかはこちらも理解しているつもりだ。いいか、警告だけしておくぞ。最後の警告だ。関わるな。連中と接するな。嗅ぎまわるな。お前を殺すのはたやすい。だが、見逃してやってもいいとっている。もし警告に従わないのなら、お前も同じ扱いを受けることになる。鏡の中を案内してやるぞ」

幼女は消えた。

辰美はふうつと息を吐く。

「割りに合わない」彼女はつぶやいた。

「辰美？」

振り返ると沢村瀬奈の地味な顔があった。

「どうしてこんなところに？」辰美はほっとして笑みを浮かべた。

「いやさ、一人で帰るのも退屈だと思って。ね、辰美はこんなところで何してたの？」

「ちよつとね 考え事してたの。歩きながら」

「嘘くさいなあ。ここ特別教室ばっかじゃん？ 辰美の部活は茶道部だけど、ここにはないしな。あ、ここで部活してる誰かが彼氏なんだ？ 待っているんだ、彼が帰宅するのを。うわあ」

「膨らませすぎ。違うから。もういいよ。帰る」

「うん」

辰美はやれやれという顔をしてみせたが、内心彼女の登場で恐怖を取り除くことができ、感謝していた。

小用を足し、高橋香住は個室から出ようとする。誰かがトイレ内に入ってきたので少しためらう。どうせなら入ってきた生徒が個室に入ってから出ようと思う。だがなかなか固執に入っていく気配がない。何だ、鏡を確認しにきたただけだろうか。

二回ノックをされた。香住は不思議に思いながらもノックを返す。他の個室は全て空いているはずなんだが。

ノックが再びしたときは誰かの嫌がらせか遊びだという結論に至った。きつと外の奴はにやにやしなからこちらの様子を伺っているに違いない。

「誰？」

問いかけるも返事はない。もういいや、外に出てしまおう。香住は外に出た。

外には誰もいない。香住は辺りを見回し、空いた個室を覗いた。扉の裏側も見た。しかし誰の姿もなかった。

きつと急いで外に出たんだ。扉を開ける音はしなかったが、そうに違いない。それしか考えられないし。

ふうつと香住はため息をついた。外に出れば誰かが待ち構えてにやにや笑みを浮かべている、ということも考えられる。きつと岬の奴が、野沢の仕業だろう。由麻たちがそんなことをするとは思えないし、まさか繁が女子トイレの中に入ってくるなんてありえない話だ。悪戯好きの岬しか考えられない。

扉を開けて外に出る。廊下の外は誰もいなく、静かなものだった。外で出迎える、という様子ではなさそうだ。

香住はため息をついた。性質の悪い悪戯だ。こんなこととして小学生ではあるまいし。何が楽しいというのだろう。これが、親しい人間の考えたことならまだわからない話ではないが。苛立つ気持ちを抑える。くだらないことだ。教室に戻ろう。

誰かの声があったような気がしたので振り返る。誰もいない。気のせいだろうか。囁くような声を聞いた気がしたが。

誰かがいるのなら、嫌がらせの犯人だろう。

しかし随分と静かだと思う。携帯電話を取りだす。開いてみると繁からメールが来ていた。香住は微笑む。他愛無いメールの文章に、自分に対する愛を感じる。繁とはいつまでもこんな関係が続けられたいと思っっている。繁は大学には行かないとっっていた。高校を卒業したらやりたいことがあるとっって。それが何かは知らないが、香住は彼についていくとっった。結婚の約束をしたのだ。

幸せな気分。まだ高校二年生なのに、婚約をしてしまった。彼女は高校を卒業したら繁と結婚する。そして、子供を生んで幸せに暮らす。今からそう考えるだけで気持ちが高揚してしまい、嬉しさのあまり涙が出そうになるくらいだ。

また声がある。教室の生徒の声じゃないのだろうかと香住は考えた。人の声がある二年D組からここは少し離れているが、それでも生徒たちの話し声や笑い声が聞こえてくる。香住は寂しくなってきた。早く教室に戻ろう。もうすぐ授業も始まる。

香住は腹に手を当てた。少し冷える。廊下は随分ひんやりしている。まるでクーラーだ。腹に手を当てていると、不意に思い出した。子供が出来たかもしれないと繁に言ったことがある。腹をさすりながら。繁は仰天していて、うろたえるばかりだった。すぐに嘘だと白状すると、心底ほっとしたようだった。

「でも俺たちが高校三年生ならよかつたんだけどな」

「本当に？」

「勿論。そしたら卒業して就職と同時に結婚だ」

幸せな記憶。まだ短い人生の中で一番最高の記憶。そんな彼女は川を進む小船のようにたゆたっている。希望と、不安。

そんなに甘いはずがない。この年で赤ちゃんなんて世話できる自信なんてないし。きつと、そんなに上手くいかない。でも……それでも、繁と一緒になら、どんな困難も乗り越えて行ける。そんな気が

する。

そういえば由麻や遙はきつと処女だろうな。こういうのって個人差なんだろうけど、人生って不思議だ。優越感のようなものは全く覚えない。むしろ二人とも早くいい相手が見つければいいと思う。周りに男を思い浮かべる。響は浮気者だろうし、貴春は二人に興味がなさそうだ。いつも響と一緒にだから女子にはホモ疑惑を持たれている。哀れなものだ。

教室に戻る。入る前から気づいたが、誰もいない。特別教室だったろうか？ 黒板には自習 図書室でそれぞれ独学するようにと書かれている。では皆は図書室に行ったのだ。合点がいったが、随分行動が早い。

図書室か、香住は歩くのを面倒くさがった。渡り廊下を歩いて隣の棟へ行くだけだが、図書室なんて全然興味がない。ここで彼氏とメールを打ち合っているほうが楽しいに決まってる。自分の机に座り、繁にメールの返事を打つ。

囁き声が再び聞こえた。香住は苛立ちと共に机を立ち上がると怒りの形相で廊下を見回した。誰もいない。しかし、はっきりと聞こえた。誰もいないなんてそんなはずはない。香住は確信していた。「誰なの！」声を上げるが、誰も姿を見せない。

香住は隣の二年C組に向かった。声の主はここに逃げ込んだかもしれない。覗いてみるが、室内に人の気配はなかった。美術室で授業を受けているのは知っているが、人気の無い教室だ。誰かが隠れているという気配もないようだ。

わけがわからない。幻聴でも聞こえるようになったのだろうか。自分の教室に戻る。億劫だが、図書室に行くことにした。一人でいるからこんな奇妙な幻聴を聞くのかもしれない。少し、怖くなってきたようだ。囁き声のことは気にしないことにして、図書室に急いだ。渡り廊下を歩く。この渡り廊下は窓から外の景色が見える。外は相変わらずの曇りだ。最近、しょっちゅう雨が降っているような気がする。今日は雨こそ降っていないが、今にも振り出しそうな気が

配を見せている。雨の日は嫌いだ。どんよりとしている空を見ると気分が鬱屈してくる。廊下は電気もついておらず、薄暗い。最低だ。太陽の光を浴びて気持ちよく昼寝でもしたい。

足音が聞こえてくるが、気にしないことにした。いつだって生徒や教師は学校中を歩いているのだ。足音一つでいちいち振り返る必要はない。足音は段々と速度を増していく。香住は少し気になり、振り返った。香住のすぐ背後に半裸の女が歩いている。半裸の女というのは、彼女は衣服が破れており、むき出しの肌は灰をかぶったような気味の悪い色になっている。

香住は驚いて逃げ出した。悲鳴を上げなかったのは不思議だった。半裸の女は長い腕をしていた。足よりも手のほうが長そうだ。そしてその腕の先には長い手指がある。みようによっては滑稽ともいえる姿だ。だが香住には不気味な恐怖の対象にしか見えなかった。

瞳孔のない白い目はどこを見ているのか定かではないが、まっすぐ香住の後を追いかけることはできるようなのでみえてはいるようだった。唇はナポレオンフィッシュのように厚く、そこから覗く歯は黄色く汚れている。

全速力を出す香住のスピードにはついていけないようで、香住はすぐに彼女　腕の長い、灰色の肌を持つ白目の存在から距離を離すことができた。それは香住を追うのを諦めたのか、立ち止まり、それからくるりと背を向けて渡り廊下を戻っていった。

何だろう？　香住にはわからない何かは、だんだんと姿が翳っていき、廊下の角を曲がろうとしたときには完全にみえなくなつた。

香住は目を疑った。

囁き声が出た。香住は驚いて周囲を見回した。

誰かの声。声は幼い感じだったが、そこにははっきりと悪意が込められているということに香住は気づいた。

「死ね」そう聞こえた。小さいが、はっきりと。

笑い声が廊下中に響いている。笑い声の主は姿を見せないが、香住にはわかる　何かがいて、自分に敵意を向けているということ

を。

以前は一人で出歩くのが普通だった。別に孤独なわけではない。一匹狼を気取っていただけだ。一人のほうが目立つ。それに、何だか男らしい気がしていた。それでも、やはり友達は重要だ。学校で友達がいなくても人間はどうやって生きているのだろう。彼女も大事だが、友人も大事だ。そもそも友人の少ない奴は彼女もいない場合のほうが高い。周りの連中を見ているとそれがよくわかる。

仲間も大事だが、一人で行動するのも大事なことだと思っていた。だが今はどうだ？ 一人では廊下すらまともに歩けなくなった。トイレに行くのも本当は響や繁を誘いたいくらいだが、前はずっと一人でトイレに行っていたし、今更仲間を連れてトイレに行くというのも格好悪い。格好をつけている場合じゃないが、それでも貴春はこだわった。だからトイレは生徒たちが廊下に多い時間帯を利用して入る。授業中に抜け出していくことはもう絶対できないだろう。静かな廊下というのがここまで恐怖を喚起するものだとということを知った。いや、知ってしまった。人間は一人では生きられないと思う。たとえ最後には一人だとしても、支えてくれる仲間がいないとこの世界を生き抜くことはできないだろう。

包帯男を再び見るようになったとき、相手が人間の、異常者だろうという見解は無くなった。以来、学校は彼にとつて死と隣り合わせの恐怖の場所ではなくなった。彼ら 校舎を徘徊している怪物 それは包帯男だけじゃなく、他にも複数いる。貴春はそのうちの何匹かを目撃している。そしてそのことは誰にも話していない響にすら。

遠藤辰美。廊下を一人で歩く羽目にならないのは彼女のおかげという気がする。移動教室の際に一人になってしまったとき、彼女も遅れたようで、二人で歩いていくことになった。辰美とは何度か一緒に遊んでいるが、彼女はどこか謎めいた魅力がある。もしかした

ら貴春は辰巳に好意を持ってしまったかもしれない。辰巳の容姿は魅力的だし、落ち着いた雰囲気、実に容姿にあっている。だがその謎めいた不可解さ。これが貴春を理性的にさせる。彼女とはそういう関係にはなれないだろう。向こうは夢にも望んでいないということがはつきりわかっているからだ。

食堂の帰り道、貴春はカツサンドを持ちながら階段を上がっていた。生徒の賑やかな喧騒が心地いい。貴春は怪物たちのことは何も知らないが、怪物たちが人気のないところで襲ってくるのはわかっている。包帯まみれの男に襲われ、鉈を持った男に狙われれば誰もが用心するようになる。

階段を上がっていると、貴春は嫌な予感を覚えた。ひんやりとした冷たさ。危険の兆候。全身に鳥肌が立つ。

慌てて周囲を見回す。カツサンドが落ちて階段を転げ落ちていく。静かだった。さっきまで生徒達の声が聞こえたのに、急に人の気配がしなくなった。

二階の廊下を何かが歩いている。歩いて、こちらにやってくる。カツカツカツ、靴音が響く。

貴春は冷や汗をかいていた。姿を現したのは白衣を着た女性。ここはいつから病院になったのだろう。考えられるとすれば、保健室の先生。しかし、そうではない。その顔は青く、死霊のようだった。その青さと異様なほどの目の大きさが人ならざる者の雰囲気を感じている。長い髪は赤く、くるくると巻かれている。コイのように半開きの口は思考がまとまらないだろうということを予想させる。

手には大型のナイフを持っていた。肉を骨ごと切ってしまいそうな大きなナイフだ。ナイフは綺麗だが、白衣にはところどころ黒っぽい染みがついている。血だとは思いたくなかった。

貴春はきびすを返して逃げる。全速力だ。すぐに一階へ。一階には生徒の姿もない。最近こういうことがある。前にも鉈男に襲われたときに少し前まで生徒の音が響いていた教室が無人になったこと

があった。

つまり、救いはないということ。ではどうする？ 走り続けるしかない。

貴春は食堂に逃げ込むことにした。厨房に隠れるという手もある。鉈を持った大男は一年の教室の掃除用具入れの中に隠れたが、上手くいった。今度もなんとかなるかもしれない。

食堂の中にはやはり誰もいない。テーブルで食事をとる生徒も、カウンターに立っている店員の姿もみえない。こんなことはありえない事態だ。

厨房の中は狭いし、見つかったときに逃げにくい。貴春はテーブルの下に身を潜めた。椅子があってもよく見ればすぐにわかってしまう。貴春は見つかったときにすぐに抜け出せて逃げられるように心構えをする。

扉から足音が聞こえてくる。先ほどの白衣の女と一致する。靴音から彼女が食堂をゆっくりと見て回っているのがわかる。貴春は緊張していた。見つかったらまた逃げないといけない。上手く撒けばいいが、向こうがどれだけ速いかわからないのだ。鉈男のようなスピードだったら勝負はすぐにつくだろう。

白衣と、その下から見えるストッキングに包まれた細く綺麗な足と、赤い靴。そしてうつすら見えるナイフの先。

もしかしたら勝てるかもしれないと貴春は考えた。相手は女。だがすぐに打ち消す。女？ いや、化け物だ。

しばらく女は食堂をさまよったが、やがて食堂から出て行く素振りを見せた。貴春はほっとした。なんとか隠れ逃れることができたようだ。

女が食堂を去ると、貴春はこそそとテーブルから出て、立ち上がった。靴音は遠ざかっていく。

「貴春君？」

声が出た。見ると、自動販売機の前に遠藤辰美が立っていた。

「辰美かよ」

「どうしたの？」

「別に。ちよつとね　なんでお前一人だけなんだ？」

辰美は缶コーヒーを取り出し口から取り出すと、蓋を開けてのみだした。

「一人だけって？　一人だっけいいじゃない」

「そうじゃなくて、他の連中はどこにいるんだってこと」

「他の連中って？　みんないるよ」

辰巳の声が合図だったかのように、生徒たちの声が聞こえた。貴春は辺りを見る。さっきまでいなかった生徒たちがテーブルに座って食事をしていたり、売り場で食事を頼んでいる。

「どうしたの、驚いたような顔して。変なの」辰美はくすりと笑うと、食堂を立ち去っていった。残された貴春はただただ呆然とするばかりだった。

そろそろ頃合だ。いつまでもこういう状態にしているわけにはいかない。その生徒は考えた。あの連中はもう怪物たちのことを把握しているし、知っている。そろそろ行動に移るべきだ。いつまで待っていても仕方が無い。状況はますます悪くなるばかりだ。早急に手を打つべきだ。連中はとっくに気づいている。これが、あの鏡に關係しているということくらい。

生徒は覚悟を決めた。対抗するには、全てを明かすしかないのだから。

由麻は最近一人で廊下を歩かない。必ず遙を呼ぶし、遙も由麻の脅えようが普通ではないので、なるべく由麻の願いに応じている。由麻が変になったのは一度あったが、そのあとすぐに元気になった。しかし今度はずっと何かに脅えっぱなしだ。

二人でトイレに向かい、遙は由麻がトイレから出るまで中で待ってやり、一緒に外に出る。手でもつないでやろうかと思うくらいべつたりだ。遙はやれやれと思うが、気丈な由麻がどうしてここまで変ってしまったのか、不思議だった。由麻は強い子だ。何かあったに違いない。よっぽど恐ろしいことが。

トイレから教室に戻るとき、遙は由麻に聞いてみることにした。「やっぱり最近の由麻変だよ。本当は何かあったんでしょ？ 教えてよ」

由麻のことだから教えてはくれないだろうかと思っただが、由麻は足を止めた。

「実はね、遙」由麻は最近のことを遙に話した。

話した後、不気味な沈黙が流れた。二人は歩きながら教室まで戻

り、机に腰掛けて話を続けた。

「携帯ねえ。悪戯じゃないんだね？」

「そんなことする奴いないと思うけど。大体アドレスが表示されないしね」

「ふうん。恐ろしい話だね」

随分と呑気な遙の態度に由麻は苛立った。

「ねえ、おかしいでしょ？」

「おかしいね。でも、由麻。由麻だけじゃないの」

「えっ」

「最近ちよくちよく変なものを見る　化け物を。昨日も廊下で包帯を巻いた大きな男を見た。あたしたぶんこのままだと気が狂っちゃうよ」

二人は沈黙した。

「怖いよ、遙」

「あたしだって」

「なんとかするべき、だよね」

「どうやって？」

「皆に相談してみる」

丁度その頃響と繁と貴春の三人がやってきた。

「どうしたんだ？　深刻な顔して」

響はいつものように爽やかな笑みを浮かべている。

「あのね」

由麻は響たちに自分と遙に起きた事件を話した。

話をしている最中、貴春と響の表情が明らかに変わった。由麻はそんな三人の態度を見て、なんとなくわかってしまった。やはり、これは全員に関係のあることなんだと。自分だけの事柄ではない。

「どう思う？　やっぱりあの鏡を覗いたのが原因じゃない？」

「実は俺も、変なのを見るんだ」貴春がぼそりと言った。

響は意外そうな顔をする。「お前も？」

「ああ。誰にもいつてなかったけどな……」

貴春は自分に起きた出来事を話した。包帯を頭に巻いた大男に襲われた話や、白衣の女に襲われた話を。

「原因は鏡だと思う」由麻が言った。

「やっぱりそうだろうな」貴春はうなずく。

響は黙っている。

「だけどき、俺も香住も何も見てないぞ。普段どおりだよ」繁が言う。

「それはたまたまかもしれないじゃん」由麻が言う。

「どうも」

突然、遠藤辰美が彼らの間に割って入った。それは唐突だったのだ、五人は会話を中断して押し黙った。彼女は部外者だから、この話を聞かれたくはなかった。

「鏡を覗いたのはここにいる人たちだけなの？」辰巳が質問をした。

「聞いてたのか？」貴春が鋭い目になる。

「いいから答えて。鏡を覗いていたのはここにいる人だけ？」

「あと香住」由麻が答える。

「そう。じゃあ放課後、見た人だけで集まれる？できれば学校以外がいい。落ち着いた場所で話し合いたい」

誰しもが辰美の顔を戸惑いの表情で見た。急にきた彼女は一体何をいつているのだろう。彼らは疑問に思ったが、辰美のその妙な圧力に誰もが沈黙した。

「それは今俺達が話している話題に関係してるんだよな？鏡の件について。そして辰美はその打開策を知っている、ってことでいいんだな」繁が聞いた。

「そう。あたし以外にこの問題は解決できないと思う」

「俺の家はどうだ？わりと広いし」繁は提案した。

「部活があるんだ」響が言った。

「そんな場合じゃないと思うな」辰美が言う。

「何だよ、お前ら馬鹿じゃないか？あんなのただの鏡だぜ。変な

奴を見たって……見間違いつてこともあるだろうし」

由麻は響を見た。響は信じていないのだろうか。しかし響の顔には恐怖の色がありありと浮かんでいる。

響も怖いのだ。由麻はそう思った。

「何だよ響、嘘だっていうのかよ」貴春がむっとした顔になる。

「だってよ、ちょっと信じられない話だし」

「自分だって見たのはわかっているはずだよ、響君」

辰美が言くと、響は黙った。

「とにかく放課後俺の家に集合な？ 香住も呼んでおくからさ」

繁の家は学校からさほど遠くない。歩いていける十分ほどの距離にあり、響や貴春も学校帰りに彼の家でまったりとした時間を過ごすことがある。香住がいるときはあまり歓迎されないが。

繁の部屋に七人は集まった。

「で、どうするんだ？」響が聞く。

辰美は鞆から資料を取り出してそれを周りの者に見せた。資料にはこう書かれている。鏡の国の幻魔。

遙や貴春見た鉦を持った大男のイラストがあつた。正確な描写で、遙は自分が見たものと全く一緒だと感心した。フランケンシュタインの怪物めいたつぎはぎの顔と巨大な体躯とその大鉦。遙は思い出すだけで恐怖を感じた。鉦男と名前が書かれ、その詳細な情報が載っている。

「これ、あたしに襲ってきた奴ね」遙が言った。

「俺も襲われた」貴春が応じる。

「遙さんと貴春君はこれに襲われた。これは？」

辰巳は資料の次のページを開いた。そこには貴春が見た包帯男の詳細な情報とイラストが載っている。

「これ、俺が見た奴」貴春が興奮して包帯男のイラストを指差す。

「貴春君はそれに襲われた。包帯男は鈍足だといわれてるけど、鉦男は相当足が速いはず。遙さんはよく逃げ切れたね」

「必死だったから。教師もきたし」

辰巳は次のページを開く。

「これに見覚えは？」

吸血鬼と書かれたイラストは確かに、どう見てもステレオタイプの吸血鬼だった。あまりにも吸血鬼なので、どうもインチキ臭いものに見える。

「これに見覚えは。響君？」

響はうるたえた。「ないよ。何で？」

「嘘はつかなくていいよ」

「こんな　　こんなにいるわけないだろ！」響が怒鳴る。

由麻と遙は顔を見合わせた。いつもの響らしくない。怖がっているのはわかるが、響ならもつと余裕があってもよさそうなものだ。一体どうしたというのだろう。

二人にはわからなかった。響は確かに怖がっていた。だが由麻たちの想像よりも遙かに響は恐怖していたし、心底脅えきっていた。

響は吸血鬼を見た。そして、彼はその吸血鬼の目が　　全てを見透かしているかのような目が　　怖かった。それは命に対する恐怖ではなく、相手の圧倒的な存在の大きさに、畏怖してしまった。響はそれを認めたくなかった。この世には人智を超えた存在がいるということ。

「吸血鬼は恐ろしいよ。どれも十分危険だけだぶんこの中じゃ一番怖い部類に入る存在だね。響君はこれに襲われるところだった。殺す気はなかったみたい。挨拶程度のもだったから。でもあたしがこなければ響君の心はもつと壊れてたよ」

「俺が壊れてる？」

「らしくないからね。頼りになると思ってたんだけど、残念。

さて、次だね」辰巳はページを捲る。巨大な化け物の姿が描かれたページで、大女という名前が付いていた。

「名前は結構いい加減なの。こんなのにまともな名前なんてないしね。由麻は保健室でこれに襲われたんだと思う」

由麻はそうだと思った。化け物の全貌を見たわけではなかったが、白く太い腕がそれらしかった。こんな大きな奴がベッドの下にいて自分にちょっかいを出してきたと思うとぞつとする。

「　　で、本題に入ろうと思う」資料をしまうと、辰巳は言った。

「化け物の数は複数。みんな色々見たと思うけど、六、七匹はいると思う」

「こいつらは何者なんだ？」貴春が聞く。

「鏡の中の世界に住む化け物」

「鏡の中の世界って何だよ？」

「こことは違う世界。誰も住まず、妖怪だけが跋扈してる世界。世界の全ては反転していて、このあたし達が生きている世界と表裏一体の世界でもあるの。人によってはそこに迷い込んでしまうこともあるし、あたし達が見たような妖怪たちに引きずりこまれることもある」

「馬鹿らしい」響が小声でつぶやいた。

「なんで連中は俺達を襲うんだ？」繁が聞いた。

「連中は人の恐怖を吸い取る。人の恐怖が彼等にとって至上的のご馳走なの。彼らは人を徹底的に脅えさせ、殺してしまう。殺人快楽者のようなものね」

「何であたしたちだけが襲われるの？ やっぱりあの鏡を覗いたから？」遙が聞いた。

「そう。あなた達六人が呪われた鏡を覗いてしまった。鏡は封印されていた。学校の生徒の一人によってね」

「何の話だ？」

貴春がきよとんとしているの、由麻は図書室で聞いた過去の事件のことを説明した。

「へえ、そんなことがあったんだ」遙が言う。

「それでね、その鏡は封印された。だけど、鏡の封印は解かれていた。弱い封印だったからかな。鏡はもう一つの世界の通り道にもなりえるけど、それはごくわずかな特殊な鏡。あの鏡はそうだった。通り道は再び開いている。君たちは興味本位、偶然で鏡に向かったと思っっているだろうけど、実際は違う。鏡は君たちを誘ったんだよ」

「俺達は鏡に顔を映したり触っただけだぜ」響が言った。

「すでに鏡の封印が解かれていたんだよ。君たちが触れたことよって呪いは解け、そこに封じ込められていた怪物たちがこちらにやってきてしまった。連中は学校以外には移動できないけど、学校なら好きなだけ移動できる。完全に奴等のテリトリーになるってわけ。

だから、学校にいる限り、こちらの勝ち目は薄い」

「でも学校に行かないわけにはいかないしな」繁が言う。

「そうだね。だから、君達は戦わなくてはいけないの。あいつら化け物たちとね。戦う覚悟はできてる？」

「いや、できてない。そもそも、こんな話、くだらない。くだらないジョークには付き合ってられない」響が言う。

「そう。だけど用心して。連中の力は日に日に増していく。今はあなた達しか彼等の対象にならない。それはまだ連中の力が完全ではないから。だけど、時間がたてば奴等は本来の力を取り戻して、学校を廃校まで追い詰める。そうなる前に何人かの行方不明者が出るのは覚悟しておいたほうがいいよ。自分には関係ないとは思わないことだね。他の生徒が死ぬ前に、ここにいる全員が死ぬのが先なんだから」

しばし、沈黙が続いた。

「どうすればいい？」やがて貴春が聞いた。

「奴等を倒すの。力を合わせて。奴等は脅威の相手だけど、一匹一匹をみんなで協力して相手すれば、勝てない相手じゃない」

「奴等を倒すことなんてできるのか？」繁が聞いた。「塩でもまくのか？」

「奴等を倒す手段は一つ。恐怖を消し去り、逆に相手を恐怖させること。恐怖を相手に与えることができれば、相手を消滅させることができる」

「よく意味がわからないんだけど」繁が困ったような顔をしてみせる。

「勇気を持つてことなの？」遙が聞いた。

「そう。連中はね、恐怖だけなの。恐怖だけで全てを支配しているそれが彼らの全てなの。恐怖は彼らそのもの。つまり、恐怖さえ感じなければ、連中の力は日に日に減少していくと思う」

「だけとおかしいだろ？ 鉦だか斧だかを持った相手に恐怖心をなくせて……かりになくしたとしても、そんなもんでどうやって勝

てっぺというんだよ？ 鈍でぎっくりやられたら終わりなんだぜ？」
貴春が言うと、全員それに賛同するかのようにならずいた。

「連中は実態があるように見える。だけどそれはそう見えるだけ。実は連中に実体なんてない。呪われたあなた達だけが怪物たちの姿を見ることが出来る。怪物は物理的に倒すことのできる相手じゃないけど、あなた達を物理的に殺すこともできない。それは鏡の中で自分たちの境界である世界の中でのみ連中は実態化できる。けどあなた達が恐怖を覚えると、連中は実態化することもある」
「よくわからない」香住が言った。

「全てはあなた達次第なの。連中は恐怖そのものであり、連中の脅威が見た目どおりになるのはあなた達が恐怖を克服できるかどうかにかかっている。もし連中に対し恐怖を覚えてしまふのなら、連中は実態化し、あなた達を殺す。鈍で殺したり、首を絞めたり、鏡の世界に引きずり込んだり。そして連中はあなた達の恐怖を糧にいよいよ力を増し、他の生徒達にも姿を見せ始める。学校を地獄に変える間違いなくね」

「俺達が恐怖を感じなければ、連中の攻撃はこっちに届かないってこと？」繁が言った。

「完璧な解釈だね。それだけなの。全ては幻なの。あなた達さえそれが幻だとわかって、それ以上の力を与えなければ、全ては幻術に過ぎない。惑わされないで。そうすればあいつらは蚊よりも無害な存在になる」

遙は鈍男に肩をつかまれたことを思い出した。あれは、遙が自身自身で相手に肩をつかめるといふ力を与えてしまったのだろうか。鈍男という幻影に、実体の力を与えてしまったのだろうか。ただあの存在は、あまりにもリアリティがありすぎる。

「こいつらは幻の魔と書いて幻魔と呼ばれている。ここにいる全員が幻魔に打ち勝ち、奴らの力を消滅させるには、全員が恐怖を消し去るしかない。できる？」

辰巳は由麻を真剣な目で見た。由麻は幾分たじろぎながらも、

うなずいてみせた。内心では、自信は全くなかった。

「遙はどう、大丈夫？」辰巳は遙を見る。

「頑張ってみる。お守りとか持って努力して見るよ」

「自己暗示はとても大切だよ。結局最後に勝つのは暗示の力かもしれない」

「俺もやってみらあ。面白そうだ」貴春が言う。

「努力するよ」繁が言う。

「やってみる」香住が不安そうな顔で言う。

「で、響君は？」辰巳が響に聞いた。

響は鬱陶しそうな顔を隠そうともせず、その顔には嘲笑するような笑みを浮かべていた。

「怪物や妖怪なんて馬鹿らしい。いないものはいないからな。だから俺は問題ない。だろ？」

響の態度に誰もが緊張していた。いつも明るく、リーダーシップを発揮することもある響とはまるで違う雰囲気。彼等を不安にさせていた。

「オツケー。響君。それでいいことにする。でも忘れないで。皆が力を合わせないと、奴等を倒すことはできないということを」

「オツケー、覚えておくよ」響は全く心を込めないで返事をした。

辰巳が立ち上がる。「話は終わり。あたしのいったこと、忘れないで。全ては皆の勇気にかかっている。本当だよ。じゃあね」

辰巳は出て行き、そして残った者たちも解散することになった。

どこかで遊びに行くような気分ではなかったから。

電車の中で、由麻と遙は自分たちの降りるべき駅まで寄り添うように腰掛けている。二人ともどこか疲れた顔で、同じような事柄について考えていた。

「さっきの話、本当かな？」

電車の中で遙が由麻に聞いた。

「さあ……わからないよ。大体なんで辰巳さんがあんなに色々なことを知っているのかもわからないし」

「そうだよ、不思議だよ」

「でも辰巳さんのいうことって信じられる気がするな」

「何で？」

「遙も感じなかった？ あの人、すごい真剣に話してる。あたし、信じるよ」

「あたしだって信じてみたい。けどすごい怖い。怖い」

由麻は遙の手を握る。

「あたしも同じだよ。だからさ、二人で乗り越えようよ。皆で力を合わせないといけないって言ってたでしょ？ あたしもそう思うの。一人じゃ絶対に、乗り越えられないって、わかる」

「そうだね」遙も由麻の手を握り返した。

遙と意思を一つにしながら、由麻は沢登響のことが気がかりだった。

次の日の朝、由麻と遙は一緒に教室に入り、トイレや移動教室の際も二人で、あるいは貴春や繁、香住と同行した。多数なら怖くないという発想だが、彼らは仲間との結びつきを感じ、大いに勇気付けられた。怪物の姿は見ない。仲間がいれば連中は襲ってこないのかもしれないと由麻は思った。今までだって、独りのときしか狙われなかった。これからは常に二人以上で行動するようにしようと彼らは誓った。

「で、響君は？」

五人で歩いているとき、香住が言った。

「誘ってもこねえよ。あいつ、俺を見て笑ったんだ。お化けなんていないってよ」貴春がしかめ面で言う。

「ひどいよそれ……響君、なんか変だよ」遙が言う。

「あいつは馬鹿なんだよ」由麻がつぶやいた。

「まあ、信じる信じないは自由なんだろうよ」繁は呑気だった。

固まって行動するようになってからは怪物の姿を見ることはなく、由麻たちはこれが正解だと思った。恐怖を消すには、恐怖を感じないような状況にすればいい。一人よりも仲間がいれば、化け物が出てても恐怖を半減させることができる。

辰巳にそういうふうに行っていると由麻が言うと、辰巳はどこか憂いのある表情でうなずいた。

「駄目かな？」

「多人数を恃むのは悪いことじゃないけど、最後までそれが通じるわけじゃないということ覚えておいて」

辰巳はそれ以上言わなかった。

由麻は少し腹が立った。彼女は全てを知っているような気がするのに、怪物に対しては自分たちで何とかしろという。彼女は妖怪たちを封印することもできるのではないだろうか。きっとそうに違い

ない。彼女　遠藤辰巳は、普通ではないのは確かなのだから。

「陰陽師とか、霊媒師とかかな？」

　昼休憩のとき、由麻は遙にそう聞いてみた。

「知らないよ。本人に直接聞けば」

「聞きづらいんだよね、なんとなく」

　貴春が繁とトイレに行く。野郎連れでトイレかと由麻は微笑する。

　響は　いない。彼は一人で行動しているのだろうか。響のことだから女と休憩時間を共にしているという可能性もあるが。

　由麻は響が非協力的なのが悲しかった。何よりも、響が超現実的な状態に直面したときに、ここまで脆い人間だということが由麻にはショックだった。由麻の知っている響なら、率先してあの怪物たちをやっつける方法を探しているはずなのに。

　廊下で響を見た。女生徒を二人、両脇に従えるように歩いている。由麻はにらみつけるように響とその女性徒達を見て、遙がそんな自分を見ているのに気づいて、慌てて目をそらした。

「響君が気になる？」

「別に。あいつがいつもどおりじゃないのはちょっと心配なだけだよ」

「響君はさ、馬鹿じゃないよ。だから大丈夫だと思う」

　遙の響に対する絶大な信頼は何なのだろうと由麻は思う。

「遙だって響が少し変だって言ってたじゃん」

「変だね。いつもの響君とは違う。だけど響君なら絶対にいつもの響君に戻るよ、すぐにね」

「あっそう。遙ってやっぱり響のこと」

　遙は由麻の胸を突いた。

「どこ突いてんの？」由麻は胸を守るように両腕を交差させる。

「育ち盛りだね」遙は屈託のない笑みを浮かべて言った。

貴春は五次限目の地理の授業を退屈そうに受けていた。地理の担当の井丸は眼鏡をかけて小柄の教師で、生徒達の人気は無い。理由は、授業が実に退屈でつまらないものだから。だが彼はそんなことを気にもせず、今日も淡々とセオリーどおりの授業を続ける。

自分は何のために学校に行っているのか、貴春はそんなことをぼんやり考える。元々勉強は好きじゃない。響とはいつも競争になるが、大体貴春のほうが点は上だ。しかし、勉強は好きじゃない。どうせ伯父の工場で働くのだ。勉強なんてしても無意味だ。少し心配なところもある。伯父の工場は中小企業というよりも零細企業に近い。社長の伯父は十余名ほどの社員を抱えて寝る暇もないくらい働いているらしい。貴春は幹部候補として入る。勿論最初は現場からだが、覚えていけばすぐに監督する立場に回るといった話だ。

伯父は気さくで陽気な男だった。豪快なところもあるし、面倒見がいい。貴春は彼に気に入られていて、工場で働いてみないかと、貴春の家に遊びにきたときに誘われた。貴春の父親は賛成で、貴春も悪くないと感じた。なので、了承したのだが、最近は少し安請け合いだったかと後悔に近い念を抱いていた。高校を卒業して肉体労働に従事するというのは自分らしくていいと思っている。しかし、這い上がるなら自分の力だけで這い上がりたい。コネも実力のうちだという考えもありかもしれないが。

まだまだ早計だったのだろうか。大学に行くという選択肢もあるのだろうか。だが貴春は学問にさほど興味がなかった。

なら、専門学校に行くか。そして色々なことを学ぼう。工業のあれこれを学んで、スペシャリストになる。だが将来的に上に立つなら大学にいったほうがいいだろうか。

悩む問題だ。二年の今のうちにじっくり吟味して、進学を取るか、伯父の工場に就職するか決めておこう。

今は将来のことを考えている場合ではないなと貴春は思い直した。迫りくる悪意に対し、どう対処するか、それが一番重要なことだ。

地理の教師の説明調の言葉は彼を眠くさせるが、負けじとノートに、黒板に書かれていく単語をノートに写していく。地理はとても退屈だ。数学をやっていたほうがまだ面白い。

教師の声が聞こえなくなった。貴春は一呼吸置いているのだろうと気にせずノートに黒板の文字を書き写し、それからすぐに異変に気づいた。

どういうことだ？ 貴春は立ち上がった。辺りを見回す。がらんとした室内。わからない。前にもこんなことはあった。しかし、まさか授業中にもこんなことが起こるとは。これはあまりにもフェアじゃない。

「くそっ」

廊下から足音が聞こえてくる。ブーツの靴音。生徒のものではない。では教師のものだろうか。たぶん違うのだろう。

黒い帽子を被った男が廊下から現れた。整った顔立ちに見事な口ひげを生やしている。燕尾服を着た紳士的な男の雰囲気。だがその右手には大きなナイフが握られていた。

「君を鏡の世界に連れて行ってあげよう」男が言う。深みのある声は人をひきつけるものがあつた。その目はぞっとするほど冷たく、口元は歪んでいた。

「そこで君は永遠に死ぬ」

騙されるな。これは夢だ。現実じゃない。奴等のまやかした。ひよっとしたら、自分は眠っているのか、或いは黒板の文字を書き写している。これはただの幻覚なんだ。だが教室内はがらんとしており、貴春が見える範囲では彼と燕尾服の男の二人しかいない。

「消える。お前は幻覚なんだ」

男は笑みを消した。まるで品定めするかのように貴春を見つめ、そして再びぞっとする笑みを浮かべた。

「君の仲間は全員死ぬ。君もすぐにその後を追うことになる。今す

くにも」

男が教室内に入ってくる。貴春は後ろに下がるが、すぐ後ろの席にぶつかる。男のナイフに目が釘付けになる。ナイフ　　といって普通のナイフの倍はありそうだ。先端は朱色に塗られている。塗られているのか、たまたまそう見えるだけなのか。それはわからない。だがそのナイフは大きな鉈と同様、相当の脅威を貴春に与えた。「お前は存在しないんだ。お前はただの幻に過ぎない」

男は前にある机を椅子ごと蹴り飛ばし、一歩前進した。

「それは違う」男が声を発した。「我らは存在する。なぜなら君はこうして私を見、話している。それは我らが存在するということだ　　と思うが、違うかね？」

「違う！」といいながらも、貴春は机ごと後ろに下がる。彼の席は壁側に近く、すでにあとがなかった。

貴春は恐怖を感じていた。辰巳の言葉を思い出す。彼女が本気で自分や仲間達を救うためにあんなことを言ったのなら、それは正しいはず。貴春は目を瞑り、これは幻だと自分自身に暗示をかける。そして目を開ける。男はまだ目の前にいた。

「無駄なあがきだ。恐怖からは逃れられない。君は死ぬ。我らによつてな」男はナイフの先端を、貴春の心臓辺りに狙いさだめた。

貴春は逃げる気にはならなかった。男の目を見れば、そう簡単に撒けるほど隙のある相手ではないことがわかる。彼は辰巳を信じたかった。繁の家で見た彼女は真剣そのもので、自分達のことを本気で救おうとしているように見えた。そんな彼女の思いに答えてやりたい。

あいつは、目の前の存在はいない。俺は夢を見ているだけだ。これは、この状況はただの幻想に過ぎない。ただの悪夢だ。悪夢には殺されない。あのナイフはまがい物だ。人を殺せる殺傷力もない、ゴム製のもの。

「かかってこい。幻に俺は負けない」

男の顔が崩れた。それは、憤りの顔。なぜか貴春はその顔を見て、

爽快感を覚えた。

ナイフがまっすぐ向かってくる。が、ナイフはぐにやりと曲がり、貴春の心臓を突き刺すことはなかった。

貴春は思わず笑った。「ゴムナイフで人は殺せない」

男が貴春の首を掴むが、その力は弱かった。

「幻に俺をやる力はない」貴春は言葉に魂を込めるように、はつきりとそう口にする。

貴春は男を突き飛ばした。男は驚いた顔をするが、再びナイフを振るった。ナイフは貴春の体には届かなかったが、彼のワイシャツの袖を少し切った。

貴春はまだコントロールできていないのだと思った。そう簡単に目の前の存在を完全に幻だと思い込むことはできないのだと痛感する。

男は一步下がった。憤怒の表情をやめ、冷静さを取り戻したようだ。

「覚えておけ。私は幻ではないし、お前は必ず死ぬ。私たちに殺される」

男は靴音を立てて教室を出て行き、そのまま消えた。

気がつくとき、貴春は眠っていたようだ。教室には生徒達がいて、黒板の文字をノートに書き写している。由麻や遙もいるし、繁も香住もいる。現実だ。貴春はほっとした。さっきのはきつとただの夢だったのだろう。

ふと、ワイシャツの袖を見ると、切られた後があった。

由麻と遙は二人で廊下を歩いていた。彼女達は談笑しつつも周囲の警戒を怠らなかった。特に遙は実際に殺されかけたという体験があるため、顔には緊張が走っていた。

「遙、リラックス」

由麻に見透かされてそう励まされるが、その由麻も顔を見れば、さほど余裕がないのが見て取れた。

「お化けなんていないさ、だよ」

「そうだね」遙はそう思ったが、鉈を持った大男がどこかに潜んでいるのではないかという考えが浮かんで離れなかった。

二人は足を止めた。特別教室に移動する際にいつも通る渡り廊下だがその廊下には不穏な気配を感じた。

「なんか変？」緊張した面持ちで、由麻が聞いてくる。

遙は引き返そうと思った。必ずしもここを通る必要はない。一階から外廊下を進む手もある。

振り返る。そこに鉈男がいるのは、少しばかり予想していたが、実際にいるとなると、遙の全身は恐怖に包まれた。

再び現れた鉈男は、前と同じく醜悪なつきはぎ顔に笑みを浮かべていた。まるで今からご馳走にありつける犬のように嬉しそうな様子に、遙の背筋は凍った。息が上手くできない。過呼吸になりそうだ。

「お嬢さんたちの生足は実に美しい」鉈男は嬉しそうな声を出した。舌なめずりをするそのさまはますます犬のようだった。

由麻が遙の手を握り締める。由麻は蒼白だ。強く握られた手が小刻みに震えている。周囲に生徒の姿は見えない。さっきまでは廊下をうろつく生徒を遙たちは見ている。まだ休憩時間なのに、誰もいないのはおかしい。

「特にあんたの足は最高だ」鉈男は手に持つ巨大な鉈を遙に向けた。

「そちらのお嬢さんの足は少し太いし、短い」大きな笑い声。

遙は息を大きく吸った。力強く握り締める手のおかげか、少しばかり勇気が湧いてくる。辰巳の言葉を思い出す。勇気を持つ。勇気を持って恐怖に打ち勝つ。由麻は震えているが、逃げない。彼女もきつと同じ気持ちなのだ。ここで逃げたら恐怖に勝つことはできないだろう。

「あんななんて消えればいい」

低い声、力強い声で遙は言った。鈍男の笑みが消える。

「二人とも足をちょん切つて」

「あんななんて存在しない！」遙は力の限りの声を出して叫んだ。

「お前みたいな気持ち悪い奴があたしたちに触れていいはずがない！ 消えろ！」

鈍男は鉈を持つ右手をだらりと垂らした。その顔つきに恐怖の色が宿っているのを見て、遙は驚いた。

「そうでしょ、由麻？ 行ってやりなよ」遙は勢いづいた。

「消えろ！ 蛆虫！ 全身きもいんだよ！」由麻は叫んだ。

鈍男はまるでどうしていいのかわからない様子で、うるたえていた。予想外の反撃に、彼は明らかに困惑していた。

「元の世界に帰れ、蛆虫！」由麻が追い討ちをかける。

「雌豚ども」男の声は怒りで震えていた。「せいぜい今のうちに調子に乗ってればいい。次はお前達の手足を切り落とし、永遠に俺のものにしてやる。それを忘れるな」

鈍男は負け惜しみのようにそう言い捨てると、きびすを返して逃げるように走っていった。だが、振り向きざまの顔つきには由麻も遙も再び恐怖に凍りつくほど恐ろしく、そのまま去っていったことが信じられなかった。

生徒達の声が聞こえる。周りの空気が普通に戻ったのが二人にはわかった。いつもの、休憩時間の廊下の風景に戻った。

「賑やかなのはいいことだね」由麻が言う。

遙は微笑んだ。心の中では強い喜びの感情がわきあがっていた。

勝った！

「あいつに勝ったんだよ、由麻」

「でもあいつ、たぶん復讐に来ると思うよ」

鉦男の捨て台詞はかなり強烈なものだった。だが逢は、くるならこいと思った。

響はバスケット部の仲間とそれに群がる女性徒たちと食堂で会話を楽しんでいた。一頃に比べてバスケットボールの人気は低迷したとはいえ、この学校ではバスケット部はまるでハーレムのように女を囲っている。響もそうだし、背が高く顔がよく、女性徒が好みの細身で筋肉質な男がどの学年にも揃っていた。

響はたまに戸惑うことがある。彼女達はまるで何かの匂いを感じ取って群がる蜂のように周囲に集まってくる。自分がそれなりにもてるタイプの男だということは自覚しているが、それにしても、あまりにも持て囃されすぎる。こんなものは学校という組織にいる間のことなのかもしれない。性欲と憧れのようなものを抱いて群がる女子と話すのは悪くはない。学校生活に潤いをもたらす存在であることは間違いない。ただ、たまに疲れてしまう。彼女達は結局こちらに対価をもとめる。それは彼女達と深い関係になるか、セックスの相手をするかということだ。幾人かとは肉体関係を持ったことがあるが、交わりは楽しいものでもあるが、空しいものでもあった。人形に精液をかけただけのような、体と体の密着させる行為なのに、何も楽しさを覚えない。

そんなときに気分転換に由麻たちを相手にすると、気分が落ち着き、穏やかで明るい気持ちになれる。由麻と遙。二人とも群がる女子達とはタイプが違う。自分を大事にしているという感じがする。二人とも警戒心が強いが、響には気を許している。そんな彼女達のことを響は尊敬の念のようなものを抱きながら接していた。二人とも他の女子に比べて派手でもなく、あまり目立たない存在だ。だがそんな彼女達のことを、響は愛おしく思っていた。

現れたのは吸血鬼だ。一人で移動するのは失敗だったかもしれないと響は思ったが、すぐにそんな考えを打ち消した。一人で歩こうがなにしようが、学校の廊下に危険なことなんてない。吸血鬼？

どうせ誰かの悪戯だ。くだらないコスプレに過ぎない。

あるいはただの幻覚だ。

「そろそろ君の血を吸わせてくれないか」

吸血鬼は長い牙をむき出しにした。長い長い牙。映画に出てくるどの吸血鬼よりも長い。鉛筆やシャーペンほどの長さがある。それもものすごく尖っている。あの牙はきつとストロー状になっているに違いない。

「お前はいない」響は言った。自分でもこんなことをいうのは意外だった。辰巳の言葉を気にしている自分に苛立った。「くそっ！

お前はいない」

「私はいるではないか」吸血鬼はからからと笑った。長い牙は普通の歯に戻っていた。

出したり引つ込めたりつてわけか。響は自分が震えていることに気づいた。体が震えている。武者震いではない。純然たる恐怖の震えだ。

「長い間待っていた。もう待てない。血を私に飲ませてほしい。君にとっても悪い話ではないぞ。なぜなら私に血を吸われるということとは、淫売共とのセックスよりも気持ちいいものだからだ。甘美で至福の時間。味わってみたいかね？ 拒否権はないぞ」吸血鬼は再び長い牙をむき出しにした。老人めいた顔は醜く歪み、獲物を狙う猛獣の顔つきに変貌した。

妄想だ。これはただの妄想に過ぎない。響は信じなかった。目の前の存在を認めるわけにはいかなかった。信じてしまうと、自分のアイデンティティが完全に崩れてしまうような気がした。

「マンコでも舐めてろ」響は言ったが、その声が怪人を脅かすことはなかった。

吸血鬼は蝙蝠を放ってきた。響は前と同じように蝙蝠を手で叩いた。蝙蝠に気を取られている隙に吸血鬼が迫っていることには気づかず、彼は強大な力で肩をつかまれた。骨が砕けるのではないかというほどの痛みが走った。吸血鬼の鋭い牙が首筋に迫っていた。逃

れることはできない　と、吸血鬼の力が緩まり、動かなくなった。
「早く離れて！」

誰かの声がある。響は吸血鬼から離れた。吸血鬼の黒いマントに血が滲んでいる。ナイフが彼の腹に刺さっているのに遅れて気づく。一体誰が　響は振り返った。すぐ後ろに、遠藤辰巳がいた。

「口にするだけじゃ意味ないよ。本当の意味で恐怖心をなくさないと」彼女はそういったあと、もどかしそうに首を振った。「とにかく、今は逃げて。ここはなんとかするから」

「小娘！　いつもいつも我々の邪魔をする連中の一人め！　お前等が憎い！　だが我らはお前達のような脆弱な存在にはやられはせぬぞ！」

「早く！　行って！」

響は辰巳の剣幕に圧されるようにその場を離れた。

教室に戻る。和気藹々とする中、響は一人、机に座り、苛立った気分のまま授業を迎えた。辰巳が途中で入ってきて、教師に保健室に行っていたといい訳をした。

「つまり、まだ完全に恐怖を克服できなかったってわけだよ」

「そうなんだろうな」貴春は自分のワイシャツの袖の切り傷を眺めた。もう少し刃が深くにいったら、どうなっていたらだろうか。

「でもすごいよ。貴春君もだし、由麻と遙もね。三人ともあたしの言うことを聞いて実践してくれてる。まだまだ不安だけど、さらなる努力であいつらを負かすことができるようになると思う」

辰巳は微笑し、三人は彼女の言葉に励まされた。

由麻は、遠藤辰巳の首元に赤い引っかけ傷がついているのに気づいた。大して目立たない箇所とはいえ、気になった。

「今みたいな放課後って結構危ないんじゃない？」遙が心配した。

「そうだね。早く帰ったほうがいい。連中は学校以外では手出しできないから」

というわけで、三人は早々に校舎を出た。

帰りの際、由麻は響が校門を出て行くのを発見した。

「遙、ちよつといいかな？」

「頑張つてね」

由麻は遙をにらむ。「馬鹿、違うよ」

「冗談。また明日」

遙と別れ、由麻は響を追った。いつものように女や部活仲間と一緒にではないのは珍しいことだった。由麻は彼の背中に、何かを感じ取った。

「響！」

響が振り返る。目にいつもの精彩がない。

「由麻か。遙と一緒にじゃないのか」

「いつも遙と一緒にってわけじゃないんだから」

響はいつもの小憎らしい笑みを浮かぶこともせず、まるで病気を患った者のように生気が感じられない。由麻は彼のような顔つきを

する人間をしっている。それはクラスの中にも一部いて、彼らはいつも顔に覇気がなく、頭の中はいつも曇り空なのではないかと思えるほど暗く、人によっては薄気味悪く見える。響はそんな連中と似た顔つきをしている。

「響……自分がいつもと違うってわかってる？」

響は微笑したが、それは無理に作ったもので、痛々しかった。

「俺はいつもどおりだよ。変なのはお前等じゃないのか？」

「それはどういう意味？」

「辰巳の幽霊話を信じちゃってさ あんな変な奴の話信じて馬鹿なことしてるお前らには呆れるよ」

「呆れるのはこっちだよ。みんな見てるんだよ？ あのと鏡を覗いたから。響だけが見ていないわけがない。響だって見たんでしょ？」

「俺は何も見てねえ！」

響の激昂した声に由麻はたじろがなかったが、何故響はこうも頑なに彼らの存在を否定するのだろう。響が彼らを見ているのは絶対のはずだ。響もあいつらに襲われている。なのに 由麻は苛立った。

勝手にしろ！ そう叫んでしまいたいが、怒りの感情よりも、響のことを心配している気持ちの方が勝った。

「響はね、怖いんでしょ？」

響は笑った。馬鹿にしたような笑い声は、由麻には白々しいものに聞こえた。

「笑いごとじゃない。響は怖いんだ。どうしようもないほど怖いから、あいつらの存在を否定するんだ。認めたくないから。認めてしまつたら、あいつらが実際するということになるから。だから響は認めないんだ。でしょ？」

「由麻……いい加減にしろよ。自分たちで変な遊びをするのは勝手だけど、俺まで巻き込まないでくれ」

由麻は呆然と響を見て、響はそんな由麻を見てたじろいだ。

「勝手にしろ！」結局由麻はそう叫ぶと、響に背を向けた。

「由麻」響が由麻を呼ぶが、由麻は振り返ろうとはしなかった。響の声が弱々しく聞こえて、それで振り返ってしまいそうにはなつたが。

雨の日は薄暗い。薄暗いということは、校舎に巣食う魔物の力が増すということ。辰巳にそんなことを聞かされた由麻は早く晴れてくれないかとぼんやりと水滴の流れ落ちる窓を眺めた。暗闇に強いのなら、夜は連中が一番真価を発揮する時間なのかもしれない。遙はよく無事に帰られたものだ。

響とは口を聞いていない。由麻は昨日のように投槍な態度をとつたことを後悔していた。響の言葉があまりにもショックだった。家でよくよく考えてみたが、辛いのは響なのだ。彼の心は様々な思いで混乱しているはずだ。それを取り除いてやりたい。その気持ちで響に接したはずなのに、上手くいかないものだ。

由麻は響の席を見る。虚ろな顔をして授業に臨む彼は何を思っているのだろうか。わからない。響の力になりたい。

由麻は自分の思いに気づいた。切ない思い。あたし 響が好きなんだ。世界が暗転する中、狂おしいほどに沢登響のことを慕っているということに気づき、由麻は涙を流した。すぐに涙を拭く。くっだらない。安いドラマじゃあるまいし。

響を救ってやるのが、自分を救うことにつながる。由麻はそう考えた。今の自分なら大丈夫。化け物たちから響を守ってやることができる。

雨音はますます強まり、雨雲はさらに黒くなっていった。暗さが強まりにつれ、由麻の決心はますます強まっていった。

香住は極力仲間を引き連れて行動していた。伊藤岬と野沢奈緒。由麻たちとはタイプの違う友人で、強気な彼女達はきつと化け物なんて現れても恐れないのではないかと香住は思った。

「便所に行こうぜ」

岬がそういつて三人は女子トイレに入った。

「知ってる？ 最近幽霊が出るんだってよ」岬が言う。

「へえ。霊なんていたら水ぶっかけてやろうよ」野沢奈緒は楽しげに応じた。

「香住つて遠藤辰巳と一緒にたまにいるよな？ 佐伯たち地味な面子と一緒にさ」岬が言った。

「まあ……それが何？」

「佐伯や谷川はともかく、遠藤つて靈感少女らしいぞ。笑えなくね？」

「何が？」

「何がっていわれても。だって霊つて」岬は大声で笑う。「馬鹿じゃねえのって思ってた」

「あの馬鹿女に今度問い詰めてみよつか。お前、霊なんているなんていつて友達増やそうとしてんじゃねえって。てめえは沢村とつるんでればいいんだよ」奈緒は意地の悪い笑みを浮かべている。

「二人とも辰巳のこと嫌いなんだ？」

「嫌いつていうか、何かむかつくんだよなあ。気取ってるっていうか、さ」と岬が言う。

「そうだな。気取ってる。あいつ絶対狙ってるだろ？」

「狙ってるって？」香住が聞いた。

「響だよ。あいつ響狙いで佐伯たちに近づいたんじゃない。ほら、佐伯や谷川つて響と仲いいじゃん」

なるほど。香住は二人が響のことを前から好いていたのを知って

いたが、遠藤辰巳が響狙いに見えるとは……少しフォローしてあげたほうがいいかもしれない。

「辰巳は響のことなんて興味ないみたいだよ」

「そうか？ 本当に？」岬が疑る。

「本当だって。辰巳は響より由麻たちと遊ぶほうが好きなんだよ」

「レズってこと？」奈緒が真顔で聞いてくる。

「そうじゃないだろ」香住は呆れる。

そろそろ話題を変えてもいいころだ。別の友人達のことを影でこそそそ言つのはあまり気持ちのいいものじゃない。遠藤辰巳が果たして友人のうちに入るのかは疑問だが。

「ここに霊がでるって本当？」うそ臭いけど

「嘘じゃねえよ……いや、わかんないけど、最近噂になってるよな」

岬が言い、三人は狭い女子トイレの中を見回す。

「何でもこの鏡の」岬が女子トイレに二つある洗面台の上にある鏡を指差した。「写る自分の姿が笑って襲ってくるらしい」

「まじこええ」奈緒が言う。

香住は鏡を見た。鏡に反射する自分は、笑ってなどいない。しかし香澄はこの鏡の噂を信じた。今は大丈夫だろうが、きつとタイミングによってこの鏡に映る自分の顔は違うものになるのだろう。香澄にはわかる。なんといつてもこの校舎には鏡の中から出入りする怪物たちによって支配されている。いや、支配されつつある……連中ならば鏡を自在に操ることなどお手の物だろう。

香澄は鏡の中に映る者を見て、はっと振り返った。

「どした？」岬が聞いた。

鏡には何もいない。香澄だけが映っている。「別に。こんなのただの噂だよ」

「そりゃそうだろ」奈緒が笑う。

一瞬、鏡に映る香澄の背後にドレスを着た少女が映った気がした。人形が着ているようなドレス姿の少女は、にやりと笑ったような気がした。

「鏡はあの世と鏡の世界の媒介だからね。連中の力がもつとも出しやすい場所であることは間違いないよ」

教室で香澄の話聞いたあとに辰巳はそういった。

「これはさ、あの化け物の力が強くなってる、ってことでもいいの？」
辰巳は眉をひそめた。難しい顔をして、彼女は美しかった。再び香澄を見るその目は澄んでいて、心の読み取りづらい奥深さがあった。香澄はそれに対し、嫉妬のような思いを抱いた。この女は普通じゃない。美人だけど、本当に同じ女子高生なのだろうか。彼女の制服姿はどこか違和感がある。悪く言えばあまり似合っていない。普通の女子高生らしさが欠如しているわけではないが、どこか妙だ。こんな不可解な話に詳しいのも妙だ。彼女は奇妙の塊だ。

「あいつらはあなた達の力を吸ってどんどんこちらの世界で力を行使できるようになりつつある」

「どうすればいい？」

「連中はあなた達の恐怖を吸ってるんだよ。前と同じこと。怖がらないで。自分を信じて。あいつらは見せかけだけの無力な存在なんだから」

辰巳はそれ以上のことは言わなかった。香澄は自分の席に戻る。

とはいえ、見える相手を存在しないように思うのは香澄には難しいことに思えた。遙と由麻と貴春が化け物たちを追い払ったということも聞いた。しかし香澄には連中相手に恐怖を無くすなんてできそうもない。ホラー映画から抜け出したようなあの化け物共はこちらがどうすれば怖がるのかを熟知しているような気がする。廊下で化け物に襲われたら自分は貴春たちのように振舞えるだろうか。

「どうしたんだよ？」

繁が隣にいた。繁は落ち込んでいない。いつもの繁のままだった。一体この人はどうしてこんなに朗らかな様子でいられるのだろうか。

香澄にはわからない。繁はまるで怪物たちとの事柄は自分とは無関係だといわんばかりの笑顔で香澄の髪を優しく撫でた。周りの目が恥ずかしく、その手を振り払う。

「繁は何があっても香澄を守ってくれる？」

「勿論だよマイエンジェル」

呆れ顔になる。臆面もなくそんな恥ずかしいような痛々しいような台詞を言える繁にどう対応していいのかわからない。

「そういうのやめてよ、恥ずかしい」

「俺のことはダーリンって呼ぶんじゃないのか？」

「だから、学校じゃだめだって」

「ちえ、わかったよ 化け物たちのことで悩んでいるんだろう？」

大丈夫。俺がついてる。絶対に俺が守るよ」

「本当？」

香澄は繁の手を握った。

「本当だって。一人じゃ不安なんだろう？ 辰巳のいうことが実践できなにかもって悩んでる。これからは廊下を歩くときは俺と一緒にだぜ、ハニー」

「ありがとう……ダーリン」香澄は小声で言った。

響は一人廊下にいた。そして彼はどうして自分はこんなところにいるんだろうと自問自答した。答えは出てこなかった。何かに苛立つて教室を出たはいいが、生徒もいない廊下にくるとここまで来てしまったことを後悔した。戻ろうと思ったが、臆病風に吹かれたから戻るようで気に入らない。しかし特に廊下を歩く理由は無い。廊下の奥の間に畏怖を覚える。

自販機で缶コーヒを飲もう。響はふらりと階段を下りた。歩くたびに由麻の顔が頭にちらつく。昨日は由麻に酷いことを言ってしまったかもしれない。由麻は自分のことを嫌っただろうか。嫌いになったのは間違いない。由麻とはもう遊べないかもしれない。由麻も遙も、響を軽蔑しているだろう。

壁を思い切り蹴飛ばしてやりたい。どうしようもないほどの無力感。自分が、自分でなくなってしまったかのよう。

遠藤辰巳がなぜか目の前にいるが、彼女は幻覚だろうか。その顔はこちらを哀れんでいるかのようで、響は再び苛立った。

「何だよ？」幻覚ではないようなので、響は声を荒げた。相手は女だが、手を上げてやりたい気分になる。自分の前からいなくなってくれるのなら、手を上げて構わない。そんな気分だった。

「もう一度、忠告しておこうと思って」「何を」

「今のままじゃ絶対にあいつらに勝てない。響君はあいつらに蝕まれている。学校を去るか、しばらくこないか、或いは由麻たちを見習って、今の状態を乗り越えることしかない。今のままだと間違いない死ぬよ」

響は舌打ちし、教室の扉を蹴飛ばした。

「わけのわからないことばかりというのはやめにしてくれないか？俺はそういうの、興味ないんで」

「遊びで言ってるわけじゃないんだよ。わかってるだろうけど」
「いや、わからない。俺や俺の友達を変なことにつき合わせないでくれ」

二人の目が合い、場に不穏な空気が立ち込めた。辰巳の目は響が気圧されるほどに鋭くなり、響は目をそらした。

「響君……何を言っても無駄かもしれない。だけど聞いて。あなたが友人を大切だと思うのなら、今の忠告をしつかりと聞き入れて欲しい。そうじゃないと、あなたただけではなく、周りの大切な友人も一緒に死ぬことになる」

辰巳は響の脇をすり抜けていく。響はその背中に一声何か罵声を浴びせてやりたい衝動に駆られたが、特に何も思いつかなかった。

一人になった。誰もいない。静寂の中にあるのは一人の自由ではなく、孤独と閉塞感だけだ。

この世に化け物なんていないはずだ。バスケットボールに女たち、歌って笑いあう仲間たち。明るい未来。それが全てのはずだ。この世に化け物なんていないはずだったのに。

缶コーヒーを買う気分ではなくなった。教室に戻ることにする。

教室には由麻がいるが、それでも構わない。ここにいるよりはいい。かすかに、笑い声がきこえたので響は立ち止まった。

けらけらという笑い声は脳に直接響いている気がした。響は周囲を見回した。誰もいないのはわかっている。響は薄々、わかっていった。

笑い声の主が現れた。長い長い髪を廊下の向こうまで垂らした立派な着物姿の女。お笑い芸人のように太い眉毛に、眼球のない眼窩。眼窩からは絶えず血を流していて、涙を流しているように見える。怪物はいる。目の前に。怪物は血の涙を流しながらも、けらけらと笑い声を上げ続け、響をさらに混乱させた。

パニックに陥った響は絶叫するが、誰もその叫びに求めるものはいなかった。辰巳はいないのだろうか。彼女ならついさっきまでここにいたのだ。この叫び声を聞きつけて駆けつけてくれるはずだ。

女に助けられるのか？ 情けない。そもそもなんで助けを求める？ 何もいないのに。

響は目を閉じた。何もいない。何もいるはずがない。けらけらと笑い声。

「何もいないんだ！」響は顔を真っ赤にし、絶叫した。

女が長い髪を浮かした。髪は蛇行しながら響のほうまで伸びてきて、響の体に巻きついた。髪は驚くほどの力で響の体を締め付け、そして首を絞めていった。

凄まじい痛みと恐怖に響は再び絶叫した。その絶叫に答えるものはない。

笑い声は激しくなり、狂気が混じっていた。狂った笑い声と絶叫が廊下中に鳴り響くが、その声に駆けつけるものはいなかった。

投げられたナイフが女の胸に刺さり、女は笑いながら消えていった。

髪から解放された響はその場に倒れた。口から少し泡が出ている。遠藤辰巳は彼の容態を確認すると、すぐに保健室へと急いだ。

響は気絶したまま保健室に運ばれた。救急車を呼ぶべきかという騒ぎになったが、響がすぐに意識を取り戻し、軽い貧血だから、寝ていれば治るといったのでそのまま保健室のベッドで安静にすることとなった。

由麻は響の下を訪れたが、具合が悪いと響から拒絶された。教室で由麻は辰巳に詳しく聞くことにした。

「ねえ、響大丈夫なの？」

「大丈夫だつて。ちよつといじめられたただだから」

「響はこんな目にあつてもまだ信じないのかな」

由麻の暗い顔を見て、辰巳は彼女の背中をそつとさすつてやる。

「適応力が無い人っているんだよね。だけど彼もいつまでも目を逸らすことはできないよ。今彼は心の中の壁と戦っているんだよ。それは分厚い壁なんだと思う。でもその壁さえ乗り越えれば……」

「響がさ、こんなになるなんて、思わなかったんだ。由麻も遙も響

の性格は知つてたつもりだったけど、人間てわからないもんだね」

「人を知るには長く、深く付き合わないといけないんだろうね」

「例えば辰巳なんて　由麻は辰巳のことをほとんど知らない。何でそんなに色々知ってるのかも。辰巳つて何者なの？」

「こんな質問は予想通りのものとはいえ、今こうして質問されるとは思わなかった。辰巳は逡巡し、結局はぐらかすことにした。

「学校に必ずいるオカルトマニアの一人だよ」

「いえないんだね」

「ごめんね。本当はこんなことを知つてるということを知られたいなかった。だけど、事態が事態だから。学校つてところは違う世界の存在を招きやすい。馬鹿な生徒たちが多いのが原因なんだけど」

「それつて私達みたいなの？」

「そう。よせばいいのに危険なことばかりやって、結局こんな羽目

に陥る。自業自得といってもいいよ」

「ひどいね……あたしたちなんて鏡の前に立ったただけだっていうのに」

「ひどい話だとは思うよ。世の中には危険な場所で溢れてるの。その場所を歩いているだけで呪われてしまふとかね」

「あたし、あいつらをやつつきたいの」

辰巳は由麻の言葉に頷くが、その顔は険しいものだった。

「あいつらを殺すことはできない。だけど前もいったように、あいつらを虫けらのように扱えば、こちらの世界ではあいつらの力は弱まり、この世界にとどまる力すらなくしてしまう。そうすればあいつらは鏡の世界に戻らざるを得なくなる。消滅させることはできないけど、それだけでも十分勝利だと思う」

「恐怖をなくさせてことだね。でも、完全には無理だと思う 考えたんだけど、こつちも向こうの恐怖に負けないような、何かがあれば恐怖を感じなくなるかもしれない。何か、武器のようなものが辰巳は何か思いをめぐらすような間をおいた後、ため息をついた。そのため息が何を意味するのか、由麻にはわからなかったが、辰巳がまだまだ何かを隠している、ということを感じられた。

「わかった。不本意だけど、それが由麻たちの助けになるといふのなら 手配してみる」

「どこから？」

「それは言えない。ごめんね」

響は保健室の天井を眺めていた。体はほとんど快復したが、このまま授業をさぼってこのまま一日中寝そべっているというのもたまにはいい。響を慕う女子が彼の様子を見にくるが、響は調子が悪い振りをして適当にあしらった。静かなほうが心地がよかった。

授業中はさすがに誰もこず、穏やかな時間が流れている。

全身を、首を絞められたショックは忘れられない。響は殺されそうになったのだ。辰巳がこなかったら、あのまま意識は戻らなかつたかもしれない。

怪物は間違いなく存在する。それを認めざるを得ないことに響はためらうが、もう認めてしまっほかないだろう。あの化け物たちは確実にいる。いて、俺を殺そうとする。

ならば、どうする。考えることではないのかもしれない。遠藤辰巳の言っていたことを実践するか、それか学校にこないかの二つしかないのだから。

転校という選択肢はありえない。簡単そうに見えて、こんな難しい問題もないからだ。それに、響自身転校をする気などさらさらなかった。由麻や貴春、バスケット仲間を捨ててなんて、ありえない。

由麻か。すぐに由麻の顔が出てきた。

響は薄々と、自分の想いに気づいた。

扉がそつと開かれ、女性徒が入ってきた。おとなしそうな女性徒は響を見かけるとゆっくりとこちらにやってきた。

響は女生徒の接近に戸惑いつつも壁にかかる時計を見る。まだ授業の時間だ。誰だろう。見かけない顔だが、響が目的なのだろう。微笑を浮かべてこちらにやってくるのだから。

やれやれ。俺も人気者だな。響は上半身を起こした。

「響先輩　あたし、一年の森洋子って言います。体の調子はどうですか？」

「うん、だいぶよくなってきた」響は女性徒の問いに優しい声で答えた。授業中にも関わらずやってきた相手を無碍にはできないという気持ちで。

「あたし、バスケやってる先輩のファンなんです。寝ているときにごめんなさい。どうしてもてもたつてもいられなくて」

「いいよ、ありがとう。授業はいいの？」

「自習だからいいんです」彼女は可愛らしい微笑を浮かべた。

可愛い子だなと響は思う。派手さはないが、清纯で、天然な可愛さがある。スタイルもいい。さぞや男子にはもてるだろう。

しかし、沢登響は思う。こんな可愛い後輩がいるなんて知らなかったとは、なんと迂闊なんだろう。まるで小鳥のような彼女は、響のファンで、自習とはいえ授業中に抜け出してこんなところまでやってくるなんて。

「響先輩、あたし、響先輩のこと大好きなんです」

近づく彼女はさういうと響を抱きしめた。

柔らかい体。いい匂い。頬に感じる柔らかい髪の毛の感触。全てが心地よかった。

だが響は女子に対して耐性があるためか、ちょっと変だなと思った。こんないきなり抱きついてるだろうか？ いくらなんでも漫画的すぎる。

響は抱きつく彼女を離れた。彼女は泣きそうな顔をしている。拒絶されたと思ったのだろうか。

「ごめん。突然だったから」

「すいません、迷惑ですよ」

何と返せばいいのか、響は戸惑った。しおらしい森洋子という女性徒は実に可愛らしいが、どこか嘘臭い。彼女自身の嘘臭さというか、展開が突然すぎるのが響には引かかっていた。

「俺のことはバスケで知ったんだよね？」

「そうです。響先輩、とつてもかっこよかったです。華麗っていうか、なんか、見てるだけで胸がときめくんです。好きなんです。愛して

るんです」

彼女はシーツをめくり、そしてそのままシーツの中に入った。

「おいおい」

響はどう対応しているのかわからない。男の理想を描いたようなシチュエーションは、アダルトビデオのようで響の性欲を漲らせたが、それと同時に強い警戒心を抱かせた。

「先輩、好き」

キス。それは相手を強く求めるもので、激しく、官能的で、扇情的なものだった。舌と舌の絡み合いは長く続いた。その時点で響は思考を飛ばして煩惱に支配されていたが、彼女が強く抱きしめると、その力強さに再び冷静さを取り戻した。

響は先ほどよりも強く、抱きしめる彼女の体を離した。肉弾的な彼女の体が離れることに本能は悲しみを覚えていた。が、響は彼女のことをますます怪しんだ。

「君、いきなりおかしいよ、いつもそうなの？」

「そんな、酷いです！ あたし、他の誰ともこんなことしたことないのに」

「あっそう。でも俺のことが好きなら俺が調子悪いときにこうやって迫るのはどうかと思うけどな。自分の欲だけ優先してさ」

森洋子はうなだれた。

「そうですね……ごめんなさい。でも、先輩のことが大好きだから、ついやってしまったんです」

「君の気持ちにこたえることはできないよ」

響はそういつた自分自身に戸惑った。おいおい、こんな可愛い子がこんなに情熱的に迫ってきているってのに、手放すのかよ？ でも彼女は怪しい。胡散臭い。何だか知らないけど、直感がそういつている。

「もう授業に戻ったほうがいい。俺はもう少し寝たいから。悪いね」

「そうですね……わかりました。あたし、先輩のことが大好きなのに 殺したいくらいに！」

その顔が急に变化したのは驚くべきものだったし事実響は驚愕したが、全く予想外なことでもなかった。だからなのか、響はすぐに起き上がり、彼女の変貌した手　鋭い爪の一撃を避けることができた。ベッドは破れ、綿が舞った。

やれやれ。響は焦る状況の中、思った。ベッドが駄目になったのをどう先生に説明すればいいだろう。

森洋子は変貌していた。彼女は　人形だった。マネキンのような人形。人形の体に鋭い爪を持つ、ブレザーを着た異形のな存在。怪物は口を開くことはできないようだが、それでも口から笑い声を出すことができた。

まず響は保健室から出ることにした。相手の長い爪を見る限り、脇をすり抜けるのはためらわれる。失敗したら一撃で仕留められてしまいそうだ。

なので、奥に逃げた。そして障害になっている棚の上に飛び立って乗り越え、素早く保健室の扉を開けて逃げ出した。

廊下を走る。おそらく追ってくるだろう。しかしそこで響は由麻たちのことに思いを巡らせた。彼女達はあれらを一度追い返している。あの気弱は遙が、だ。ならば、自分もそれを実戦しない手はないのでは。そうしないと、あいつらに情けない奴だと思われるだろう。

情けないなんて思われるのは嫌だ。由麻に嫌われるのは絶対に御免だ。

振り返る。般若女は響を追ってきていたが、響が逃げないのが意外だったのか、どこか戸惑いの様子が見られた。

「お前は存在しない」

何々と相手は笑う。その笑い声に響は怯んだ。自分の言葉など、思いなど、結局連中にとっては何の障壁にはならないのではないか。「お前は存在しない！」響は先ほどよりも力を込めて叫んだ。

怪物は立ち止まり、どこか思案する様子で無言のまま、響と対峙する。

「元の場所に戻れ」

「お前を連れて戻るさ！」人形の声は機械音声のようだった。

人形が突撃してくる。手が爪からドリル状に変貌した。自在に腕を変えることができるのか、響はその一瞬の変化に驚きつつも相手の攻撃を回避した。間髪いれずに次の攻撃がくる。響はそれも回避した。

くそつ、同じ日に二回も殺されそうになるとは。

運動神経はいいほうだが、格闘訓練なんてしていない。怪物の容赦のない鋭い突きをいつまでも回避することはできないだろう。

恐怖を無くせ。そう心に銘じるが、簡単にはいかない。対峙する相手は明らかに現実味を持って存在している。幻なんかじゃない。リアリティを見せ付けるのが連中の狙いだとしたら成功しすぎている。

状況は最悪。逃げたくないが、これは条件が悪すぎる賭けのようなものだ。

人形がさらに攻撃をしてこようとしたとき、不意に動きを止めた。響はどうしたのかと振り返る。

遠藤辰巳がいた。彼女は手にナイフを握っている。

「またね、響先輩」人形は先ほどの少女の顔になっていた。彼女はきびすを返すと、走り出した。そして闇の中に消えた。

「随分元気なんだね。そんなに怪物と遊ぶのが好きなの？」

遠藤辰巳。響は理解する。今日は二度も辰巳に救われたということ。

「そろそろ素直になれば？ こつちも不本意ながら何度か助けてるんだからね。響君がそんなんだから、怪物たちは君が一番力もだと思っただけで襲ってくるんだよ」

響は辰巳に近づいた。

二人の目が合う。

「何？」

「力を貸してくれないか」

由麻の希望したものは、次の日に各自に手渡された。誰もいない特別教室に由麻たちは集まっていた。辰巳が持ってきたのは小さな香水の壺だった。

「香水の匂いが奴等の弱点なのか？」貴春が胡散臭げに壺を見ていった。壺の中には青い色の液体が入っている。壺自体が小さいので大した量じゃない。

「それに入っているのは香水じゃないけどね」

「何なの？」由麻が聞く。

「聖水みたいなもんだね。あいつらにとっては硫酸のような効果のあるもの。連中を怯ますことができる。量が多ければ十分消滅させることも可能だけど、これは貴重なものだから」

由麻はどこか頼りのないものだなあと思いつつ壺をポシエットにしまった。

「それからこれね」辰巳は次に紫色のお守りのような袋を取り出した。

「これは連中に対して効果的な妖魔退散の護符が入っているお守りね。奴等の力が弱まるような力が込められているから、持っているだけで効果があるし、連中に直接叩きつけても効果があるの」

全員にそれを配る。

「で、最後にこれね」辰巳は小さなナイフを見せた。

「これはどう見てもナイフだな。銃刀法違反になっちまうぜ」繁がにやりとした。

「ばれなきゃ大丈夫。教師に見つかって怒られるのと怪物に殺されるのじゃどっちがましなの？」

「すいません」繁は謝った。

「これは直接刺し殺せってことなのか？」貴春が聞いた。

ナイフは鋭利で、刃は光に反射して輝いている。一見、一番頼も

しそうな武器に見えるが、果たして怪物たちに直接的な攻撃が効くのか、由麻には疑問だった。

「接近戦で使うにはちよつと不十分な武器だね。これは投げて使うの。あいつらを殺すのは難しいけど、これがあれば連中に傷を負わせることができる。銀のナイフというのは連中には脅威なんだ」

「あいつらを傷つけることなんてできるの？」遙が尋ねる。

「勿論。こちらに傷を負わせることができるのなら、こっちだってできるのは道理でしょ。ただあいつらは人間が普通にやって勝ち目のある相手じゃないってだけ。たとえ銃で撃つてもすぐに再生してしまうような化け物の集まり。だけどこのナイフなら連中には酷い傷を与えるし、再生に時間もかかる」

「何で？」と香澄。

「特別なナイフだから」

「ふうん」香澄はそれ以上聞くことをしなかった。

それで全部だった。果たしてこんなものがどう役にたつというのか、と思うものもいたし、全てが貴重な宝でもあるかのように眺める者もいた。

由麻はナイフもポシェットに入れた。誰かがこれをあけたとき、どう思うだろうか。香水はいい。お守りは少しダサイが、なんとかなる。だがナイフは……爪とぎ用のものだといっても信じてはくれないだろう。

由麻としてはまだまだ不満だった。貰ったものは確かに役立ちそうなものだが、これだけでは怪物たちを倒すことはできない。もっと決定的なもの。連中を消滅できるような強力なものを期待していたのだが。

「ドラえもののポケットを期待しちゃいけないよね」

「え？」遙が由麻のつぶやきに応じた。

「なんでもない」

二人は特別教師から自分たちの教室に戻った。途中で包帯男に遭遇した。

「遙」

「うん」

二人は香水の壘を取り出す。お守りは持っているだけで役にたつというのなら、そのまま効果が発揮されているのだろうか。

包帯男は間合いをつめてきた。暑苦しいコートの中には隆々とした筋肉の塊がある。

由麻は壘の蓋を取り、特殊な水を包帯男の顔に噴霧した。無口な男はくぐもった悲鳴を上げて後退した。

効いた！ 由麻と遙は興奮した。

包帯男の包帯が取れて、露出された彼の顔が醜くた溶けていた。予想以上の効果に二人は戸惑う。

遙は包帯男が反撃に転じる隙を与えなかった。由麻のように素早く顔に聖水を噴霧し、包帯男の顔をさらに醜いものにした。悲鳴は絶叫に変わり、包帯男はその場に無様に転がり、ひっくり返った虫のように手足をばたつかせ、それから起き上がると悲鳴を上げながら去っていった。

「あの傷も回復しちゃうのかな」遙が残念そうに言った。

「とりあえず大勝利だよ」由麻が言う。

二人は手を叩き合った。

香澄と繁は吸血鬼に襲われた。が、彼らも聖水を駆使してなんとか撃退することに成功した。繁はナイフを使ってみたが、狙いが悪く、壁に当たって落ちた。

「練習が必要のようだ」

貴春は一人で白衣の女の姿の怪物を撃退した。聖水を顔に吹きかけると、相手は貴春が飛び上がりながらの絶叫で逃げていった。

「いいものくれたな」貴春は壘を振ってにやりとした

四十四

彼らは劣勢から転じて、いまや有利な立場にいると思っている。しかしそれがまやかしかであるということを知らない。確かに捕食者としての立場から向上はしているのは間違いない、怪物たちにとって彼らは厄介な相手になりつつあった。それはそうだ。しかし、統率者は何も焦っていないかった。彼は怪物たちのマスターであり、別世界の中でも実力者であり、数少ない権利者の一人でもあった。彼の狙いは六人の生徒ではない。学校全体の生徒達の精気である。彼の力はまだまだこちらの世界で自由に干渉できるほどには至らないし、六人の精気を吸いつくしても学校全体を支配する程度には至らない。だが足がかりにはなる。最終的には学校全体を支配する力を得れる。そうすれば、彼と彼の可愛い下僕たちは当然、いや思っている以上に長い間、安寧の時を過ごすことができるかもしれない。甘い蜜を何十年と吸うことができるかもしれないのだ。次元世界の暗い世界では、殺戮のみが横行している。あの世界は病んでいるし、監獄のように閉塞感のある場所だ。

このままでは終われなかった。長きに渡って元の世界で辛酸を舐めてきたのだ。たかが数人の若い人間風情に邪魔をされただけで学校を支配する夢を潰すわけにはいかない。潰すなら、あの六人のほうだ。それに能力者もいるが、あれも殺してしまわなければいけない。

遊びの時間は終わりだ。彼等を恐怖に満ち溢れさせ、こちらの力にする。そして、この学校という餌の集まりを支配する　統率者はほくそ笑んだ。

遠藤辰巳は佐伯由麻がまた不満を漏らすのではないかと思っていた。彼女達にあげた聖水などは十分効果的なものだが、所詮は撃退用。相手を殺すに至るほどの殺傷力を持っているわけではない。佐伯由麻はあいつ等を消滅させたいのだ。それは辰巳とて同じ気持ちだった。彼らは消滅させない限り、何度でも襲ってくるだろう。

だが一匹一匹を相手にするより、奴等のトップさえ崩せば、後は勝手に自滅するだろうと辰巳は考えていた。連中は狡猾でタフだし、何よりもまだまだ手の内を明かしていない。

今まで出てきた者はすべて誰かに統率されている。その統率している者は、どこか暗がりの影の中にいる。この学校のどこかで隠れている。そしてゆっくり自分たちの力が膨れるのを待ちわびているのだろう。

束ねている存在を見つけるのは至難の業かもしれない。辰巳は彼等幻魔の力を感じることができが、特定の力を感じるといのは難しい。そういった力を持つ とある組織の中では、彼女はまだまだ半人前だし、そもそも彼女はあまり危険なことをしないようにと釘を打たれている。だから彼女は表立って行動するのを禁止されているのだが、目の前で自分の学年の生徒たちが死に掛けているのをそのまま見過ごすことはできなかった。彼女は情に負けた。そして連中から目をつけられた。非常に危険な立場にあるのだが、彼女はいいチャンスとも思っている。どのみち能力を活かし、最終的に組織の幹部にまで上り詰めるのが最終目標である。こんなところで怪物に殺されるようなら、それはそれでそれまでの人間だったという事。

だが、無謀に挑んだあげく犬死をするようなのは御免だ。やるかには勝たなければ。必要とあれば、応援を寄越してもらおう必要もあるかもしれない。

だがあの組織がこんな学校一つに積極的になるとも思えないのが問題だ。

とにかく、由麻たちには新たな武器が必要になる。素人の彼等でも敵を討ち滅ぼすことのできるお手軽で強力なアイテム。それを確保することは難しいかもしれないが、その見返りがあるのなら組織はきつと動いてくれるはずだ。

まずは泣きついてみよう。

四十六

響と貴春。二人が廊下で対面した。

「よお」貴春はぎこちない様子で声を掛けた。引つかかるものはあるが、響は親友であり、自分にとって身近な存在だ。たとえ今、お互いが前みたいな親しげな関係になれないとしても、邪険にはできない。

「ああ」響はそれだけ言う通り過ぎていく。

貴春はため息をついた。由麻たちも悲しいだろうが、貴春も辛かった。親友がこうも態度を豹変して冷たくなってしまつとは。

一人、廊下を歩く。別に寂しさも感じていないし、恐怖を抱いているわけではない。目的があるから歩いているのだ。ワイシャツのポケットには護符と聖水が入っているし、裏ポケットにはナイフを忍ばせている。

由麻たちから話を聞いているから、聖水が効力があるのはわかっている。ならば、試してみる手はない。

辺りに人はいない。突然辺りに人がいなくなったということを感じ、巴に言ったことがある。

「連中の力の一つなの。誰もいない空間を作る。そこは学校だけど学校ではない。空間が歪んだ場所。鏡の世界と現実との境目のような場所かな。あまり長い間その空間を維持できるはずはないから、連中は短期的に勝負を決めてくるはず。その場合は追いかけて連中を撒いて時間まで逃げ切ってもいいね。或いは、直接相手を殺すか、能力を維持できなくなるまで痛めつけるか」

「なるほど。じゃあ辺りに人がいるからといって、絶対安全ではないわけだ」

「もう証明されてるでしょ？ そんなに甘くはない。その空間で連中を撒いたのだから、向こうが余裕だったからだと思うよ」

幻魔という存在が現実にいるということは未だに認めがたいものではある。響の気持ちもわからなくない。

空間が変わった。貴春にはもう、すぐにわかる。

だが彼にとつて予想外なことに怪物は姿を現す前に貴春を捕らえた。

何が起こったのかわからない。気がつくとも天井に顔が近く、息が苦しい。

手だ。冷たい二つの手が自分の首を絞めている。足は地面をついていない。持ち上げられ、絞殺されそうになっているのがわかった。

とにかく、締め上げる手を引き離そうとする。が、相手の力は強く、引き離せそうも無かった。相手の手に爪を立てても離さない。

貴春はワイシャツのポケットに入れていた聖水を思い出した。早速取り出し、首元に吹きかけてみた。

悲鳴が上がリ、貴春は床に落ちた。足から着地できたが、首の苦しさに態勢を立て直すことができず、転んでしまう。それから、慌てて立ち直る。聖水はどこだろうか？ どこかに落としてしまった。すぐに見つかる。貴春はそれを拾い上げ、敵がどこにいるのか探した。相手は天井に張り付いているかに見えるが、どうやって天井に張り付いていられるのか、貴春には不思議だった。手に吸盤のようなものがついているのか、四足の見たところ人間のようにも見えるそれは、手足が長く、痩せていた。全身が赤いのはそういう風に見えるだけなのか、真っ赤な血なのか、貴春にはわからない。

怪人は真っ直ぐ貴春を見ている。逆向きの顔は醜く、大きな丸い目に大きな口が特徴的だった。

新しい怪物の出現に貴春は驚きながらも、怪物の両手が醜くただれているのを見て冷静さを取り戻した。香水の壇から吹き出た液体は間違いない怪物に効果のあるものらしい。

怪人は貴春を睨み付けてながら、出方を伺っているようだった。

貴春は心に念じた　こいつは単なる幻だ。絶対に自分を傷つけることはできない。そして、自分はこのいつに傷を負わせることができる。俺は絶対にこいつを倒すことができる。

心の中で奮い立つ思いは衝撃波のように相手に届いたように貴春は感じた。お互いけん制しあっている。どちらかが折れたほうが負けだ。

怪物が飛び掛ってきた。貴春は勢いよく怪物に聖水を噴射した。怪物が悲鳴を上げて床を転がりまわる。聖水はまだまだたっぷりあるが、貴春はそれをしまい、護符を取り出した。そして転げまわる醜い怪物の体に護符を当てた。

轟くような悲鳴と共に怪物は床を這いずりながら、ゴキブリのようなきで逃げていった。スピードがあり、貴春が追いつける速さではなかった。

貴春は護符をまじまじと見た。随分いいのをくれたな、辰巳のやつ。

護符をしまう。

妙だなと思う。敵は逃げた。しかし、まだ何か気配を感じる。

振り返る。

可愛い女性徒がいた。

「はじめまして貴春先輩。森洋子っていいいます。あたし、貴春先輩が好きなんです」

そんな台詞にあっけにとられることはなかった。貴春はすでに相手を敵だと思って行動した。聖水を彼女に吹き掛けたのだ。普通の生徒なら嫌がり、匂いはずっと残るだけだ。そのときは謝ろう。

絶叫。

貴春はにやりとした。やっぱりな。貴春は苦々しい笑みを浮かべた。連戦になるとは。

女性徒の整った顔は醜くただれた。しかし彼女は笑い出した。そして彼女の顔はマネキンのように変貌し、その手の先端が斧と化した。

「何でもありだな」貴春は響と同じ感想を漏らした。

「あんた達はどうせ死ぬのに」機械音がする。「どうして逆らうの？」

「死ぬのはお前等だよ！」

マネキン人形は斧を振るってくる。見かけとは違って素早い動きに貴春は回避が遅れた。ざっくりと、腕に一撃をもらう。

だが貴春の腕には何の傷もなかった。

貴春はにやりとする。念じた効果だ。あの斧はただの幻に過ぎない。

「幻に俺は殺せない」

マネキン人形は怒りの声を出し、再び斧を振るってくる。だが、斧は彼に当たることすらしなかった。貴春の体を突き抜けた。

人形はよろめき、そして逃げ出した。いつものことだが、どういう仕掛けか、途中で怪物は途中で姿を完全に消してしまふ。

やった！ 貴春はガッツポーズをした。もう大丈夫だ。恐怖は克服した。連中は絶対に俺を傷つけることはできないぞ。そうだ、この心と、聖水と護符さえあれば、この学校の魔物なんて一掃できる。簡単じゃないか。

ひんやりした空間が戻らない。貴春は不思議に思う。妙だな。いつもなら幻魔が消えれば場の空気も元に戻るのに。冷気は、ますます強まっていくように思えた。

まさか……貴春は振り返る。誰もいない。だが様子がおかしい。何かまだいる雰囲気だ。だが、何がきたって、この湯原貴春は負けやしない。

貴春は背後に気配を感じた。すぐに振り向く。

怪物がいた。両手が長く、翼を生やし、無数の牙と爬虫類じみた目をした化け物。だらりと垂れた舌はカメレオンのように長かった。貴春はその姿に一瞬脅えたが、すぐに心を落ち着かせ、聖水を吹きかけようとした。

が、長い舌が貴春の動きよりも早く伸び、貴春の腕を取らえ、そ

のまま貴春ごと床にたたきつけた。

壇が手から落ちる。貴春は慌てて壇を拾おうとするが、怪物はそれを蹴り上げてしまう。壇は貴春の遙か背後にまで行ってしまった。なら護符だ。貴春は護符で対抗しようとしたが、その前に怪物の伸びる舌に全身を掴まり、再び床に叩きつけられた。衝撃は強く、貴春は気を失うかと思った。

怪物が近づいてくる。

「お前は存在しない」弱々しい声で貴春は言う。そうだ、こいつは幻だ。存在しないのだ。

怪物に蹴飛ばされ、貴春は腹を擦った。熱さで苦悶の声を上げた。怪物はなおも近づいてくる。あいつは存在しない。貴春はなおも思う。しかし、再び怪物に蹴飛ばされた。

どうということだろう？ 貴春はなんとか立ち上がった。あいつは存在しないはずなのに。辰巳の言っていたことは嘘なのだろうか？ しかし、ついさつき人形の斧は貴春の体をすり抜けた。今までのことは嘘なんかではない。

じゃあこの化け物は何なんだ？ 今までの、どこか人間をモチーフにした怪物とは違い、いかにも怪物的な怪物だが……。

恐ろしい。この怪物はこちらの全てを凌駕している。こいつには適わない。

怪物は近づいてくる。人より畜生に似た顔は愉悦を浮かべているように見えた。

聖水を取りにいきたいが、その隙があるかどうか。幻魔の動きは貴春を遙かに越えている。

ならば 貴春は護符を取り出して、水戸黄門の紋所のように怪物に向けた。貴春にとってはそれが最後の希望であり、尻ポケットに忍ばせたナイフなどは頭に入っていなかった。おそらく通用しない。それがわかる。

怪物はにやけた笑みを変えず、躊躇せずに間を詰めてくる。

貴春は冷や汗を感じながら後ろに後ろに下がり、とうとう彼はだ

らりと手を下ろし、護符を廊下に捨てた。

勝てない。貴春はそれを理解した。こいつは違いすぎる。

怪物は大きく咆哮した。全てを吹き飛ばすほどの轟きに、貴春は己の無力を痛感し、体はまるで自ら餌食になるかのように気力を失い、全身の力を抜かした彼は床に肘をつき、放心状態に陥った。

死ぬだろうな。だが、こいつが相手なら仕方ない。結局、人間はこういった悪魔的な存在には適わないようにできているのだ。

貴春はそっと目を閉じた。視界は黒一色になった。間もなく白一色に変わるだろう。

怪物が叫び声を上げた。それは悲鳴にも聞こえた。貴春は目を開けた。辰巳が助けにきてくれただろうか。しかし、体が上手く動かず、首を動かせないで誰がきたのかわからない。

「大丈夫かよ！」

男の声だ。ぼんやりと、響の声のような気がした。けどどはつきりしない……今にも気絶しそうなほど意識がなくなってきた。

手が差し出された。視界は暗く、誰の顔なのか視認できない。

「随分やられたな。大丈夫か？」

貴春はその手をとった。力強い手だ。誰の手なのか、なんとなくわかった。貴春は微笑み、それから沈んだ。

四十七

貴春が保健室のベッドで起きると辰巳がいた。

「俺、大丈夫だった？」

辰巳は首を振る。「その傷じゃ学校はしばらく休んだほうがいいよ」

彼女の目は曇っている。自分のことを心配してくれているのだろうか。それとも戦力にならない役立たずだと思って失望したのか。

「ごめんね、もっと早く助けに行ければ」

「響が助けにきてくれたんだろ？」

「響君が？ わからない。駆けつけたときには貴春君が倒れてた」

「そっか」

あれは響じゃなかったんだろうか。でも、幻覚ではないはずだ。

「おい辰巳、この護符全然効かねえじゃん。最初戦ったやつにはすげえ効き目だったんだぜ？」

辰巳は少し困った顔をした。「そういう相手もいるってことだよ。雑魚ばかりじゃないんだから。今戦った相手は相当性質の悪い部類だね。普通の人間が一对一で勝てる相手じゃない。でもあんなのが出てきたってことは貴春君が相当彼等に脅威を与えているってことの証だね」

「そんなの嬉しくな……畜生、全身がいてえ」

「病院行く？」

「平気だ。学校はちょっと休むけど、その間は辰巳、響や由麻たちをよろしく頼むよ」

「できる限りのことはするよ。ゆっくり休養して、復帰してね。一番頼れる人がずっと抜けるのは辛いから」

本当にそう思ってくれているのかはわからないが、貴春はそんな言葉を聞いただけでも嬉しかった。

貴春は辰巳の手をそっと握った。

駄目だな。こんなことはやめよう。そっと離す。

体が悲鳴を上げている。痛みは酷い。何日か寝てなければ持たないだろう。休息のときだ。

「また、な」

四十八

「……で、貴春君は大丈夫なの？」遙が由麻に聞いた。

「うん。三日ほど家で寝てるって」

由麻と遙は心配そうな顔をする。

「貴春君をそこまでする奴がいるなんて……やっぱり思うんだけど、今のままじゃあいつ等に勝てないような気がする」遙が言う。

「じゃあどうすればいいと思うの？」

「それはわからないよ……由麻はなんかいい案ない？」

由麻は思案するが、やがて首を振った。

「あたしにはわからない。やっぱりこういうのは辰巳だよ」

二人は辰巳の下に向かった。辰巳は自分の席で静かに読書をしていた。その様子は実に絵になるが、彼女の読んでいるのは耽美的な官能小説だ。二人がくると彼女は慌てる様子もなく、さりとして本の題名を二人に見せることなくしまい、二人に応じた。

「何か用？」

「もらったのよりもっとすごい武器ってないの？」

全く予想通りの質問に辰巳は思わず笑ってしまう。

「例えば？」

「やっぱり 相手がもう二度とあたし達の前に現れないくらいのかな」

「あるけど、あと一日だけ待ってくれる？ 由麻たちに使いこなせるかどうかは疑問だけど、まあ、やってくれるしかないよね。でないと連中には勝てそうもないし」

「そうだけ。精神論なんかうんざりだ。俺は戦ってあいつらに勝ちたい」

繁が入ってきた。

「貴春の借りを返すんだ。あいつらは絶対俺らで全滅させてやりた
い」

繁の目は戦う男の目で、いつものようなおちやらかな霧囲気はみじんもなかった。由麻と遙はそんな繁に男らしさを感じ、少しだけ繁のことをかっこいいと思った。辰巳は繁の眼差しに期待感を持つた。貴春がいない分の戦力にはなりそうだ。後は彼等を戦いやすくしてやるのが自分の使命なのだろう。

「わかったよ。そんなにいうなら、望みどおり連中を排除できる超強力な武器を用意してあげる」

辰美は不安を覚えていた。勝てるだろうか。今のところ、勝負はわからなくなってきた。向こうは刻一刻と力を増してきている。叩くなら、早くしないといけない。連中の力が増してきて、学校全体を支配できるようになってしまえばこちらの勝ち目は薄くなる。

今はもう六人だけではなく、鏡を媒介に彼らは他の生徒たちたちからも精気を奪っている。迅速に連中を潰さないと、連中は六人以外にもその姿をさらけ出すことになる。そうなれば、学校は地獄と化す。それだけは絶対に避けたい事柄だ。連中は影として校内を徘徊し、その姿は学園の七不思議のように語られながら長く続くであろう。もしかしたらこの学校が学校として機能する限り、幻魔共の支配は続くかもしれない。

辰巳にはそれが何より気に入らない。奴等、人の精気を奪い、餌にするだけの寄生虫共は絶対に野放しにはできない。奴等は人間世界を狂わせる。

絶対に、奴等にこの校舎をうるつく権利を与えてはいけないのだ。空気が重く感じる。静寂の中で感じる忌わしいオーラ。張り詰めた空気の中に感じる悪意。

力を増しているのを連中はわからせたいのだろう。こちらが脅えるのを感じていたいのだ。

辰巳は立ち上がった。不愉快な連中の雰囲気を感じてるのは耐えられない。さっさと学校から退散することにした。

校門前に瀬奈の後姿が見える。辰巳は優しげな顔をする。きつと

自分を待っていてくれるのだろう。可愛い奴だ。丁度いい。駅
までのいい話相手になる。

後ろ姿に話しかけると、笑みをたたえた瀬奈が振り返った。

四十九

新しい武器は使われていなく、今のところ空き教室になっている場所で配布された。外は雨で薄暗かった。

それは薄い黒色のゴム製のシートだった。シートは縦横五十センチというくらいのもので、大きく星型の模様が赤く縁取られていた。一人一枚配られ、四人は手にとってまじまじと見た。

「五芒星ってやつだね」由麻は言ったが、こんなものが本当に役に立つのか疑問を持った。

「で、これどうやって使うの？」香澄が聞いた。

「簡単。怪物をこの星の上に乗せる。それだけ」辰巳がさらりと即答する。

「そんなんで本当に怪物を倒せることができるのかよ」繁が疑惑の声を上げた。

「やってみることだね。これは強力な呪術を駆使しているものなの。見た目とは裏腹に、威力は確かだよ。上手く使えば間違いなく連中を片付けられる」

「へえ、ちよつと信じられないな」繁はぺらぺらのゴムシートをひっくり返してみたりしながらそうつぶやいた。

「辰巳の持ってきたものなんだから、大丈夫だよ」遙はまるでそのシートが黄金でできているものだというようにうっとり眺めている。

「じゃあ、気をつけて使つてね。やり方は各々に任せるよ。相手を上手くこの星の上に乗せれば勝負は決まったようなものだからね。言うておくけど、もう連中はただの幻じゃないから。力を持って、実態化してきている。繁君のいうように、もう精神論だけで勝てる相手じゃない。こういう道具を駆使しないとあいつらには勝てない。コロコロ言うことが変っちゃうけど、許して。連中の力はどんどん増していて、あたしの予想を超えているから」

「辰巳のせいじゃないよ。これでも感謝してるんだから」香澄が言う。

辰巳は微妙な微笑を浮かべた。彼女の顔はどこか曇っている。まるで何かを懸念しているように見えて、由麻は彼女のその顔に何か嫌な予感を覚えた。

由麻は早速試してみたくてうずうずしていた。確かにこのゴムシートはどこか子供だましのような気もするが、描かれた五芒星は本格的なものに見えたとし、何よりも辰巳を信頼していた。聖水の力は予想以上だった。このシートはそれ以上の効果があるのだ。鞆に入れ、鞆を持ちながら廊下を歩く。

背後に足音が聞こえる。すぐ後ろだ。首だけ振り返ると遙がいた。「由麻の考えていることはわかるけど、一人じゃ危ないよ？」

「ごめん」

昼休みに行くのは特別教室のある第二棟だ。あそこはやはり人手がないので連中が襲ってきやすいだろうと踏んでのことだ。

「でも罨だとわかって挑発に乗ってくるかな？」由麻が苦笑する。

「大丈夫だよ。連中結構抜けてるし」

遙は前に鉦男を退却させてからまるで性格が変わったかのように強気になっている。由麻はそれがいいことなのかよくわからない。確かに強気な遙は頼もしいし、魅力的でもある。が、前の臆病な遙のほうがよかった、と思うときもある。今では遙のほうが自分よりも頼りになるのが、ちょっと悔しいのかもしれないし、由麻のほうの色々判断して遙を引張っていけないのが嫌だけなのかもしれない。「あたし達は羊で行けばいいんだよ。狼ぶってやってくるから」遙が言う。

第二棟はやはり人の気配がしない。昼休みにこんなところにいるのは誰もいないということがよくわかる。みんな食事をして仲間と交流するのが普通だ。こんな場所にいるのはよっぽどの変わり者だ。空気はひんやりしているが、それが幻魔の気配からくるものなの

か、よくわからない。

「どうかな、感じる?」

「わかんない。でもたぶん違う」遙が冷静に言う。

由麻にはよくわからない。空気の張り詰めた感じはするのだが、それが連中の独特の気配なのか。ただ、とにかくいつでも連中が現れてもいいように聖水の準備をしておく。狙いはこうだ。聖水で敵をうるたえさえ、その隙にこの呪術の込められているというシートを敵の近くに敷いておく。辰巳の言うとおりなら、敵が敷物の上に上手く乗ればこちらの勝ちだ。そう上手くいくだろうか。でも試してみる価値は絶対にある。

やっぱり空気が重く感じる。遙もそれに気づいているのだろう。歩くのをやめ、周囲を警戒している様子がわかる。連中が霊的なオーラを発するのならば、こちらにもそれがあるということ。今、遙が発しているのはそれに近いものかもしれない。遙の気合は高まっている。由麻もそれに応じて警戒心を強める。連中が不意打ちで襲ってくることもあるだろう。貴春はそれにやられたという。天井から襲うなんて反則だ。由麻は天井を見た。何もいないようだ……全く油断のならない場面に、二人は苛立ちのようなものを感じた。「襲ってこないね」やがて、遙が言った。「そうだね」

空気が変わっていく。連中の気配は確かに感じた。今は普通の廊下と変らない。

「嫌われちゃったかな」遙がつぶやいた。

香澄と繁は由麻たちと同じように、廊下を散策していた。由麻たちは二階にいたが、二人は三階を歩いていった。雨音はさほど激しくはないが、空は暗く、陰湿な雰囲気醸し出していた。

「駄目だな。全然出てこないよ」繁がぼやいた。

「あたし達に恐れをなしたのかな」香澄が言った。

連中に狙われると、気配を感じるのですぐにわかるが、今回はその気配が全く感じられない。せつかく二人で新しい魔物退治の道具を試してみたかったのに。

そもそも連中は普段どうやって存在を消しているのだろうか。そしてどうやってこちらに姿を現すのだろうか。そういったことを諸々、辰巳に聞いてみたが、辰巳はあまり深いことは教えてくれなかった。

辰巳が何者なのか、おそらく誰もが思っていることだろう。だが、辰巳は口を閉ざす。こうした道具を用意できるということは、単独ではないということ。どこかの、組織のようなものに属している。まるで映画のような話だが、おそらくそうなのだと言香澄は思う。彼女は普通の女子高生ではありえない。

繁が甘えるように背後から抱きついてくる。普段なら嬉しいが、学校内で、しかもこんなときにこんな行為はいただけくない。香澄は制服の中に侵入してくる繁の手をつねった。繁が離れる。

「何だよ、つれないね」

「そんなときじゃないでしょ？」

「俺達のラブラブぶりを見せれば、化け物が嫉妬して襲ってくるかもしれないだろ？ 我ながらナイスマイデア」

こいつ馬鹿じゃないのかと思ったのはこれで何度目だろう。可愛さについつい許してしまっていたが、繁は少し、緊張感というものに欠ける。いつもお調子者というスタイルを崩さない。それは長所

でもあるが、こういう場面では少しは普段とは違つ、男らしいところを見せて欲しいものだ。

繁は香澄の両肩に手をかける。そしてそつと耳に息を吹きかける。香澄はぞくつとする。こんなことをしている場合じゃないのに、感じてしまう。耳が弱いことを繁はよく知っている。

顎を掴まれ、繁の顔に向けられる。することはわかつている。香澄は目を閉じる。繁の、ねっとりした濃厚なキス。何度も何度も舌と舌を絡ませあう。香澄は周囲に目を配る。大丈夫。誰もいない。だが窓から誰かが見てるといふ可能性もある。だが今日は雨が降っているし、暗いから、わからないかもしれない。

繁の体が密着してくる。怒張した下腹部の膨らみを太ももに感じる。

香澄は官能の波に流されそうになりながらも、繁を突き放した。

「馬鹿！ これ以上こんなところにするわけないでしょ！ それに今はそんな場面じゃないの。なに考えてるの」「いいじゃない。連中、出てこないし」悪びれる様子は全くなく繁は言った。

辺りの空気が変わったのに香澄は気づいた。すぐに鞆から黒いシートを取り出す。

繁ものろのろと鞆からシートを取り出す。

香澄は周囲を探る。連中の気配は間違いなく感じる。すぐ近くにいるはずだ。いなければおかしい。絶対におかしい。

現れた。二人がいる前の化学実験室の扉が開き、髪の毛の長い和服姿の、眼窩の空つぼの女の化け物 が出現した。

唐突に扉から現れた魔物に香澄は驚いた。向こうがこちらを脅かしたいという目的なら十分すぎるほど成功している。

長い髪が繁に襲い掛かり、彼は全身を蛇のように動く黒髪に巻きつかれ、身動きがとれず、そのまま天井に頭をぶつけるまで持ち上げられ、そして叩き下ろされた。

香澄は怒りのあまり意味不明な奇声を上げ、魔物に聖水を吹き付

けた。悲鳴が上がり、魔物は化学実験室の奥まで逃げていく。

繁はゆっくりと起き上がった。無事なようで、香澄は安堵し、そのまま繁を置いて怪物を追いかけて教室に入った。

化学実験室の教室を見渡すが、化け物の姿は見えない。どこに消えたのか、彼女はきよきよと見渡し、そして奥の薬品室に逃げ込んだのだらうという結論にたどり着いた。薬品室は狭く、棚に色々な化学薬品が置かれている。そして奥には教員用の机があるだけだ。つまり、袋の鼠ということ。だが連中は姿を消してしまえることができる。早いところ捕まえないと逃がしてしまうことになりかねない。

香澄は右手に聖水、左手にシートを持ちながら薬品室に向かった。そして、何かに足を絡まれて転んだ。

迂闊だった。彼女はすぐに状況を理解した。怪物は薬品室には向かっていなかった。机の下に潜んでいたのだ。もつと正確に調べれば床に潜む怪物を発見できたはず。彼女は自分の迂闊さを呪った。足は引つ張られ、彼女の体は魔物のすぐ近くまで運ばれた。鋭い爪が彼女の肩に食い込む。香澄は悲鳴を上げそうになった。だが、右手にはまだ聖水がある。後ろに向けて聖水を吹き付ける。

悲鳴が再び上がり、怪物は起き上がって今度こそ薬品室へと逃げていった。

馬鹿な化け物めと香澄は痛みに顔を歪めながらもほくそ笑んだ。勝てたかもしれない勝負だったのに。聖水を奪えば、こちらに手段はなかった。

まんまと薬品室に逃げてくれた。転んだときに落としたシートを拾い、薬品室へ。

怖いのは怪物が棚にある薬品を使うことだ。中には硫酸のような恐ろしいものもあるかもしれない。香澄はシートを盾のように掲げて、ゆっくりゆっくりと奥へ向かった。教員用の机の下には、化け物が縮こまっていた。

複雑な気持ちになった。ざまあみろという爽快感もあるが、動物

を虐待したかのような後ろめたい気持ちも混じる。後者の気分になるのが、香澄にはたまらなく気に入らなかった。

怪物を蹴り飛ばす。怪物は反撃もせずさらに身をすくめるだけだ。

再び蹴りを入れる。怪物は反撃してこない。

香澄は苛立った。これではまるで苛めみたいだし、ここに追い詰めた意味がないではないか。

仕方が無い。香澄は聖水を怪物に吹き付けた。猛烈な悲鳴の声。

とうとう怪物は逆らわなければ殺されるという思いに至ったようだ。虐待された動物のような行動をやめ、香澄に飛び掛ってきた。

そして、彼女があらかじめ仕掛けておいたシートの上に上手い具合に乗った。

激しい光が生じた。目が眩むほどのまばゆい光は、七色に輝き、

そして、怪物の世にもおぞましい、哀れを誘うほどの悲鳴と共に消えた。眼球が焼きついてしまったのではないかと思うほど視界は何も見えなかったが、除々に戻ってきた。目が戻ると、怪物は消えていて、シートから煙が上がっていた。

倒したのだろうか。倒した？ 間違いない……倒した！

香澄はガツポーズをした。

シートを拾う。すぐに手を離す。シートは凄まじい熱を帯びている。これでは持っていくことすら適わない。少し待ったほうがいいだろう。

煙が完全に消え、香澄はシートに手をかざす。もう熱は感じない。触ると、少し暖かい程度だった。シートを鞆に入れ、教室を出る。

繁がいた。床に尻をつけて、頭を抑えている。

「大丈夫？」香澄がかがんで彼の頭を撫でる。瘤などは見えないが、大丈夫だろうか。

「保健室行こ」

「いや、大丈夫。ごめんな。香澄の言うとおりだった。次はもう少し真面目にやるよ」

「繁が無事ならそれでいいよ。一応保健室行くよ」

繁を立ち上がらせる。肩を貸そうとしたが、繁はそれを断った。

「それで？ あの化け物をやっつけたのかよ？」

「たぶんね」香澄は得意の笑みを浮かべた。

「やったな！ でも俺は何もしてないけどさ。残り何匹いるのか知

らないけど、この調子でやっつけていこうぜ」

辰巳に結果報告をする。

「やったじゃない。一匹始末した。その化け物は二度とあたしたちの前に現れることはないはずだよ」

「あんなに上手くいくとは思わなかったけどね。これ、本当凄いや」「上手く使えばいいよ」

香澄が去ると、瀬奈が辰巳に近づいた。

「何の話してたの？」

「別に……こつちの話だよ。ゲームのね」

「辰巳ってゲームやるんだ？」

「知らなかった？ あたしはゲーマーなんだよ」

「うそだあ」

「本当だって」

瀬奈は複雑な表情で辰巳を見つめ、それから「ふうん」と言っただけで離れていった。

「ごめんね。瀬奈の背中姿に辰巳は心の中で呟いた。

貴春が戦った怪物 見たわけではないが、おそらく強力な幻魔だ。たぶん、一番有能な部下を超越した。貴春の精神力を無視して接触することができるといえるのは、かなり実体化が進んでいるということだろう。これではもう駄目かもしれない。そろそろ連中は本気で、全力で由麻達を潰しにかかるだろう。そうなれば彼女たち脆弱な一般人に何ができるだろうか。

空間は作り出される。彼女たちだけを殺すための、空間が。もう時間は残り僅か。

ため息が出る。自分はどう出るべきだろう。この学校は幻魔に乗っ取られるかもしれない。呪われた学校として存続していくことになる。

自分も傍観者なんてしていられないということか。辰巳は立ち上

がった。

由麻と遙が教室に戻るとき、響とすれ違った。

「よお。怪物退治は順調かい？」響はにやりと笑みを浮かべてそう言った。

「順調だよ。へたれがないからかな」由麻は無然とそう返す。

「頑張つてな」低い声で響はそう言つと由麻たちから離れていく。

由麻の表情を見ると、遙は声を掛けづらかった。響の顔に切り傷がいくつかあつたのが気になる。この前はそんな傷跡はなかった。貴春は響が自分を助けてくれたのではないかと言っていたが、それもありえるのかもしれない。

由麻に何か言つてやりたいが、もし響が本当に貴春を助けたのなら、そのうちこちら側に加わるだろう。

「しかし結局あいつら現れなかったね」由麻が無理して笑顔を作つた。

「そうだね。あたしたちに恐れをなしたのかな」

「もうさ、このまま出てこなければいいのに」

「そうだね」本当に、そうなければいいのに。遙は微笑を浮かべた。

御守りを響は握っていた。握りしめてしていると落ち着く。響はわかっている。辰巳の言っていることには嘘がある。しかしその嘘は由麻たちにとつてはとてもいい嘘だ。おそらくその嘘のおかげで連中と対等に戦えるほどの。

しかし響は気づいてしまう。自分の勘の良さが恨めしい。気づいてしまったら、その嘘を利用することはできないのだ。

護符を握りしめる。いいさ。自分は男なんだ。貴春は酷い怪我を負った。由麻や遙は強くなるうとしていているが、やはり無理をしている。

歯がゆい。強くなりたい。精神的に、タフになりたい。だから響は一人、廊下をうろつく。たった一人で、誰の助けも借りず。

辰巳には五芒星のシートをもらっている。一応といって渡されたものだ。響はそれを鞆に忍ばせているが、効果は期待できないでいた。

しかし、全ては自分が信じることなんだ。

神という一文字の言葉を響は思い出す。今必要なのは信心なのではないだろうかと響は思う。神を、というよりも、自分自身を徹底的に信じる強さ。それは暗示なのだろうが、暗示的に自分自身を信じるというのは実に難しいものだ。難しいということとはつまり、それ自身はやって効果のあることだということだと響は判断する。

響は思う　自分は自分自身を信じてやれないほどの弱い人間なのだろうか。由麻にはへたれと言われた。本心でないだろうが、半分本気での侮辱的発言だ。由麻に言われるとかなり傷つく。

バスケットボールを頑張った。エースと呼ばれるほど上手くなった。喧嘩をしたこともある。街で絡まれ、三人相手に辛勝した。今まで生きてきて、自分を情けなく思ったこともあるが、そう思うとその情けない部分を改善しようと努力してきた。

自分は絶対に弱くない。いや、人は弱いものだが、自分の好きな女を守れないほど弱い人間ではない。いたくない。

空気が変わる。いよいよお出ましというわけだ。

羽の生えた二足歩行の怪物。ほとんど人間とそっくりだが、頭部は牛だった。手には鎌を携えている。ずいぶん大きな鎌だ。

見た目は関係ない。勿論、竦む。逃げたい。認めたくない。全てを拒絶してしまいたい。

瓶を取り出す。きつとこれも　いや、響は歯をかみしめる。目を閉じて、強く念じる。相手が視界に入らなくとも、相手は聴覚を利用してこちらを攻撃できる。鎌が振られて、自分に当たった、と思ってしまうばこちらの負けだ。

大丈夫。やれる。響は目を開け、聖水を敵に向かって吹きかけた。

半月が経過した。貴春も復帰し、時間があれば廊下を徘徊し、怪物を探した。怪物は現れなかった。

由麻はもう怪物はいなくなったのではないかと淡い期待を抱いた。遙は怪物が現れるのを逆に期待したが、廊下を由麻とろついても全く姿を現さないのに戸惑いを覚えた。全く姿を見せないのは逆に不安になる。

どういうことなのか、彼らの不安は高まる。

そして再び辰巳のもとへ集う。

「いなくなっではないよ」辰巳は困っていた。

「だけど全然出てこないぜ」貴春が言う。

「小休止ってことなのかな」香澄が言った。

「そういうことだと思う」

辰巳は曖昧にはぐらかし、席を立った。貴春と香澄は肩をすくめた。

「なんだろうね」

「わからないけど、まあ出ないなら出ないでいいよ」

香澄は貴春ほど楽観的にはなれないが、確かに出るより出ないほうがいい。元の学園生活に戻るのならそれに越したことはない。誰もいない教室や廊下にいつまでもびくびくするのはうんざりだから。

これで終幕なら、それでいい。ハッピーエンドじゃないか。

五十四(前書き)

今更だけど小分けしすぎかな

図書室の管理人、野村瞳は今日の仕事を終えたので、独り、薄暗い図書室で紅茶をすすっていた。いつもは本の虫といった生徒が数名きているのだが、今日は誰もいない。一人のとき、図書室はとも広く思える。

図書室の扉が開いたとき、ふつと嫌な予感がした。目を向けると、彼女はこれは夢に違いないと思った。

にやりと不気味な笑みを浮かべた少年の姿があった。その少年は野村のほうを向いていて、野村はカップを床に落とした。

そんな馬鹿な。手が震え始める。

昔の姿のままなんて。

「久しぶりですね、野村先生。相変わらず同じ場所で同じことをしているんですか」

「何の用だ？」震える声はか細く、弱々しかった。

「あんたはわかっていたんだろ？ 大昔、俺が元凶だって。だから俺を鏡に閉じ込めた。あの鏡を使って俺が企んでいることがわかった。勘のいい女だよ」

野村は逃げたかった。いまずぐにでも。

過去の記憶。もう全てが終わったはずなのに。

沢村翔太。過去の亡霊が、今こうして顔を出した。

まだ若かった。図書室の教諭という仕事を通して本の好きな生徒達と触れあうのが楽しかった。沢村翔太もその一人だ。毎日、一人で本を読んでいた。友達はあまりいないのだろうと思った。彼は本が好きだが、本に逃避しているという印象も受けたからだ。昼休みに食事も食べないで図書室にくるくらいだから。

お勧めの本を紹介したりした。だが彼はそんな本には興味を持たず、得体のしれない本を読んでいた。図書館の蔵書ではない。自分で持ってきた本なのだろう。黒魔術について、色々載っている本ら

しい。不気味な子だわ、と当時は思っていた。放置したのがいけないのだらうか。沢村翔太はある種の力を得るようになっていった。七不思議の一つ、悪魔を呼ぶ鏡を彼がどうやって見つけたのかはわからないが、彼はそれを見つけ、そして化け物達を呼び出し、学校を恐怖のどん底に突き落とそうとした。

それは許せない行為なのだ。鏡の伝説はこの学校の不思議の一つで、数年おきに出現し、生徒を鏡の世界へと引きづり込むとされていた。鏡はあちらの世界とこちらの世界をつなぐ扉なのだ。

それを、この生徒は見つけ出し、利用した。そして彼は最終的に、学校を破滅へと導くためにさらに怪物をこちらへ呼び寄せようとした。

それを彼女は知ったのだ。鏡に向かって儀式をしている彼を見て、犬の首や、猫の首に囲まれた旧校舎の開かずのとある教室には異様な雰囲気が立ちこめていた。

原因はわかった。この生徒をのさばらせるわけにはいかない。野田は沢村を鏡に突き落としした。そして鏡は消え、以来、怪物は見えなくなった。

「あるとき俺は向こうの世界で化け物たちに食われ、俺の精神は化け物と同化したんだ。どうだ、昔と同じ姿だらう？　だが本当の姿は……ちよっと怖いかもね」

言い終わると沢村は変貌を遂げた。

もう、大丈夫なんだろう。きつとそうだ。もう元の生活に戻ってもいいってことなんだ。

両の頬を叩く。うん。お帰り普通の日常。これから先はいつもの女子高校生活が待っている。

由麻はトイレ掃除を済ますと、教室に戻って鞆を取り、それから教室に出たところで妙な違和感を覚え、嫌な予感がした。

困った。遙はいない。

嫌な予感は確信へと変わっていた。

由麻は頭を抱えなくなってきた。まだ日常生活には戻れないということだろうか。

とにかく、状況は慣れてきている。カバンから取り出すものは、聖水入りの霧吹きと五芒星のシート。さらに絶大なる効力を持つというゴムの棒……どれも辰美が言わなければ絶対に効力を疑うであろう代物だが、これまでゴムの棒以外はきちんと結果を出している。由麻は辰美の用意してくれた武器を絶対的に信頼していた。

さあて。一人か。いやになるな。教室に戻ったほうがいいのか、ここで待つか。

深呼吸をする。恐怖心をなくせ。そうしないと連中はつけあがる。返り討ちにするのだ。これまでのように。

怪物は廊下の奥から出現した。刺のついたハンマーを床に引きずって、仮面の巨体がこちらに近付いてくる。

臨むところ。由麻は臨戦態勢に入るが、背後にも物音を聞き、由麻は慌てて振り返る。

ピエロが立っていた。細身には合わない巨大な鎌を持っている。まずい。二対一で、そしてピエロはすぐ近くにいて、鎌が由麻を襲った。

棒が効力を発揮したのは初めてだった。咄嗟だった。由麻は手に

していた棒を振るわれる鎌に当て、奇跡的に攻撃を凌ぐことができた。

ピエロが口を開けて笑い出す。口の中は鮫のように無数の歯が生えていて、どれも鋭いものだった。

由麻は逃げる算段をする。恐怖心をなくせといってもこの圧倒的な現実的虚実に対し、無心になれというのは無理な話で、ましてや敵が複数なのだ。辰美の言うことは全て正しいかもしれないが、由麻には難しかった。よって由麻は、ピエロに背を向けて近くの階段を駆け下りた。一階にいけば外に逃げれるかもしれない。今日のところは負けを認めてやるよ。

一階に待ち構えている者はいなく、由麻は幸運だと玄関まで走った。しかし、玄関に行く前に不思議な光景を目にすることになった。窓が真っ白だった。霜が降りているわけではなかった。そんな色ではなかった。まるで靄がかかったかのように、大量の牛乳をぶちまけたかのように、窓は白かった。

おかしいなと由麻は思った。こんなことは初めてだ。

正面玄関。下駄箱から外履きに履き替えている暇はない。すぐに扉を開けようとするが、扉の外は白一色だった。

扉は開いたが、強烈な冷気と不愉快な違和感に由麻は全身を震わせる。

首を振る。この先に行くなんて無理だ。何が待ち構えているか、わかったものではない。

白さの中に、黒い影が見えた。それは人影のようでもあったが、少し違うようだった。所々刺が生えているようにも見える。

由麻は慌てて扉を閉める。影は消えた。

駄目だ。由麻は絶望的な気分だった。外には出れない。どうしろと言っのだろう？ 連中に勝つしかないのだろうか。そうしないと、この校舎から出ることは叶わないのだろうか。

足音がする。さっきのピエロが追ってきたのだろうか。由麻は霧吹きを握りしめる。

しかしそれは貴春だった。

「由麻か」

「貴春君？」

由麻は仲間を見つけて安堵したが、少し警戒した。これも新手の罠かもしれない。

「本当に貴春君なの？」

「ああ、俺だ」貴春はきよんとしている。

足音が沢山聞こえてきた。駆けつけてきたのは繁と香澄それに遙だった。

「由麻、無事だね」遙がほっとした顔をした。

仲間が揃ってきた。由麻には有り難かった。

「みんなどこにいたの？」

「いや、ちよつと家庭科の裁縫の残りを片付けてた。偶然にも俺達だけってのは、ちよつとできすぎてるよな」繁が言う。

「窓の外どうなってるんだろ……ねえ、由麻。外には出られそうにない？」

香澄の問いに由麻は首を振る。「やめたほうがいいと思う。うん。

無理だよ」

貴春は由麻の言葉では納得いかないのか、扉を開けたが、すぐに閉めた。

「なんだこれ」

そして彼は下駄箱を蹴り飛ばした。荒い息が漏れる。そして大きなため息。

「辰巳は帰っちゃったかな」

「わからないけど、探してみようよ」遙が言った。

ハンマーを引きずる音がかすかに聞こえた。由麻は廊下の奥を見る。仮面の男に、さらに斧を持った変態男だ。ピエロはいない。

「見つけたぞお！」斧を持った男が猛烈な勢いでこちらに向かってくる。

「あいつは俺に任せろ」貴春が言う。「ハンマーの奴はそっちで対

処してくれよ」

簡単には行かなかった。一度に沢山のことが起こった。まず、天井から手が伸びて繁を捕らえた。繁は上に持ち上げられ、それから強く吹っ飛ばされた。

窓ガラスが割れ、そこから黒い翼を生やした悪魔めいた存在が現れた。かぎ爪のある手の指は三つで、頭部にはユニコーンのように長い角を生やしている。

由麻はパニックの中、教室のほうに目を向けた。不愉快なほどの気持ち悪さを一年B組の教室から感じたのだ。一体何なのだろう。教室の中には一人の髪の毛の長い女性がいる。その女性に、強烈な何か、体の芯から威圧されるようなものを感じて、由麻はその場でへたりこんでしまいそうになった。

負けるわけにはいかなかった。仲間が混乱している。強気になってきた遙も脅えている。ハンマーの仮面の化け物、斧の変態野郎。それから天井にどうやってか知らないがくっついていて異様にやせ、ところどころ皮膚が崩れているゾンビめいた存在がいる。ここで自分が奮起しないと、仲間は壊滅してしまうかもしれない。

貴春は動いていた。天井の化け物にスプレーを浴びせ、天井から落としてのたうち回らせた。

由麻は追い打ちをかけるように棒でのたうち回り、奇声を浴びる化け物を叩いた。化け物は両の手で這いずり、素早く窓の外に逃げた。逃してしまっただが、構わない。

教室を見ると、女が扉の前に立っていた。一体この女は何者なのだろうかと由麻は怪しむが、すぐに女の正体が判明した。

由麻は凍り付いた。

五十六(前書き)

もう終わり近いです

由麻の様子がおかしいことに遙がいち早く気づいた。香澄は繁の様子を気にしているし、貴春は迫り来る化け物を牽制している。一年B組の扉の前には得体のしれない女が立っている。見たところ人間だが、ざわつくこの感じからいって、人間ではないのだろう。遙は感覚でわかった。化け物たちと戦ってきたせいだろうか。このように、第六感が働いてしまう。

遙は愕然とした。女の顔を見て、それが誰なのかわかったからだ。まさか、ありえない。遙は首を振る。しかしそれは記憶を洗ってみても、間違いないように思えた。見間違うはずがない。それは、由麻の母親だった。

由麻の母は由麻ににじり寄ると、抵抗もしない由麻の首をゆつくりと絞め始めた。

遙は呆然としながらも由麻が危ないことに気づき、すぐに行動を起こした。由麻の母にスプレーをかけたのだ。

由麻の母が悲鳴を上げて後退し、憎々しげな目を遙に向けると、消えた。

「由麻！」腰を抜かしたのか、その場に膝をついた由麻の肩を揺さぶる。

「大丈夫なの！ 由麻！」

返事はない。

「由麻！」

由麻がゆつくりと振り返った。

「今の……母さんだったよ」

「違うよ！ あんたの母親はもう死んでるでしょ！」

それは間違いもない事実だった。由麻の母親は、散々由麻を虐待したあげく、投身自殺を図ったのだ。由麻にとってのトラウマは、友人の遙にとっても忘れがたい嫌な過去だった。

「しっかりして！ あいつらの作った幻にだまされちゃだめ」

由麻はふらふらと立ち上がった。

「そつだよね。母さんは死んだよね。生き返るわけがないよね」

由麻……。

斧を持った男が遙に近付いていた。血走った目は、舐めるように遙の全身を見ていた。

「変態野郎！」

スプレーを振りかけると、斧男は少しうろたえたが、思うのほか効果がなかった。

効かない！ 何で？

「そんなもので俺が参ると思ったか？」

斧男は斧を振るい、遙の胸を撫でた。致命傷には至らなかったが、振るわれた斧の傷口から血が噴き出した。

「遙あ！」

貴春は仮面の男を待ち構えていたが、遙が怪我をするとすぐに駆けつけて斧男にタックルをかました。斧男と一緒に床に転がるが、斧男はすぐに起き上がって貴春を蹴り飛ばす。

貴春の顔には一角を持つ悪魔めいた化け物がいた。貴春は慌てて起き、そのかぎ爪の餌食になるのを避けた。貴春はスプレーを一角の化け物に振り付けるが、化け物は少しうろたえただけで、全くダメージを受けていないようだった。

どうなつてやがる？ まるで効いてないじゃないか。

貴春は化け物を蹴り飛ばした。こちらのほうが効いたようで、軽く吹き飛んだ。

逃げるなら、今しかない。斧男は起き上がるうとしてしている。その隙を生かす。ハンマーの化け物は鈍いから、脇を通り過ぎることも可能かもしれない。

傷ついた遙を肩に、貴春は走った。繁は大丈夫のようだ。由麻もなんとか走ることができそうだ。

五人は走る。仮面の男の脇を通る。予想通りそれは上手くいったが、その先にはいけなかった。

男の姿。貴春はそれを認めた。自分と同じくらいの歳の、だが冷酷な顔をした者。

「ここから先は通れないなあ」

「お前は何者だ」

貴春はすぐの相手の異常性に気付いた。おかしい。これが他の化け物と同じはずがない。

こんなにも禍々しい存在。

きつとこれが……本当の敵なのだ。

「察したようだね、貴春君。聡い子だ。だけど君は死ぬし、君の間も死ぬ。僕らと同化するんだ。そして永遠の痛みを味わう。永遠さー！」

「そんなことはさせない」

鋭い一閃の光芒が、少年を貫いた。少年は驚いた顔を見ると、ふっと消えた。

最終話（前書き）

終わりです。矛盾点や手抜きは後で修正すると思います

最終話

「辰巳！」貴春が叫ぶ。

辰巳が駆けつける。敵は逃がしてしまった。だが、まだまだすぐに向かってくるだろう。いつの間にか他の化け物もいなくなっている。

「連中は本気だよ。旧校舎に行こう」

「はあ？」

「鏡！ 鏡を壊すんだ」

「それよりも辰巳、遙が！」

由麻の悲痛な叫びに辰巳は遙が怪我をしたことに気付いた。辰巳は脂汗を流しながら、遙の傷口に触った。そして何かを念じ始める。遙の傷口がみるみるうちに治り始める。

「すごい……」

遙は起き上がる。

「あれ……あたし、死んだのかと思った」

由麻が遙に抱きつく。

「よかった……遙……」

辰巳は荒く息をついた。今の作業で随分、疲労したように見える。

「さ、無事を喜んでばかりはいられない。鏡を破壊しないと」

「だけど鏡なんてもうないじゃん」香澄が言う。

「連中はその力を最大限に発揮している。鏡はそれに応えるかのよう
に具現化しているはず。これは敵にとって最大のチャンスでもあるように、私達にとっても最大でこれ限りかもしれないチャンスなの」

「よくわからないけど、旧校舎に行けば無くなったはずの鏡がある
かもしれない。それを破壊できればこんなことは終わるってことか
？」貴春が言う。

「そういうこと！ さあ、走って」

最後の戦いが始まったのだが、彼らにはなんだかよくわからず、とにかく辰巳についていくしかないんだらうと思っていた。

由麻の母親は由麻にとって最悪の悪夢でしかなかった。

由麻の妹は産み落とされたが、すぐに絶命した。それから、母親は狂っていった。そして由麻を虐待するようになった。張り倒されることはしょっちゅうで、由麻は母親を母親だとは思えなくなった。死ぬ前が一番酷く、一時期由麻は母親の執拗な暴力に精神的におかしくなりかけていた。遙の存在だけが由麻にとっての救いだった。

そして母親は死に、由麻は救いと虚無感を両方覚えた。悲しい事件だったが、これでよかったのだと思った。

母親のあの顔。見るだけで息が止まりそうになった。

だけど……遙が死にかけた。それは母親の恐怖なんてどうでもよくなるほどの恐怖。友人の死。

そんなことはさせない。

由麻は辰巳のすぐ前を走っていたが、遙の手をつないで、遙の確認は怠らなかつた。辰巳のどういう業なのか、遙は大丈夫そうだし、さつきは本当に肝が冷えた。

ここから先、外廊下につながるドアを開け、外廊下をまっすぐ行けば体育館につく。体育館の隣に旧校舎はある。

しかしピエロが邪魔をする。だが相手をするのは普通の女子高生ではなかつた。

光の一閃にピエロは刺し貫かれ、言葉を発する間もなく倒れた。

辰巳も本気なんだな。由麻は思った。すごい。すごすぎる。こんなのが仲間だつたら、絶対大丈夫だよな。

外廊下に達する。辺りは霧に包まれている。

「これが連中の手だよ。周りを覆って外に出させなくする。だけどあたしには通じない。しつかりついてきなよ」

外廊下を走る。背後から奇声が聞こえる。鈍男だらうと由麻は気付いたが、無視する。またあとで相手をすればいい。

旧校舎についた。旧校舎の扉の前には母親の姿があった。

由麻はかつてないほど腹を立てていた。連中は自分を恐れさせようとしている。しかし、もう逆効果だ。あれは、ただこちらを苛立たせるだけの存在だ。

「消える！」

由麻が叫ぶと貴春や繁が驚いた顔をした。

母親の姿は消えた。

扉を辰巳が開ける。

旧校舎は暗く、不気味だ。そして背後には鉦男がまだ追いかけてきている。

繁が扉をしめる。

「俺がここで足止めする。香澄と一緒に。辰巳達は鏡のほうへ。美術室にあるんだろ？」

「そうだよ。気をつけてね。連中はほぼ実体化してる。香水の力なんかを当てにしないでね」

辰巳は言わなかった。それらが全て各々の思いの力のみで効力を発揮していることを。スプレーや魔方陣に力なんてない。ただのスプレーだし、ただの魔方陣が描かれた布だ。彼ら自身の思いが力を生んでいる。だがこれは知らないほうがいいのだろう。

二人を後に、四人は走った。

扉を開ける。美術室は二階だ。しかし……。

襲いかかったのは吸血様だった。彼は、コウモリを飛ばして遙を捕らえた。

遙は吸血鬼の手の中だ。にたりと、吸血鬼が笑った。

「遙！」

由麻は遙を救おうとするが、コウモリたちが邪魔をする。

辰巳たちの姿が見えない。貴春の声。何かと戦っているのだろうか。

階段が見える。

だが遙を助けないと。

「由麻！ 早く鏡を！ こっちは……大丈夫だから！」

遙は必死に吸血様と応戦している。が、コウモリは周りを覆い、吸血様は余裕の笑みを浮かべている。

早く行けばいい。そして鏡を壊せば、遙も、みんなも救える。

階段を駆け上がる。しかし、躊躇う。遙が！ 襲われているのに、階段を上がりきる。急に静かになる。美術室の扉が見える。近づき、扉を開けた。

鏡は確かにあった。実体化しているということなのだろうか。鏡は緑色のガスのようなものが渦巻いている。

これを破壊すればいい。だがどうやって？

椅子。机。壊すものはいくらでもあることにすぐに気付く。そうとなれば、早速壊してしまおう。

鏡の前に先ほどの少年が現れた。

「やめておこつよ。どのみち君たちは僕たちには勝てないんだから」

由麻の動きが止まった。自分の意志とは裏腹に彼女は動けない。

母親の姿が再び現れた。狂気に取り憑かれた、死ぬ間際の笑みを張り付け、由麻に近付いてくる。

響。響！

絶望の中、由麻は響のことを思った。

「やめろ！」

見知った声でした。

母親が悲鳴を上げ、顔が溶け、そして体が崩れていく。

母親の背後には響がいた。その手には香水の瓶が握られている。

「動けるか、由麻」

しかし動けなかった。

「おいおい色男。僕の力をなめてもらっちゃあ、困るね」

「由麻、しっかりしろ。俺だって怖かった」響は背後の少年の声には気を取られずに言葉を続ける。「だけど辰巳に頼んで、トレーニングした。心を強くするな。それで、俺は陰ながらお前たちをサポートしようと思ってたんだ。だけど、お前は俺より強い。あいつみ

たいな奴の呪縛なんて解けるはずだ」

由麻は頑張ってみたが、やはり動けなかった。

「無駄だって言ってる」

「由麻！」響は大きな声を出す。「俺はお前が好きだ。愛してる」

由麻は硬直した。響が何を言っているのか、理解できなかった。

そして由麻は理解した。

「あたしも響が好き……愛してる！」

由麻は途端に動けるようになり、唐突のことだったので危うく転びそうになった。響が由麻を支えた。二人は抱き合った。

「もっと早く、こうしてればよかった」

「響」

「おいおい」

背後で呆れ声を出す少年を、二人は見た。

「消える」

「あたしたちの前から失せてよ」

「だから、そうはいかないっていつてるだろ。頭の悪い連中だよ、全く」

響は嘆息する。

「なら、これを食らってもらうしかないな」

響はそういつて少年の前に立った。

由麻は響が何をするのだろうと固唾を呑んで見守った。

しかし響は突然由麻に再び近付くと、由麻を強く抱きしめるとキスをした。激しいキスだった。由麻にとっては初めてのキスだったが、濃厚なキスに由麻は頭がくらくらしてきた。

やがて響が顔を離れた。

「響……わけがわからないよ」

「これが俺の力だ。俺の想いの力。その力は誰よりも強いんだ。だから、俺は負けない。あんな奴には絶対に負けないんだ」

響はナイフを手に、少年に向かっていった。そして少年を深々と刺した。

少年は最初笑っていた。おそらく、彼にはそんなものは効かないものだったのかもしれない。辰巳の攻撃でも彼は全く動じていなかった。

しかし、少年は明らかに苦しんでいた。

由麻は動いた。今がチャンスだった。椅子を持ち、鏡に向かって放り投げる。鏡は意外と丈夫かもしれない。小娘が椅子を放り投げた程度では割れないかも知れない。由麻の懸念するが、鏡は彼女の心配通りにはいかずに綺麗に割れた。

耳をつんざくような凄まじい絶叫と共に、少年が光輝き、そして全く別の生き物になった。それは蛇のような、鬼のような、カメレオンのような、奇妙な存在だった。しかしそれが姿を見せたのはほんの一瞬で、化け物は消滅した。

そして、静寂が訪れた。

「終わったよ、由麻」

響は由麻の手を取った。

由麻の顔は晴れない。遙達が心配だったのだ。

遙達は全員無事だった。辰巳も、貴春も、繁も香澄もそれぞれ戦っていたようだが、唐突に相手が消滅したので呆然としていたようだ。

それから、本当に平和が戻った。

由麻と響はクラス公認カップルになった。たまに遙にからかわれるが、由麻はそれも仕方ないなと思っている。カップルといっても今だ遙とは響を連れても一緒に遊ぶし、香澄達とも遊ぶ。相手がない同士の貴春と遙だが、別に気にしてない様子だった。

辰巳は前と変わらず、瀬奈とばかり喋っている。以前ほど由麻たちと関わらなくなった。

野村瞳は殺されていた。死因は不明で、今となっては真相は闇の中で、由麻たちだけの秘密となった。野村の死は学校をしばらく震

撼させたが、やがて風化していった。

辰巳が帰ろうとしたとき、由麻と響が彼女の横に並んだ。

「あら、どうしたのかな、恋人同士のお二人さん」

「カラオケでも行こうかと思って」由麻が言う。

「辰巳も久しぶりに、な」響がにやにやしている。

「俺と辰巳、どっちが歌が下手か競おうぜ」響の背後に繁がいた。

「繁のほうが下手かもね」繁の隣の香澄が言った。

「いや、辰巳も負けてないぜ。俺、耳押さえたもん。ジャイアंक
ラス」貴春が言う。

「あたしも下手だけどね」遙が由麻の隣にいる。

「遙は普通だよ」由麻がフォローする。

「しょうがないね、行ってやるよ」辰巳は微笑した。

最終話（後書き）

読んでくれた人に感謝です！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7462x/>

夢魔

2011年10月24日03時17分発行